

【題名】

「ザ・バッシング。

ホリエモン騒動の陰で…」

スポンタ中村（中村厚一郎）

職業：映像ディレクター

経歴：

今村昌平の映画学校を卒業後、独立系プロダクションにて、テレビ・ラジオ・イベント・舞台・ミュージカルを経験する。現在、映像会社・専務取締役。

2004年からブログ活動を開始、2005年、ライブドアパブリックジャーナリズムに参加。時事通信社の湯川鶴章氏（「ネットは新聞を殺すのか」NTT出版）の知遇を得る。

2006年、歌川令三氏（「新聞がなくなる日」草思社）のジャーナリズムのそれから研究会（東京財団）に参加。

2007年7月、ソフトバンク新書から「サイバージャーナリズム論」が出版される。

スポンタ通信 2.2 <http://sponta.seesaa.net/>

【梗概】

2006年。ジャパン市民インターネット新聞の市民記者交流会が開かれた。ジャパン市民インターネットはインターネットを使った誰でも市民記者になれる新しいメディアである。パネルディスカッションの特別ゲストは巨大匿名掲示板・あなざあチャンネルの管理人ゆきひろである。ゆきひろは、あなざあチャンネルの斬新さを強説し、市民記者の登録が煩雑な市民インターネット新聞は成功しない。と言い切る。主宰者たちは、自分達のメディアが既存メディアに対抗できるものだと思っているが、それは極めて疑わしい。私が市民記者になったのは、それから一年ほど遡る。

2005年、オープンゲイトの老舗ラジオ局の株式大量取得騒動の中で、キュウタロウは市民インターネット新聞をつくった。ブロガーとして活動していた私は早速参加する。キュウタロウの社会的注目度は高く、オープンゲイトが作った市民インターネット新聞も注目を浴びた。キュウタロウは、それを「経費節減です」と言ったが、その主宰者・藤堂は違っていた。彼は既存マスコミに反旗を翻すためにこのメディアを作ったのだ。

私は、市民記者として記事を続々とあげていくとともに、市民記者たちとの交流が始ま

る。だが、藤堂の関心は既存マスコミを打倒することしかなく、市民記者たちは置き去りにされる。市民記者として頭角を現した私は、あなざあチャンネルからバッシングされた。掲示板には、我家への襲撃宣言もなされた。私のような事例が続発すれば市民記者は記事を書くことができない。私は根本的な問題を解決するための提案をしたが、藤堂から無視される。その後、私の記事は一切インターネット新聞に掲載されぬことになり、オープンゲイトから追放される。

市民記者として記事をかけなくなった私は、ふたたびブロガーになったが、そこでマスコミ人の朝永や成宮と出会う。通信社に勤務する朝永は新聞の暗い未来を憂って本を書いている。一方の成宮は、地方紙記者の立場でブログを書き、マスコミを徹底的に批判し、その新聞社を退社していた。ふたりのマスコミ人との交流を経て、私はインターネットとマスコミがいかに異なるかを実感する。

そして、ブログで読者たちと交流し一冊の本をつくった女性小説家に興味を持ち、そのオフ会に参加する。オフ会は単行本の出版記念を兼ねたものであり、その本に寄稿したブロガーたちが集まっていた。だが、本が話題にされることが少ないとともに、地方からやってきた寄稿者たちも、そのほとんどが紹介されないという奇妙な進行だった。私は、地方からやってきてこのイベントに参加したブロガーたちの気持ちを思い、オフ会の感想をブログに載せた。すると、小説家本人を含め、激しい非難がやってきた。驚いたのは、批判された小説家本人ではなく、不快な気持ちになったはずのブロガーたちの多くが、私に対するバッシングを始めたことだった…。

「ザ・バッシング。

ホリエモン騒動の陰で…。」

スポンタ中村(中村厚一郎)

これは小説である。したがって、書かれていることが実際の個人・団体をイメージさせようとも、すべて私の頭の出来事ある。2008年の時点において、インターネットが仮想現実

なのかどうか分からぬが、もしそうだとしたら、小説というプラットフォームはインターネットを表現するにふさわしい。

市民メディアの台頭

「この新しいメディアを社会的な影響力を与えるような存在に育てて行きたい」

日本3大新聞のひとつの編集委員を契機に市長を経験した社主は語った。春まだ浅い2006年3月11日。東京・御茶ノ水でジャパンインターネット市民新聞の市民記者交流会が開かれていた。会場になっている大学の施設には、300名ほどの市民記者たちが集まっている。

大学の大教室に急ごしらえで作られた壇上には、新聞の運営者たちが陣取っている。彼らは、かつてメジャーの新聞社やテレビ局で働いていたり、あるいは市民活動家として知られた人であり、メディア関連の現役の大学教授などであった。

私は会場の後方斜め右に陣取った。サッカーでいえば、アウェーの気分。私がスポンタというハンドルネームであなざあチャンネルからバッシングされたのは2005年4月のことである。当時、スポンタで検索すると数十万の検索結果があった。もちろん、インターネットでの出来事だから、このリアルな会合での私は無名な存在でしかない。ただし、インターネット市民新聞に関心のある人ならば、スポンタの名前を知っている。

「ジャパンインターネット市民新聞の記事のクオリティーは、一般紙と比べるとまだまだのようです。私は、市民の皆さんがちゃんとした記事を書けるように指導していきます」

長髪で髭をたくわえた編集長が誇らしげに語った。すると、髪の毛を短く整えた若い人が発言する。

「自分の記事がインターネット新聞に載ったときの感動は忘れられません。新聞記者になれるなんてことは夢でした。こんな素晴らしいことが実現するのもインターネットのお蔭です。これからも編集部の人達の力を借りながら、すこしでもいい記事を書けるようにがんばります」

会場には参加者たちの情熱が沸き起こり、それは日々市民記者の記事を校正・指導している編集者たちの情熱と交じり合い、暖かいバイブレーションが広がっていく。その波の中で、私はいたたまれぬ思いでいた。

「ジャパンインターネット市民新聞の特徴は何か。それはこのメディアが非営利的ということ。既存のメディアは広告収入に依存しているため商業主義から決別することができない。でも、このメディアは違う。ジャパンインターネット市民新聞は、市民記者の皆さんとともに、あるべきジャーナリズムを実現していきましょう」

テレビ出身の編集委員がそう述べたとき、会場にいた参加者から拍手が沸き起こった。たしかに既存マスコミのほとんどは広告主に配慮するために歪んだ言論を提出している。その事実間違いはない。ただ、広告主だけが既存マスコミの腐敗を招いているのではない。誤報ややらせ記事が発生するのは原因の大半は実は広告主のせいではなく、偏向したイデオロギーのもとでメディアが運営されているからである。

間違っていることは正す。それが私の性分。あんぐらメディアですでにバッシングを経験している私に怖いものはない。生ぬるい会場の雰囲気の中で、私は何時それを指摘しようか、時をうかがっていた。内面の血の騒ぎを手なずけながら、虎視眈々と機会を伺っていると、ゲストスピーカーが遅刻して登壇した。

巷の評判で、彼は遅刻の常習者だという。ゲストは巨大アングラ掲示板・あなざあチャンネルの管理者として知られるゆきひろである。あなざあチャンネルは2008年の今、その存在は誰でも知っているだろう。かつて、九州のバスジャックの犯人が犯行予告をした。この掲示板を使ってテレビ局のボランティアイベントを妨害するムーブメントが広がった。映画やテレビの原作となるヒット小説も出来上がったし、数々の都市伝説を紡いできた。

その一方、その掲示板を相手に名誉毀損や誹謗中傷に関する多くの裁判が起こされた。ゆきひろは掲示板に名誉毀損や誹謗中傷を書き込んだ訳ではない。だが、彼は多くの案件の被告人になった。インターネットは匿名のメディアと考える人が多いのかもしれない。しかし、実際はIPアドレスというものがやり取りをされていて、たどることができる。だから、誘拐事件や現在進行形の刑事事件では警察権力が介入して事件の解決が図られることも珍しくない。なのに、裁判を立ち上げる企業や個人はIPアドレスを辿って相手をつきとめることもせず、ゆきひろを訴状の宛名にした。

最初のうち、彼は東京地裁に日参していた。ただし、彼はほとんど弁明をすることなく、すべてを受け入れた。結果、ほとんどの裁判で彼は敗訴し、数億円ともいわれる賠償金を請求された。だが、彼は一切の支払いをしない。彼の資産は分割され、事実上、訴訟人から手の届かぬところにあった。ゆきひろには彼独自の論理があり、それが司法の関与をかくぐってあなざあチャンネルを継続させてきた。

「ジャパンインターネット市民新聞をどう思いますか？」

老齢の司会者は単刀直入にゆきひろに尋ねた。

「今日、ここに来る前に、ちょっと覗いて見たんだけど、あってもいいし、なくてもいい。そんな感じかな...」

「失敬なことを言いますね」

年高のいった司会者は若者との対話を楽しむ余裕をみせながらも、不快感を隠さない。「あはは...。あれ？ これってお気を悪くするようなことですかね」ゆきひろは会場の反応を他所に続ける。

「たとえばテレビがありますよね。たくさんの人たちがテレビを見ている。テレビを楽しんでいる人もいるけど、中には、テレビはつまらない。と不平を言う人がいる。中には、口汚く罵る。こんなメディアなくなってしまう。と。でも、冷静に考えてみれば、誰も、テレビを見なさいなんて強制していません。だから、自分が嫌だなあ。と思ったら、テレビを観なければいい。スイッチを押してテレビを消せばいい。インターネットなんて、その最たるものだし、ジャパンインターネット新聞が例外になるはずもない」

「なるほど……。でも、間違っていることが伝えられているのなら、その間違いは正さなければいけないでしょう」

「間違いであるというのは、テレビ番組をつくっている人達と、観ているあなたの価値観が違うだけじゃないんですか。そもそも何が正しいのかなんてことを誰が審判をくださるんですか？ それともあなたは神だとでも言うんですか」

ウェブ界のカリスマともいえるゆきひろが、神という言葉を使った。ネット者にとって神という言葉は、自分の意見が絶対的なものとして他者の意見を受け入れぬ人、そして、その説を回りに説く傲慢な人というニュアンスを帯びている。そして、その言葉は、彼の言語遊戯の道具だった。ネットに詳しくない司会者にはそのような神という言葉の持つニュアンスを感じる感性を持ち合わせていない。ゆきひろの発した神という言葉は、直ちに、市民活動家としての彼が批判してきた概念である天皇制に繋がっていく。自然科学の常識からいえば、天孫降臨というストーリーはばかげていて、理性的に天皇制を否定するのに格好のツール。ゆきひろが神という言葉を用いたとき、老齡の司会者の余裕を持って語り始めた。

「そうかな…。記者が現場に足を運び自分の目で見て記事を書く。現場のカメラマンは事実にはレンズを向けビデオテープに焼付け、それをテレビで放送する。新聞でも現場を目撃した記者の書いたものが記事として掲載される。そこには真実を伝えたいという意志が存在する。しかし、実際には、真実を伝えられることを阻もうとする様々な圧力・権力が存在する。そういう圧力から隔絶したところでメディアを形成する。それがジャパンインターネット市民新聞の価値であり、重要なところだ。君のようなインターネットしか知らない人には分からないことかもしれないけれど」

「ま、それはそれで、あなたたちが信念を持ってやっていくのならば、それでいい。私が口を挟む話ではないですよ」ゆきひろは苦笑した。

「ただし、ネットに繋がっている人は、スイッチを切る権利を持っている。ただそれだけのこと。いや、違うなあ。最初からチャンネルを合わせることもしないでしょう」

「政治的無関心。いまの若い人達はノンポリなんだなあ…」

司会者は同年代の壇上のパネラーたちに同意を求め、大げさに苦笑してみせた。人生の大半を市民運動についやした人物である。彼の人生を捉えた情熱のほとんどは体制や権力に向けられたものだった。だが、彼の本当の敵はゆきひろのようなノンポリ、無関心者だったろう。

「インターネットには、ブログとあなごあチャンネルさえあればいい。そんな感じかな」
「・・・」

「だってそうでしょう。何かいいたいことがあれば、ブログをつくって自分で発言すればいい。でも、炎上、つまりインターネット上で批判されるのが怖かったり、実名で書くのが嫌だったら、あなごあチャンネルに匿名で書き込めばいい。書き込めば、たくさんの人がそれを見ていて、議論が沸き起こる。それで何の不都合もない。最近ではマスコミがしっかり見届けてくれていますから」

「だが、それをあなたたちあなごあチャンネルの人達はマスゴミと揶揄するでしょう」

「いいじゃないですか。話題にしてくれるだけ価値があるってものですよ。その点、あなごあチャンネルでジャパンインターネット市民新聞のことがどれだけ話題にされたか。いまはほとんど無視に近い状況じゃないかなあ」

「そんなことは・・・」

ジャパンインターネット市民新聞の運営者の一人でもある司会者は、反論を試みようとしたが、口を閉ざすことしかできなかった。何故なら、あなごあチャンネルでジャパン市民新聞が取り上げられた代表例は、編集委員の一人がインターネット上のイーラーニングで運営される大学の資格詐欺に参画した疑惑に関するものだったからだ。

ジャパンインターネット市民新聞は、本誌サイトの他に市民記者のための掲示板を設けている。それはミキシーのような SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)的な言論空間であり、市民記者登録者しか書き込み・閲覧できぬ場所だった。見ず知らずの市民記者が SNS 的な空間で集うの奇妙なことだが、そんな場所だからできる市民記者同士の親睦や情報交換が行なわれていた。そこに、あるとき編集委員の不祥事に関する発言がアップされた。

不祥事といっても、ジャパンインターネット市民新聞の編集部が関与した事件ではないし、関与を噂された編集委員も名前が使われた程度のことであって、積極的に詐欺に関わったり、そこからの利益を得たというのではなかった。ただ、ここに書き込まれたことによって、当該案件は運営者にとって周知の事実となった。

しかし、この件についてジャパンインターネット市民新聞は一切の公式見解を出さなかった。それは言論の自由を標榜する市民メディアとして当然のことだった。市民記者の掲示板の記事を検閲し、削除することを自らに許さない。結果、編集委員を批判・糾弾する書き込みが晒され続けることになる。実は、こればかりではない。インターネット新聞の編集方針や運営方針に対して批判したり・提案された言論が掲示板に店晒しにされるが如く積み上げられていく。それこそがインターネットの特徴である。批判のコメントの数々は図らずも運営者たちの誠実を表現していたのだが、なんとも悲惨な風景だった。

「ジャパンインターネット市民新聞に限らずネット市民新聞がマスゴミに勝つなんてことはありえないでしょうね」

「どうしてそんなことが断言できるんだい」

「まず、発言のハードルが高すぎる。発言するためには、実名を明かさなければならないし、面倒な登録をしなければならない。そして、市民記者になったらなったで、編集者にアカを入れられながら記事を書かなければならない。こんな複雑なシステムじゃ何時まで経っても市民記者は増えないですよ」

「編集者がいるから記事のクオリティーが保たれるし、そのことが社会的な信用につながるんだよ」

「社会的な信用ですか。社会っていったい誰ですか。あなたですか。それとも私？ もし、あなたたち編集者が社会ってものを勝手にイメージして、社会的信用を搾えようとしているんだとしたら、既存のマスコミと何も変わらない。ボクにはあなた方のやっていることが、ユーザーが参入するためのハードルの高さを売り物にしているビジネスモデルにしかみえません。簡単にいえば、ステータスを売り物にする会員制クラブの一種とでもいうのでしょうか。ユーザーの参入の難しさを売り物にしたメディアが、ユーザーの加入促進を図ることでビジネスを成立させようとする。それって、ビジネスモデルとしてどうなんですかね...」

市民活動に人生の大半を費やした司会者は、理解することを諦めたかのように表情を固くしている。だが、ゆきひろの発する言葉が彼の条件反射を触発する。

「失礼なことを言ってもらっちゃ困るな。われわれがやっているのはネットビジネスなんかじゃない。ジャーナリズムなんだよ」

「結局のところ、あなたたちが目指しているのは当事者発信じゃないんですか。その点、あなざあチャンネルのユーザー数は一千万人です。これは日本の人口が一億三千万人として、一億三千万文の一千万。つまり、七パーセントの人があなざあチャンネルに関わっている。でも、日本の職業記者を集めたってせいぜい一万人程度。ジャパンウェブ新聞が今のシステムのままなら、市民記者は増えないし、当事者発信なんてとうてい無理でしょう。当事者発信を目指すのか。それとも記事としてのクオリティーを目指すのか。そういう根本的な問題を抱えているから、市民ネット新聞の加入者は増えない。ならば、クオリティーの面で既存マスコミに勝てないし、当事者発信の面でもあなざあチャンネルに勝てない」

老齢の司会者は不機嫌を隠そうともせず、ジャーナリズムは志であり、ビジネスとして捉えることが心外であると強調した。曰く、ジャーナリズムとは社会の木鐸である。と。

ジャーナリズムに疎いゆきひろが木鐸の意味を知っていたのかどうか。だが、ジャーナリズムという言葉の意味が空虚化しているなら、木鐸などという単語の意味を知っていようがいまいが価値のないことである。時間が来たことを理由に、決着のつかぬままゆきひろと市民活動家の議論は終了した。

アウェーの気分でカウンターパンチを狙っていた私は、ゆきひろの言葉の前で沈黙させるをえない。あの会場にいた何人が、ゆきひろが発したことの意味を理解したのだろうか。

いい記事とは破綻なく文章が綴られていることを意味するのか。市民記者と編集部はメールのやり取りで記事を校正していく。その作業は極めて国語的な作業であり、そこにジ

ジャーナリズムの本質があるのか。ゆきひろはそのことを一切語らなかった。だが、私には、そのことを想起せざるをえない出来事が続いていた。その端緒は1年前に遡る。

オープンゲイトの市民参加型ジャーナリズム

2005年、小雪まじりの2月。私は再開発地区に建つ最新鋭ビルの前に立っていた。老舗ラジオ局の株式大量取得で一躍有名になったベンチャー企業・オープンゲイトが新たに始めた市民参加型インターネット新聞の研修会に参加したのだ。すでにマスコミの寵児になっていたオープンゲイト CEO のキュータロウがラジオ局の株式を大量取得したことが発覚した年の初めだから、騒動の真っ最中だった。

回転ドアで死者を出したことで有名なこのビルは、入館手続きも最新鋭の設備を整えていた。オフィス階に上がるには、駅の自動改札のようなゲートがある。オフィスマンは専用のアイディーカードがあるが、研修にやってきた人間は持っているはずもない。私は指定されたロビイの場所で待つことにした。

指定された時間が近づくと、私と同様な参加者たちが集まってくる。この研修会は八千円の参加費を取っている。人によって金銭の価値観はさまざまだろうが、数時間の講義に八千円は高価である。なのに、50人近い人が集まっている。毎日テレビに顔を出すキュータロウ効果は偉大。私はやってきた係員の誘導で入館手続きを終え、38階のオープンゲイトの占有スペースに入っていく。休日のこの日、受付嬢の姿はなかった。

「日本のジャーナリズムは墮落している。インターネットで新しい言論をつくり、既存のジャーナリズムに対抗しましょう。是気とも市民記者になって、一緒にがんばりましょう」

講師であり、オープンゲイトがつくった市民参加型ジャーナリズムの主宰者である藤堂は受講生を前に胸を張る。この頃、この市民参加型ジャーナリズムの企画がどの程度知られていたのかは分からないが、私はパソコン情報誌のコラムの記事でこの企画を知った。私以外の参加者の中には、マスコミ関係学部とおぼしき大学生のグループがいたが、概ね社会人になってからかなり経った人が多い。

腐敗したマスコミに対抗して、市民が言論を作り出す。そのことを藤堂は高らかに告げる。

「新潟地震のときに、田麦山新聞というのが発行されていたことを知っていますか？」

新潟地震で壊滅状態になった十日町新聞に代わってなったとき、地元の人達がインターネットを使って情報交換をしたのが田麦山新聞である。新聞社は情報を得ても、その情報の裏を取らなければ情報をリリースできない。結果、新聞は情報の鑑賞者にとっては価値があっても、現場で実際に困っている人達には何の役にも立たない。しかし、田麦山新聞は、ボランティアの情報発信者が被災や救援物資の状況をそのままサイトにアップするから、現場で困っている人達にとって価値ある情報源となった。

「いまのマスコミは中央集権的にできあがっていて、身動きがとれない。でも、市民記者がボランティアになって情報を提供すれば、市民にとって有用で正しいマスコミができあがる。ただし、どんな情報でもアップしていいというわけじゃないし、情報を発信するには、ジャーナリストとしての矜持を持っていることが求められるんです」

私は「矜持(きょうじ)」という言葉は初めて知った。辞書を引くと意味は誇りだという。ジャーナリストとしての誇り。プライド…。藤堂はこの市民インターネット新聞の根幹を成す概念であるパブリックについて話しはじめた。

社会人になり学ぶことから離れている私にとって、一日をかけての講義は苦痛だった。隣の席には体育大学の講師という青年が坐っていたが、彼を相手にノートに講師の論理に突っ込みを入れて溜飲を下げていた。私は自分のノートに次のように書いた。

「パブリックなジャーナリズムというが、パブリックとは、パブの…、という意味だろう。それを日本語では『公の』と翻訳するのかもしれないが、所詮イギリスの「パブの』ということだ。つまり、パブで繰り広げられたのは市民ではなく、パブに行くだけの『余剰資金を持ち、生活時間にも余裕のあった都市生活者の』という意味しかもたない。確かに既存のマスコミはパブリックではなく、営利を追求するプライベートカンパニーなのかもしれぬ。とはいえ、酒手を持って集まった群衆の言論と五十歩百歩ではないか…。この研修の参加費用の八千円もまさに酒手として妥当な金額といえるのではないか」。

すべての市民を記者にするという志があってこそ、公のコンセプトにふさわしいはず。はたしてこのメディアに市民の名にふさわしいのか…。

大学で新聞学を講じてきた藤堂の論点は、私の思いとまったくかみ合わない。彼は、権力の検閲機関としての機能がジャーナリズムに期待されているが、それが果たされていないことにばかり注目している。そして、14世紀のグーテンベルグの活版印刷の発明からジャーナリズムと言論、そして、新聞、報道に関する変遷をかいつままで紹介していく。そして、ジャーナリストの目的や行動原則、追うべき責任、守るべき規律を紹介しながら結論づける。藤堂の講義を聞きながら、私の中にジャーナリズムについての疑問がひろがっていく。

市民がまずにしなければならないのは、自らを語ること。もし、自分のことを差し置いて他者を語る市民がいるとしたら、それは不誠実である。そんなことをしたら、たちまち「お前に言われる筋合いはない」と罵倒される。それでも尚、市民が他者を語るなら、そ

それは他者の悲しみさえも自分の悲しみとする市民の心根の暖かさゆえのもの。ならば、ジャーナリズムが記者に求める取材対象との独立などという禁欲主義とは相容れない。そのような規範で市民たちが記者となり世の中を語るようになれば、たとえ市民たちが藤堂の求める公正さや中立を意図して記事を書いたとしても、読者には傲慢と感じられるに違いない。

その日に私に刷り込まれようとしていたものは、ジャーナリストにはいかなるものからも独立することが重要であること(不偏不党の原則)。そして、どんな場合でも真実であらねばならぬということ(事実性の原則)。とはいえ独立性の保持は難しく、記者であることは否応もなくひとつの立場だから、究極の意味では客観報道はありえない。そのことを藤堂も心得ていて、補足することを忘れない。

市民記者に客観報道を求めるなら、それは第三者的な立場で取材対象を扱うことになる。だが、生活において第三者的な立場で出会う事象と市民記者の関係は野次馬でしかない。

藤堂は当事者発信や内部告発にも論を進めた。そして、内部告発する市民の登場を期待する。だが、生活者である市民記者がその立場を投げ打って記事を書くことなどほとんど狂人のすることである。彼は志という言葉で繕っていたが、市民記者が自己責任で発信しなければならぬ限り、そして、実名での発信を市民記者に迫るのなら、それを期待することなどできぬのが道理のはず。私は、そのような構造的欠陥をまったくイメージしない藤堂ののどかさに呆れて果てる。

「いやぁ…。私はインターネットには詳しくなんですよ…」

藤堂は誇らしげな表情の延長線上で、自らの能力の欠如を白状した。だが、それは彼にとってプライドの延長線上でもある。

「私たちがつくろうとしているのは、あなざあチャンネルのような言論のゴミ溜めではないんです。卑怯者が匿名で誹謗中傷の限りをつくす。そんな醜悪なインターネットを私たちのジャーナリズムが変えていきましょう」

2005年にはまだユーチューブは存在していない。そして、インターネット検索の結果がベストテンとして新聞・雑誌・テレビに引用されることも、まだ少なかった。ただ、巨大掲示板あなざあチャンネルの悪性はすでに批判の俎上に上がっていたし、援助交際や自殺サイトなども社会悪として認識されていた。藤堂がインターネットを社会悪のひとつとして見下しているのは当然のことだったのかもしれない。

私は藤堂に質問してみた。

「市民参加型ジャーナリズムと、個人ブログの違いってあるんでしょうか」

「新聞記者は新聞社で少なくとも数年。一人前になるには十年ぐらいの修行期間があります。それに比べてブログは何の勉強もしていない人達が勝手に書きなぐっているだけ。スタートから違うんですよ」

私は反駁する。「そうでしょうか。ブロガーの中には優れた記事を書いている人もいます。そういうブログの記事をリンクさせることでも価値あるジャーナリズムを作れるんじゃない

いですか」

「そうかな…。確かに私もブロガーの一人だし、同じように、価値ある記事を書いている人達もいるかもしれない。ただ、社会の木鐸としての自分を律して記事を書いている人がどれだけいるんだろうか。ウォッチドックとでもいうのかな。権力の横暴をあばき出して社会をあるべき方向に導く。そういう覚悟の上で記事を書いている人がどれだけいるんだろうか。価値ある記事を書いていると評価されている人も、その殆どは株情報を扱っていたり、技術的な情報の報告であって、社会や民主主義について真剣に告発するようなものは殆ど存在しないんじゃないかな」

私も個人ブロガーとしてやってきた。その思いは世の中への不満や欠陥を指摘することだったのかもしれない。しかし、それが体制や権力などというものと結びついて捉えられることはあまりなかった。だが、藤堂の中では、社会の瑕のすべてが自分とは違う誰かによって拵えられたものだとして捉えられている。

「私のメディアでは、市民記者が実名で記事を書き、その責任を自分で持つ。それが価値あることだし、記事の価値もそれによって保たれていく」

どうやら藤堂は、実名で記事を書くことが、個人ブログとの決定的な違いであるとも言いたいようだ。記事の責任は市民記者が取る。それは裏を返せば、メディアは記事の責任を取らないということでもある。だが、その批判を藤堂は独立自尊とでもいうべきプライドによって、払拭しようとする。

「記事の責任は市民記者が取るのは分かりました。では、記者の報酬はどうなっているんですか」

30代とおぼしき男性が藤堂に質問をした。

「記事の報酬は、ネットショップで使えるポイントとして支払うことになります」

そういえば、私はこの研修の参加費用をネットショップで支払っている。

「記事の報酬については、その記事の閲覧数によって5段階で評価しますが、最大でも記事1本に対して500ポイント。円換算で500円ということになります」

その報酬の低さに会場はざわめいた。たしかにテレビのインタビューでキュウタロウは、「市民記者を募るのは経費節減です」と、発言していた。だが、それでも数千円にはなるのではないかと考えて参加したプロやセミプロのライターが多かった。この時点で、こんなばかげた研修につきあっていられないと、席を立つ人が複数いた。市民記者になるための研修など最初から必要がない人たちだから、当然のことである。

私も経済的なメリットがないものに原稿を書き続けるような余裕はない。ただ、インターネットに関するある言葉が引っかかっていた。「インターネットで儲けようと思ってもなかなか上手くいかない。でも、辛抱よくユーザーに奉仕しつづけていれば、インターネットはそれを見殺しにはしない。そして、ある日突然、ご褒美をもらえる。そんなものです」。

たしかにこれまでのインターネットの歴史でビジネスとして成功したものがどれほどあ

るのだろうか。2005年にインターネットの広告費の全体がラジオの広告費を上回った。個人でもアフィリエイト広告での成功譚が書店を賑わしている。だが、ネットビジネスで成立しているものの殆どが広告がらみ。これでは従来のビジネスモデルの焼き直しではない。

もうひとつ気にかかるのは、市民参加型ジャーナリズムという概念はともかくも、それをインターネット新聞という形でやることに意味があるのかという問題。

私がインターネットテレビの番組のディレクターをやっていたブロードバンド元年ともいえる2000年。「インターネットウォッチプラス」という番組はインターネット上の動画コンテンツだったが、それは同時に閲覧者が情報にたどり着くことができる検索サイトでもあった。もしインターネットをひとつのメディアとして考えるならば、索引がないだけで、すでに記事は多数掲載されている。そのような状況で、あらたに記事を書くことに何の意味があるのだろうか。ブログにリンクを貼ったインターネット新聞でも構わない。

インターネットにはすでにオールアバウトというサイトがあった。このサイトの特色は380余名におよぶガイドの存在だ。サイトのトップページには、チャンネルインデックスと称して、生活、仕事、趣味、人生と4つのカテゴリーがあり、そのいずれかをクリックすると、さらに詳細な項目になる。

たとえば、生活 グルメ・クッキング フレンチ フレンチの専門家のガイドのページという具合。ガイドは専門ではなく、いわばその分野に詳しい市民ボランティアがゲストに情報を提供するという感じ。市民といっても、アマチュアである必要はなく、その分野の専門知識があれば、プロフェSSIONナルでもかまわない。

オールアバウトの発足当時、ガイドの募集とオーディションの報道がなされた。ガイドには応募者が殺到し、ガイドになるのはかなりの狭き門だった。そして、その報酬もそれだけで生活を成立させるのは無理としても、副業のこずかい稼ぎとしては恥ずかしくない金額。それが2005年にはガイドの報酬は月額3万円になっている。これではボランティアもいいところ。そして、ガイドの記事の内容も、スタート当初は情報サーチャーのサイトというイメージだったが、最近では明確にコンセプトの変更がなされていて、個人ブログとの違いがほとんど見当たらない。報酬の減額は個人ブログの勃興の中でビジネスモデルが変質した結果だろう。

そのとき私の頭の中にあったのは、検索ワードによる自動検索の筆頭であるグーグル。そして、ヤフーなどのポータルサイトの存在である。そして、合理的に考えて行き着く先は、ブロガーがわざわざ市民記者を名乗ることに果たして意味があるのだろうか。いまの個人ブログだって、画面構成を工夫すればシームレスで市民記者メディアとつながることができる。

研修の終盤で私はふたつの質問をしている。ひとつは、インタビューをしたときに、取材対象への謝礼品はないのかということ。私はテレビやラジオ、インターネットなどさま

ざまな媒体の仕事を経験してきたから、取材対象に出演料を支払ったり、交通費などの経費を負担した経験がある。予算がない場合でも、放送局のボールペンやタオルなどノベルティーを渡すことは当然のこととっていた。事実、テレビ番組ではインタビューに協力してくれた場合、局のマークの入ったボールペンを配っていた。

私の質問に藤堂は眼を吊り上げた。軽蔑の眼差しである。

「それはジャーナリストとして一番やってはいけないこと。もし、そんなことをするなら、市民記者として失格です。取材対象とは常に中立の立場を保つこと。金品を授受することで利害関係を持つなんてことはタブー。あってはならないことです」

記事を書くことで自分に報酬がないことはともかく、取材先に利益がまったくないとなると、取材の時に気まづくならないものか。自分が信念で突き進むのはいいにしても、それを他人に強制していいものか。職業記者が警察関係者に付け届けをするというし、一般的な取材の裏でもさまざまな裏交渉があるのは常識だろう。そのようなものを一切否定してしまって、取材が成り立つのだろうか…。

私の二つ目の質問は写真に関するものだった。

オープンゲイト社の受付の壁にはロゴが打ち込まれている。そして、待合スペースの傍らには、キュウタロウの等身大の看板が立っている。効果的な写真にするためには、キュウタロウの等身大の看板を社名ロゴがある受付の前に移動して撮影するのがベストだと思うのだが、それは市民記者としてやっていいのだろうか。

「所謂、やらせ写真という奴ですな」

この質問も、通信社で写真記者として長年のキャリアを持つ講師から、そんな当たり前のことを聞くなどとも言おうような口調で一笑に付された。それは、ジャーナリストとしてはけっしてやってはいけないことだという。

だが、私にはそれが妙な職業意識としか捉えることができない。たとえば米軍基地の写真を敷地の外から撮影する場合、長閑な入り口ゲートを撮影することもできるし、基地と外部を分かち金網を手前に写しながら、基地内を立ち入り禁止の危険地帯のように演出することも可能だ。カメラの位置を吟味することによって、恣意的な写真を作ることはいとも簡単であり、そのような写真が紙面を飾る場合も珍しくない今、カメラマンの職業規範にどれ程の意味があるのだろうか。

文章にすれば、「オープンゲイト社のロビーにはキュウタロウの等身大の看板があった」であり、それを写真の表現にただけの話。米軍基地の中では居住施設もあるし、兵士の家族も暮らしている。ならば、基地内がことさら危険地帯であるはずもない。こうした表現と比べれば、等身大の看板を動かすことなど、悪意はないはずで、映画の撮影同様、撮影が済んだら元の場所に元して戻しておけばいいのではないか。何も動かさなかったとしても、カメラマンの主観性が写真からなくなる筈もない。そういえば、キュウタロウが逮捕を報じるテレビニュースをあきれほど見たが、さすがにどの民放テレビ局も、私が無価値だと思ったジャーナリストとしてのコードを踏み外していなかった。だが、それが何

かを表現していたのかといえは疑わしい。

市民記者になるべきか、ならざるべきか。結局のところ、私の結論に一番の影響を与えたのは、テレビで流されるキュウタロウに関するニュースだ。オープンゲイトのニュースサイトは1日に何万というアクセス数を稼いでいる。私の個人ブログのアクセス数は数百。とすれば、2桁違う人たちに自分の意見や主張を伝えることができる。ならば、書いてみよう。

確かに、藤堂はインターネットに詳しくないから、前途多難かもしれない。だが、無知ゆえに騙されることはないともいえる。私は藤堂にメールを打った。それは研修の内容をレポートしたものだ。記事のアップは3月8日。研修日が3月5日だから、心の中の葛藤に関わらず、ほとんど即決で私は記事を書き始め、市民記者となった。

市民記者になる。

記事タイトル：

「主観・客観」市民記者研修会レポート。

記事本文

3月5日、オープンゲイト市民ウェブ新聞の研修に私は参加した。学生、パソコンインストラクター、システム関係者、子育ての終わった主婦、大学の先生、個人ブロガー、フリーランスのライター、ライター組みの男性などさまざまな人たちが集まった。

研修の内容は、ジャーナリストとしての矜持のもとになる重要なことから、「大学では1年間で学ぶ内容を1日にはしよって伝えたので、聴くほうも大変だったでしょう」と講師の藤堂は参加者をねぎらった。

オープンゲイト社によれば、オープンゲイト市民インターネット新聞の登録者は現在約100名とのこと。現在1日に記事が数本しかアップされぬ状況も次第に改善されるだろう。

この記事を書いたスポンタ中村です。個人ブロガーの私は何でも見てやろう精神で研修に参加しました。このインターネット市民新聞を読んでいる人は、実は私の記事なんかに興味はなく、キュウタロウのラジオ乗っ取りの話題に関連して何かないかと、興味津々な人がほとんどでしょう。

ある新聞系の方は、このサイトを見て、「こりゃ素人だ。どうにもならん」「キュウタロウは株で金儲けすることはうまいが、その実力はあんなものだ」と見下しているかもしれない。インターネットに詳しい人は、市民記者を募集なんかしないで、個人ブログにリン

クをはったらいと思うだろう。否、掲示板でもいいんじゃないか。他にも、ALL ABOUT JAPANのようにガイドを一般公募して、有用コンテンツにリンクをはるという手もあるぞ...と。

プロのジャーナリストの人たちは、素人の書いた記事なんかへたくソで読めたものじゃない、市民のジャーナリストなんて理想の産物だ、とオープンゲイト社の愚拳と決め付けているかもしれない。だが、ほんとうにそうなのだろうか...

はっきり言えば、私にもほんとうのところはよく分からない。ブログにしても、人気ブログになると100も200もコメントやTBが載せられ、ブログの本来の機能を失っている。ユーザーにとって有用な情報に手軽に行けるための障害は多い。コメントやトラックバックではない旧来の手法でニュースメディアをつくる意図はそれなりにある。

素人が情報を発信するのは無理かといえば、報道写真のことを考えてみればいい。決定的写真であれば、携帯電話で撮影した写真であっても、マスコミに登場できる。記事・文章も同じこと。

時代を経て残っている言葉というのは、ほとんどが記者の書いた言葉ではなく、当事者が書いた言葉。水泳選手の「生きててよかった」や「チョー気持ちいい」なんてのはその例。だから、反論しようとするばなんとでもいえる...

主宰者の藤堂は、「キュウタロウの関心はコストが主。運営・内容にはノータッチ」。藤堂は大学院で新聞学を講義していたのだが、実践も必要とオープンゲイト社を巻き込んだとか。

オープンゲイト市民インターネット新聞のスタッフたちは、通信社や新聞社での長い経験を持ち主ばかり、それは旧来のプレスのあり方をひきずっているという考え方もできません。事実、研修は旧来のマスコミ人が持っているべき最低限のモラルについてなされたました。とはいえ、インターネットの未来を構築したい人間と、今の従来メディアの腐敗を許せなくなった人が手を組む。それが市民インターネット新聞なのです。

21世紀も半ばになれば、キュウタロウなるムーブメントが時代の大きなターニングポイントだと振り返られることは誰の目にも明らか。(成功者が敗者かは分らないが...)ならば、同時代人として、ぜひ市民記者として参加することの意味は大きいのです。キュウタロウに反対でも賛成でも、そんなことはどうでもいい。同時代人として生きていることを痛感したいなら、ぜひとも市民記者になって、記事を書くべきです。

問題はビジネスとして成立するかではない。いかに個として21世紀に生き、社会とどう関わっていくかだ。21世紀は傍観者であることを許さない。そういう厳しい時代がやってきているのです。【了】

この記事は、市民記者の文責によるもので、法人としてのオープンゲイト社の見解・意向を示すものではありません。

私の最初の記事がオープンゲイト市民インターネット新聞に掲載された。私の記事にはナンバリングが振られていて、その番号は三十三。つまり、私の記事はオープンゲイト市民インターネット新聞が創刊されてから三十三番目の記事ということになる。それから、私はほとんど毎日のように記事を編集部に送りつけた。

3月09日掲載 市民記者研修レポート

3月11日掲載 インターネットはテレビを飲み込めない

3月11日掲載 インターネットは、人類の歴史を追って変化する。

3月12日掲載 「インターネット世界のトップを走るのは日本」 3月12日 12時45分 掲載 テレビの進化した形がインターネット放送ではない

3月13日掲載 キュウタロウよ。放送における第三者評価機関をつくれ。

3月14日掲載 キュウタロウとラジオの関係、楽観論。

3月15日掲載 キュウタロウを高校生はどう見ているか。

3月16日掲載 モリケン落選で首都圏連携の行方は？

3月16日掲載 インターネットの将来と SNS

3月16日 インターネット インターネットの問題は何？

3月17日 掲載 ネットの問題を解決するのは誰？

3月17日 掲載 スモール・ワールド計画とキュウタロウ

記事のほとんどは、真っ最中だったキュウタロウ騒動のテレビ報道に対する私の無邪気な反応である。私はあのムーブメントのことを私はキュウタロウ革命と呼んでいた。キュウタロウ本人だけでなく、とりまきの役員たちも逮捕された今、わたしなりの過去を清算しなければならないのかもしれない。とはいえ、M&A や株取引の仔細について、あのときも今も私は門外漢であり、言うべき言葉はない。

いま冷静に記事のラインアップを眺めていると、言論人ごっこ・新聞人ごっこをしていたと感じる部分もある。テレビが登場したとき、言論界の重鎮・大宅壮一氏は「一億総白痴化」と評したという。

それはそれで至言なのだろうが、あの大宅壮一氏にしても、新しいメディアの登場に対して否定論を展開するばかりで、その有効活用について、論じていないのは不備である。もし、大宅氏が、テレビ映像のアングルが記者の肉眼と比べると桁外れに狭いこと。具体的には、記者のアングルは上下 360 度×左右 360 の全天周だが、ビデオカメラのアングルはそれぞれ 30 度程であり被写界深度の浅い、マイク特性によって音声も極めて限定的な情報だ。そして、そのような機材の特性により、仕方なく限定的に切り取られた情報は、カメラマンやディレクターたちの極めて恣意的なものである。

問題は、テレビがそのようなバイアスのかかったものであるにも関わらず、あたかも現場にいるかのような錯覚を視聴者にもたらすこと。もし、そのようなことを大宅氏があの

ときに指摘していたら、その十数年後のできごとであったのだろうか。

1972年。ときの総理、佐藤栄作氏は、「テレビは真実を伝えてくれるので私は直接テレビから国民の皆さんにご挨拶する。テレビはどこだ？ 偏向的新聞は大嫌いだ」と発言したという。そして、反発した新聞記者達が退席後、一人テレビカメラに向かって演説を行った。私は、閑散とした記者席に向かって退陣表明記者会見をする佐藤栄作総理の写真を憶えているが、きっと総理の傲慢な態度に反発した新聞の写真だろう。

当時中学生だった私は、そのときのテレビ映像を憶えていない。だから想像の範囲でしかないが、首相の撮影をずっとやってきたビデオカメラマンなら、いつも撮影の邪魔をされて迷惑に思っていた新聞記者たちがいなくなって、せいせいした気分になっていたに違いない。ならば、ビデオカメラマンが選ぶアングルは、総理のアップ、もしくはバストアップでしかありえない。

プレスルームに複数のカメラがあれば、ガランとした記者席を捉えたアングルも選択されるだろうが、野球中継ならともかく、首相の会見に2カメ・スイッチングをすることなど、あるはずもない。

もし、そのような陣容でプレスルームの映像が御茶の間の観客に紹介されていたなら、一国の首相が権力の座にのぼりつめ、そして、彼の傲慢さから、まるで裸の王様のようになって退陣を余儀なくされたことが、より印象づけられたと思う。きっと、大宅氏の「一億総白痴化」発言で、プライドを傷つけられていたテレビマンたちが、首相の言葉を追い風にして、意気揚々と、首相のアップの映像を垂れ流しにしていたに違いない。

だから、私はインターネットの登場に際して、その登場を批判するような言説は好まない。勿論、それは無名人だから、時代に抗っても意味がないという理由もある。だが、それ以上に、あるべきインターネットの姿、利用法というものを提示することが重要であり、必要であると感じているからである。

私が市民インターネット新聞に応募した理由も実はそこにある。私は、業界の片隅ながらも、イーコマースの現場や、ストリーミング番組の現場にいた。そこで感じていたのは、世の中が「インターネットは出会い系サイトと自殺系サイトなどの社会悪しか社会に提供していない」という批判。

そんなことはない。生まれっばなしのイノベーションを育てることもせず、ほったらかしにした社会のほうが悪い。勿論、私もその社会の一員だから、何かの機会があれば、インターネットのあるべき方向について、また、インターネットの弱点の克服法についての助言を行いたいと願っていた。

勿論、それは私の考えが正しくて、世の中が間違っているということを声高にいいたいのではない。問題があるのなら、それを嘆いてばかりいないで、積極的に行動しようよ。と、訴えたかったからである。

オープンゲイトの編集部は手薄なのか、私の記事はほとんど校正されることもなく、サ

イトにアップされた。その作業がブログに書き込むことと何処がどう違うのか。と聞かれれば微妙な話なのかもしれぬが、とりあえずは編集部がチェックをして記事が本誌ともいえるサイトに私の記事がアップされた。

ブログにはコメント欄やトラックバック機能があり、閲覧者の意見を知ることができる。この市民参加型ジャーナリズムでも読者の意見を書き込めるスペースや意見をメールで投稿できるシステムがあった。当然といえば当然だが、そこで私の記事に対する感想が送り返された。間違いを指摘する読者の意見はメールで私にも転送されてきた。そして、私は藤堂から叱責を受けた。消費者は文句があればクレームをいってくるが、商品に満足しているからといって賞賛を表明するものではない。だから、苦情がやってきたとしても、それはある意味商品が売れていることの証明でもある。その苦情・クレームの存在こそ、オープンゲイト市民ウェブ新聞が一日2万アクセスを集めている証明でもある。だが、メディアに不慣れな藤堂は、そのような経験をしてこなかったようで、私の記事の瑕を非難しつづけてきた。とはいえ、記事不足は否めなく、私の記事がなければ、記事の数は三分の一になる。だから、私の記事の掲載をやめるわけにもいかぬ。そのような状態が数週間続いたのだ。

本来であれば、誤字脱字・誤認識の類は編集者が直せばいいものだが、そのようなチェック機能さえも、このインターネット新聞には存在しなかったようで、そのような瑕さえも、すべて私の責任に帰していた。私の能力のなさと言ってしまえば、それだけのこと。とはいえ、個人の限られたリソースの中で万全を期したとしても、間違いが起こらないはずはない。私は頭を下げながらも、ひるまず書き続けようと心に念じていた。批判があること。それに耐えることはどんなメディアであっても当然だと思っていた。

藤堂たちオープンゲイト市民インターネット新聞の運営者・編集者たちは決定的にインターネットとの付き合いが欠如していた。ウインドウズ95でパソコンが普及したとすれば丁度十年の歴史があるインターネット。だが、彼らにはその経験の蓄積がほとんどないと言っていい。彼らにとってインターネットを使うことは手抜きであり、原稿用紙に万年筆で原稿を書くのがマスコミ人の誇りである。というような旧態然とした価値観が残っていた。勿論、彼らが長らく新聞メディアやその周辺の人たちであり、市民記者メディアをはじめたその動機も、既存のメディアに対する憤りだったという事実に起因するのだから、考えてみれば当然ともいえる。きっと既存のメディアの一員だった頃、インターネットをばかにして、ほとんど使うことなどなかったのだろう。

一方の市民参加型ジャーナリズムに集まった市民記者の側はどうかといえば、ニフティサーブのフォーラムの時代からパソコンに親しんできた人たちも少なからずいたと思う。あの時代からすでに十年以上が経っている。フォーラムが荒れたとき、どうすべきかを多くのパソコンユーザーたちは学んでいる。だが、そんなことをメディアの側の間人は忘れていく。

昨今のビジネスシーンでは、モバイルコンピュータを携帯し、会議や講演などのちょっ

としたメモも、ノートパソコンで入力する人は珍しくない。藤堂たちは明らかにそういう人種ではない。仄聞するところでは、新聞業界ではコンピュータで検索することは手抜きとして軽蔑されるそうだ。

私はそんなことに片意地を張ってないで、便利だったら使えばいいし、敵視する必要はないと思うのだが、現実はそのらしい。足で取材するのが新聞記者だ。そういうプライドが躍変してそのようになったのだろう。

インターネットの世界でも、インターネットで検索をかけることを「ググる」と若干揶揄した言い方をする。とはいえ、「ググリもしないで、教えて君じゃだめよね」との慣用句もある。情報のすべてではないにしても、情報源のひとつとしてはとても重要だと認知されている。

私は、既存のメディアからインターネットメディアにやってきた人たちのことを考えると、映画がテレビに取って代わられた時代のことを思い出す。当時、テレビは電気紙芝居と言われ映画人たちから軽蔑されたという。だが、そういう蔑称がひかれ者の小唄程度の意味しかないことは時代が証明している。どちらにしても、私は日々、インターネット新聞に記事を送り続け、ほとんどが本誌サイトにアップされていた。

藤堂がつくりあげた市民記者の規約には、次のような文言があった。

-
1. 本紙サイトの内容を無断転載しないこと。
 2. 市民記者はフリーランスのジャーナリストであり、オープンゲイト社は市民記者の取材報道に関する事項の責任を一切負わない。したがって、取材活動にあたっては、市民記者はオープンゲイト社の肩書きで行ってはならない。
-

主宰者の藤堂がこの条文をつくったのだが、彼は主宰者でありながら、市民記者としても記事を書く。実は、彼は自分の記事を本紙サイトに自分の記事をアップする前に自分の個人ブログにあげていた。どんなメディアであっても、初出掲載でなければ、コンテンツの価値は下がる。主宰者の彼がそのような常識を持っていないことに私は唾然とした。たしかに、初出掲載が自分の個人ブログであれば、市民インターネット新聞に記事を採用されたとしても記事の権利は筆者にあり、オープンゲイト社の許可を取る必要はない。それは藤堂がキュウタロウを信じていないこと。そして、私たち市民記者とはもうひとつ違う権威を纏っているかの振る舞いともいえる。

マルチポストということになるのだろう。私も本誌記事を転載はしなかったが、編集部には校正される前の文章をブログに載せた。ただし、それは本紙サイトに掲載されてからのタイミングである。だが、編集権を持つ藤堂はまったく逆。つまり、自分のブログに記事をアップしてから、記事の本紙サイトに挙げるのである。編集権を持っている人間がすることなのだから、一般の市民記者には批判することもできぬ。たしかに本紙サイトが初出

掲載でなければ無断転載にはならぬ。とはいえ、そのような条文の抜け駆けを主宰者自ら行なっているのだろうか。

私が窮屈に感じたのは、オープンゲイト市民インターネット新聞の名前を語って取材してはならない。というもの。これはオープンゲイト社の取材時に発生するかもしれないいざこざに対する責任逃れで生まれた条文かもしれない。だが、藤堂は、「市民記者に突きつけられたこの厳しさこそ、市民記者の誇り源泉でもある」と言って憚らない。彼に言わせれば、この一文があるゆえに、何物にも拘束されぬ個が存在できるともいう。その立場を受け入れてしまえば、極めて諧謔的な解釈にだが、この項目においてのみ、市民記者は職業ジャーナリストに対して優越性を持てるのである。

人生とはおかしなものだ。小学生のとき、NHKの「海外特派員ニュース」を見て、ジャーナリストにあこがれていた私が、四半世紀以上経ってジャーナリストを批判している。もちろんそれは、脆弱な市民記者の立場を擁護するために、無理やりこじつけた結論かもしれない。だが、自分の頭の中で次の言葉が浮かんだとき、理由なき反抗は、明らかなる確信に変化する。

「取材対象との焦点距離を必要とするジャーナリズムは、市民の感情とあいられない。なぜなら、他人の悲しみさえも、自分の悲しみとするのが、善良なる市民の感情だからだ」

事件(具体的な事柄)との心理的・時間的距離がないと、まともな表現ができないのは、メディアに限ったことではない。ふつうの生活をしている人たちも同じだ。だが、市民参加型メディアの場合は、対象との距離が重要な要素となる。つまり、対象との距離が近ければ近いほど記事は魅力的になる。だが、自分に起きた出来事の場合、あまりにに近すぎれば独りよがりを感じられるだろうし、他者の場合は、そこまで近寄る権利がお前にはあるのか。いけずうずうしい奴との批判をあびる。

情報をリリースする理由を社会貢献と自分に言い聞かせたところで、現場の記者を動かすものは、個人的な好奇心だったり、功名心だったりする。そういうものを隠したり、一定の制限を加えるのが良質なプロ記者ということかもしれぬ。さらにいえば、そういうものがない人は記者失格だし、読者にとっては、そうした記者たちの巧まずしての情熱が記事の魅力だったりする。

そのことを私に考えさせたのは、関西在住の市民記者があげた JR 福知山線脱線事故の写真記事だ。たぶん、この市民記者は現場近くに住んでいたか、通りかかったのだろう。マスコミの一員でもないのに、現場で救助活動に協力するでもなく写真を撮っていたのだから、やじ馬でしかない。カメラポジションから判断すると、関係者以外立ち入り禁止であろう場所に立ち入っていることも容易に判断できる。

数十人の乗客が死亡した未曾有の大事故である。事故の悲惨さを前にして、人間は何らかの衝動にかられる。自分の目の前に起きていることの重要性を感じ、一刻も早くそれを情報として社会に発信したいと思うのは当然のことだ。彼の記事で身の回りの人の安否を

尋ねるキッカケになったと思うし、その後の JR 西日本への批判を見れば、いち早く社会悪を指摘したことになる。

私はこの市民記者が、やじ馬が写真をとっているという冷たい視線に負けずにデジカメで写真をとった勇気を讃える。たしかにそれは間違いない。たが、その思いとどうしに、それが市民記者のやることなただけど…。という割り切れぬ思いがつきまってくる。それは今でも滓のように残っている。

私は阪神淡路大地震のときのテレビ報道を思い出す。東京で暮らしている私には、あの惨事をいままって実感できていない。あの前に神戸に行ったこともあるし、最近も大阪に出張でいく。だが、あのとき、6000 余名の人命が失われたことがいまだに実感できない。その理由を考えてみると、ビルが壊れたり、道路が破壊されたり、避難場所で苦しい生活をしている人たちの映像がテレビを賑わせていたが、犠牲者の葬儀に関わる映像があまり紹介されなかったことが原因ではないか。勿論、壊れたビルや現在も苦しんでいる人たちなど、ドラマ的で刺激的な映像がたくさんあったことも理由のひとつだろう。だが、犠牲者への追悼の気持ちや遺族や参列者への配慮から、関西地区のメディアや現場のカメラマンが自分たちのコミュニティのそうした現場を取材することをためらったからではないか。

もうひとつ。私は北海道南西沖地震のときの奥尻島の映像を鮮烈に憶えている。それは、フェリーポートに乗せられた何十という棺である。きっと火葬能力の低い孤島では火葬することができず、かといってそのままでは遺体が腐乱するので、北海道本島に運ぶのだろう。その映像をテレビで見た私は、たくさんの人が亡くなったことを実感したし、きわめて深い鎮魂の思いにかられた。

問題は、取材者にとって、取材対象が他者なのかどうか。自他の境界領域はどこにあるのかということ。毎年開催される御巢鷹の尾根での追悼行事の取材映像にしても、取材者の側に追悼の思いはあるにしても、それは他者への思いであって、自らのコミュニティの一員に対しての思いではないのではないかと、思うのである。取材対象を自分の境界領域の内側と認識してしまったら、ジャーナリストは取材対象を批判したり、告発できなくなる。そういうジレンマが、ジャーナリストとジャーナリズムをとりまいて存在する。

一方、市民はその逆で、自らを、それも自嘲を交えながら謙虚に語るのが、善良なる者のやり方だ。戦後の混乱を遠く離れた今、他人様を批判するなんてもってのほか。コロナブトップが政治家や世相を批判して拍手喝采をえていたのは、遙か昔である。いまの芸人は自虐ばやり。なんとも、やさしい時代だ。とはいえ、批判や告発とは離れたところで市民記者活動をすれば、こんな楽しいことはない。ひどい言い方にはなるがマスコミごっこといってもよい。新作映画の試写会や舞台挨拶を取材することなどはその典型だろう。それは職業記者にとっても楽しみのひとつなのかもしれないが、市民記者が映画ファン・演劇ファンなら当然のことである。

業界の片隅にいた私にはそんな物欲しげなことではできぬ。そこで自然保護活動をする夕

レントを取材することを決意した。少々自嘲気味だが、当時の私には確かな思いがあった。それは、市民記者活動でもここまでできるんだということを、同僚の市民記者たちに示したかったのである。

取材交渉において、オープンゲイト社の肩書きをつかってはならない。取材に関して取材対象に謝礼を支払うことはタブー。そんな状況であっても、取材は可能。インターネットによって、誰とでも出会うことができる。社会的に知名度を持つ個人や団体ほどそれは確かなこと。

コネクションをたぐって出会ったとしても、その人がその分野で日本でトップの人である可能性は低い。だが、インターネットで調べれば、その分野の日本のトップの人と簡単に出会うことができる。価格コムは、日本で一番安い販売店を教えてくれる。同様に、インターネットを使えば一流の人と出会うことができる。たしかに一流の人を使うとギャランティーは高い。でも、一流の人は経済的には困っていないから、自らの意図を説明し納得してもらえたならば、ノーギャラでも協力が得られる。逆にいえば、わずかな額なギャラの受け取りを断られる。多くの有名人は社会的な立場で仕事をしているから、社会貢献をいつも心の中においている。だから、本人が社会貢献のひとつであると認めてくれるならば、協力はえられるのだ。

市民記者の立場でも単独取材は可能。それを実証して、市民記者たちに自らの可能性を示す。そのために、コネクションも何もないタレントの所属プロダクションに、私はアポイントの電話をした。所属プロダクションは本人に連絡をとり、彼が出演するラジオ局の生放送終了後に取材をすることになった。謝礼金もノベルティーもない私は、この日のために拵えた自家製スモークチーズを手土産に横浜・関内にあるラジオ局に向かった。材料費は五百円に満たない。自家製のスモークに商品価格はないから、利益供与ということにはならぬだろう。

地下の駐車場に車をとめて、放送局の廊下にたどり着く。録音スタジオが4つほどある関東ローカルのラジオ局。廊下と副調整室の間は大きなガラスで仕切られているだけ。副調整室の向こうの録音ブースも通し見ることができた。

タレントの番組はリスナーとメールのやりとりを元に構成されていた。スポンサーは釣具のフランチャイズであり、話題は日々の生活と言った感じだった。ただし、パーソナリティーは川遊びが好き。自然と戯れるのが大好きだったから、集まってくるメールも自然に関する話題が多かった。私がスタジオを訪れたのは春先であり、ちょうどマルタという大型の魚が多摩川を遡上する季節。この日もマルタを釣るイベントを公開録音にする告知がなされていた。

「いやぁ、嬉しいねえ」

テレビや映画でみせる屈託のない笑顔を彼は見せた。

「事務所から聞いたけど、キュウタロウのところなんだって。ここはローカルなラジオ局だから関係ないけど、あっちは大変なんだろうな」

私は、事務所に連絡をし、私の思いをつたえていた。

「私の友人に東京都水道局の職員がいるんですよ。彼の職場で中本賢さんがつくった私製の表彰状が回覧されたっていう話を聞いて、ぜひとも取材したいと思ったんです」

中本は、多摩川で川遊びをするガサガサという活動をしている。一時期は家庭排水などで汚れきった多摩川が最近では俄然きれいになっている。最近では水門に魚道もつくられ、アユも遡上するようになったという。多摩川の水に浸かりながら、そのことを実感した彼は感謝の気持ちを形にしたいと東京都水道局に感謝状を贈ったのだ。

私が質問するまでもなく、中本は川に対する思いをとめどなく語ってくれた。記事は6本書いたが、後半の2本は没になったので、個人ブログに載せることにした。

記事タイトル：市民記者インタビュー

市民記者・中村厚一郎は、映画俳優でありテレビタレントのアパッチけんこと中本賢氏を取材した。

記事本文：

93年頃から、テレビタレントであり映画俳優の彼は近所を流れる多摩川で川遊びをしていた。当時の多摩川は汚いという風評があり、誰も川に入って遊ぶ人などいなかった。しかし、浅草育ちで汚れた隅田川を見て来た彼にとっては違っていった。地元の人たちが汚いと思っていた多摩川がきれいだと思えて、息子と自分のマンションのすぐ下を流れる多摩川に浸かり、遊んだ。周りは彼を変人扱いした。結膜炎にもなった。しかしその一方で、魚や小動物との感動的な交流があり、彼は川遊びをやめなかった。

95年秋、彼は二子玉川のあたりで、鮎の産卵を目撃する。川をあがってきた鮎たちの産卵は必至だ。産卵で無防備になった鮎をナマズが食い、サギが食う。それでも鮎たちは産卵をやめない。厳しい自然の営みに彼は慄然とした。そして、何よりも鮎たちがこんなに多摩川に上ってきている。そのことをたくさんの人に知って欲しい。彼はそれを記録しようと毎年努力を重ね、2000年、多摩川を遡上してくる1万匹の鮎の姿をようやくビデオに収めることに成功した。

彼は、まずはじめに多摩川をきれいにした人たちにこのことを知って欲しいと思った。この川をきれいにするために努力した人たちは、きっとこの事実を知らない。数値的には川がきれいになったことを知っているかもしれないが、水の下でおきている感動的な世界を、純粹に伝えなかった。そして、ビデオテープと感謝状を東京都下水道局に送った。ただ、それだけのことである。私が訪ねたとき、彼は水道局内で彼の感謝状が回覧されていたことをまったく知らなかった。

多摩川がきれいになったことをNHKのドキュメンタリー番組で知っている人も多いだろう。あの番組は、彼の活動に1年間つきあった友人のディレクターがまとめたものだ。彼

はディレクターに言った。

「多摩川に鮎が増えているという、漁協が放流したからだ勘違いする人が多いかもしれない。だが違う。下水道局の努力で水質が向上し、建設省が堰に魚道をつくることで鮎が多摩川にもどってきたのだ。堰をつくる時に魚道をつくろうと提案した役人たち。その人たちに感謝する意味でも、番組では必ず魚道について紹介して欲しい」

我が家の数百メートル近くを多摩川が流れている。タレントで俳優の彼は、ガサガサという河川の自然観察活動をテレビ朝日の「ニュースステーション」で紹介されたことでも知っている人も多いだろう。

私が住む地域の環境調査の団体のイベントが彼を招待していたことが私が彼にインタビューを申し込もうと思った直接の契機かもしれない。勿論、友人の東京都水道局の職員の存在もある。

「市民記者活動か...」

私はあらためて、市民記者の立場とオープンゲイトの関係を説明した。

「大丈夫ですよ。私がある記事の殆どは掲載されますから、折角喋ってもらったことが無駄になることはありません」

「いや、そんなことはいいんだよ。僕は君と話せたことだけで嬉しかった。ただね」

「ただ...?」

「ボクはジャーナリズムなんてよく分からないけど、ボランティアをやっている人達の気持ちはよく分かるんだ」

「はあ...?」

「よく河原の清掃なんかのボランティアがあるじゃない。それってさ、確かにいいことなんだけど、終わったあと、世の中が嫌いになるんだよね。それって悲しいことだと思うんだよ。自分がどんなに素晴らしいことをしたとしても、結果、誰かを嫌いになったりする。そういう人たちって意外に多いし、自分の子供にも堂々といまの社会を批判する。でも、それって自分達がつくった社会なんだよね。ボクは河原でペットボトルを見つけたら、そのペットボトルに棲んでいる生き物を見て、嬉しくなったりする。なんだ、こんなところで必死に生きていやがるってね」

中本の言葉は私を凍りつかせた。市民記者として名乗って彼の前に現れた私は、彼が指摘するような正義や世の中への批判を纏っていたのかもしれない。

私は世の中を騒がせるキュウタロウについて聞いてみた。

「ボクは株のことや企業の乗っ取りのことは分からない。だけど、彼が何かを乗り越えようとしてやっていることは感じているな。そして、かなり時間が経ったとき、彼はお坊さんのような生活をしているんじゃないだろうか。いま、彼がやっていることも、意外とお坊さんがやるようなことだと僕には思えてるんだけどね」

世の中は、キュウタロウ騒動がすべて彼の錬金術だということで決した。裁判もその方向で終焉を迎えるだろう。だが、中本が言ったように、キュウタロウの行動が世の中を変えていく動力にならなかったかといえば、嘘である。そういう世の中の価値観を変える行動を僧侶のものと形容することに何の破綻もない。市民記者というわけの分からぬ肩書きで現れた私に、中本氏は一つの言葉を残した。

「すねるなよ」

数千万円のコマーシャルのオファーを断り、スーパーカブに特大の荷台をつけて多摩川河畔を長靴で流す中本氏。彼の活動はボランティアでもなんでもなく、生活に近い。

一方の私はなんとも立ち位置の定まらない宙ぶらりん。すねるなよ。市民記者としての活動が徒労に終わろうとも、すねてはいけない。活動を続けなければならぬ。ということか。それとも彼の前に現れた私の姿がすねていたのだろうか。どちらにしても、私がほとんど実体のない市民記者という虚勢ともいえる看板を引っさげて彼の前に現れたことは事実であり、俳優の鋭い感性はそれを確実に嗅ぎ取っていた。

マスコミごっこと自嘲した私だったが、有名俳優を取材した満足感は少なからずあった。

タレントを取材した私だったが、市民記者が本来すべきことはそのような他人の事を書くことではなく、自らの生活をニュースとして発信すること。それが日記に過ぎぬとの批判はあるだろうが、どうしても私はそれをしたかった。

記事タイトル：

せんせいのつうしんぼ

記事本文：

昨日の3月24日は、公立小学校の終業式。小4の娘は「あゆみ」(通信簿)を持って帰ってきた。私は、通信簿のつうしんぼを付けてみる。

各教科について、3段階評価である。項目は「よくできる」「できる」「もうすこし」となっている。相対評価だから、「よくできる」はいい。だが、普通であるはずの評価が「できる」は間違い。「もうすこし」というのも意味がわからない。「もうすこし」どうしたいのだ。

各教科は、評価の観点に分かれていて、それぞれに評価が付く。例えば、国語の評価の観点は次の5つ。1)国語に関心をもち、進んで取り組むことができる。2)相手や目的に応じ、筋道を立てて話したり、話の中心に気をつけて聞いたりすることができる。3)相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落を工夫して文章を書くことができる。4)段落相互の関係や文章の中心をとらえて読むことができる。5)言葉や文字を理解し、正しく読んだり書いたりすることができる。

これら5つの観点がすぐに飲み込めただろうか。私が要約するに、「やる気」「話す力」「書く力」「読む力」「言葉の意味、漢字」の5つ。人にわかりやすく書く。これが国語力

の基本である。通信簿をもらった家庭の会話を想像してほしい。

「　　ちゃん。『国語に関心をもち、進んで取り組むことができる』が『もうすこし』ですよ」「でも、ママ。わたしは学校で『国語に関心をもち、進んで取り組むことができる』ようにしたのよ。これは先生が私のことを『国語に関心をもち、進んで取り組むことができる』のを見落としたのよ」「そうかしら、『国語に関心をもち、進んで取り組むことができる』ってことは…」まるで、落語の寿限無である。

いたずらに文章を綴ることは、人に優しくない。できれば誰にでも理解してもらえる文章。それを書くべきである。この通信簿が子供たちの保護者に向けられて書かれているとは、到底思えない。

次に音楽の評点を紹介しよう。娘は4歳から音楽教室に通い、エレクトーンやドラマーとしていくつのステージに立っているから、そういう経験のないクラスメートと比べると音楽に親しんでいる。それでも、彼女の「音楽の構成要素を感じ取り表現している」はできる(普通)だった。

娘の評点はともかく、音楽の授業で音楽の構成要素について教えているのか。そのことの疑問を呈したい。音楽好きの私が考える音楽の構成要素とは、リズム・メロディー・ハーモニーである。

授業参観のときに音楽の授業を見たことがあるが、こどもたちが体でビート(カウント)をとりながら歌を歌うところを見たことがない。ビートとはリズムが乗っかる土台のようなもので、ビートがないとシンコペーションも歯切れがわるくなる。ビートという概念は学校では教わらない。

ハーモニーはポピュラー音楽でいうところのコード。コードはベース音によって決定づけられる。しかし、ヘ音記号が登場しない教科書を使っているこどもたちにハーモニーの意味を知る術はない。

楽曲は目新しくなっても、いまだにメロディー一辺倒の教育がなされている。それでいて、通信簿には音楽の構成要素という評価の観点がある。(もし、小4で習うべき音楽の構成要素が音の高さと長さだとしたら、それこそ嘆かわしい。)

図画工作の評価の観点でも驚いた。評価の観点の第一に「学習の準備や後片付けができ、表現することに意欲をもつことができる」とある。準備や後片付けができることで図画工作の評価を決める…。私は美術愛好家だが、アトリエがぐちゃぐちゃな巨匠たちを知っている。表現に熱中するという事はそういうことで、「準備と後片付けが一番大事ですよ」などと通信簿の評価の観点に加えるのは、学校が個人の個性を伸ばすためにあるのではなく、良好な教室運営のしもべとして個性をとらえていることの証明でもある。

こういう問題が外に出てこないのはなぜか。私はマスコミを含めて教育関係者たちが子育ての現場から遠いところで仕事をしているからだと思う。この私にしたって、あと2年しか小学校教育に接する時間はない。

これからも、音楽の授業がつまらないと文句をいい、自分の思いを作品に託すことさえ

教えられない図工の授業に疑問を感じる娘の言葉を記事にしていくつもりだ。

子育てを経験したことのない教育学者や教育評論家がマスコミを賑わしている。そういう世の中に一矢を報いたい。そんな気持ちで書いた記事。

つづけて、こんな記事も書いた。

記事タイトル：

5年生から特殊学級を勧められています...

記事本文：

インターネットでは、すでに暖かいコミュニティが芽生えている。私はその一例を「教えてgoo」に見る。「教えてgoo」の小学校というカテゴリで、「5年生から特殊学級を勧められています...」という質問が寄せられた。質問が投げかけられたのは2月20日。3月27日現在54件の回答があり、まだ続いている。

質問当初は、第三者的な回答が多かった。(教えてgooでは、回答者が寄せる情報の正誤はわからない。それを承知で質問者と回答者の間でやりとりがなされる)私は同い年の娘を持っているし、地域で障害児とも付き合い、他動症ぎみのこどもと活動しているから、人事とは感じられなかったので、私なりの回答をした。

質問者は父親、私も父親。そういう意見交換に母親としての回答も加わってくる。明日3者面談に行くけど、先生の言うことに素直に従っていいのか。親としてどうすべきか。回答がすすんでいくと、問題児がクラスにいたために、毎日暴力を受けた女の子のお母さんからの回答が寄せられた。

質問者が投げやりなコメントを残した後、私のブログに「このまま質問者を放っておいちゃいけない」と無名氏のコメントもやってきた。回答はしないけれど、熱心にやりとりを読んでいる人がたくさんいることが想像できる。

結局、質問者の男の子は特殊学級に行くことになった。これで質問も閉じられるのだろうと思っていたが違っていった。今、同じ障害を抱えるこどもを持つ親たちが、お互いの経験や状況を披露しながら、理知的に会話をしている。いまはシックハウスや電磁波の影響はないかという指摘...

当事者同士が語り合う内容は重い。だから、私などが回答を寄せる場ではない。とても尊い場所...。ソーシャル・ネットワーク・システム(SNS)など、秩序を保つために排他的なシステムを採用するコミュニティサイトが増えている。しかし、それはインターネットのよい部分を打ち消すことにもなる。今回指摘した例のように、オープン性を保ちつつ善意が集まるサイトづくりも可能だと考える。

小学校4年生のこどもを持つ父親が、新学期から息子を特別学級に行くようにすすめられた悩みを、教えて goo に相談していた。寄せられた回答の始めのほうのものは、教育関係の専門家や精神医療やカウンセラーなどの専門家に任せるべきであるという回答が続出していた。

勿論、それは当然のことだろうし、それに従うのも親としてのつとめかもしれない。だが、親だからできることはもうひとつあると思えてならなかった。つまり、合理性などというのではなく、愛するものとして、自分の息子のためにジタバタする。端から見ればかげてみえることも、親として堂々とする。それが親の情愛であると指摘したかったのです。

専門家などというが、プロとは対象を他者(お客様)として扱うことである。そのようなものに、愛する家族の人生を託してしまっているのか。

私は、家庭内暴力の息子を撲殺した父親のことを思い出していた。彼も、その妻も東大卒だった。インテリの硬直した思考は、アマチュアである自分の考えよりも、専門家の意見を正しいと信じ、その言葉に盲目的に従ったのだろう。勿論、その過程は、自分の一番愛しい人間のうちの一人を殺すことに至ったのだから、それまでの筋道は平板ではないに決まっている。だが、父親としての最大の愛の表現が、殺すことだったというのは、悩み苦しんできた父親を思うと、あまりに残酷で、あまりに悲しい出来事と思えてならない。だが、そういうことを引き起こした専門家たちが反省したのかといえば、どうだろうか。

勿論、その事件に直接関わった人たちは、自分の非力を恥じ、断腸の思いでいるかもしれない。だが、その同僚たちや、その仕事に携わる人たちにまで、そういう反省が広がっていったのかといえば、そんなことはないと思う。なぜなら、そういう事実があったことを多く的人是憶えていないし、そういう無責任な専門家たちの姿を私の日常においても散見するからだ。同じことを繰り返してはならない。私は、執拗に教えて goo に回答を繰り返した。そして、自らの問題を多くの人に共有することで、同じ悩みをもつ人たちの役に立とうと思う質問者の思いを痛切に感じて、市民インターネット新聞に記事を書いた。

既存のジャーナリストたちが自らの職業的規範やモラルの存在を鼓舞するけれども、それはあくまでも他者を論じる傲慢さの対価としてのもの。そして、そのスキルにしても、どれほどのものがあるのかといえばはなはだ疑問である。

たとえ癌の専門医の知識だとしても、癌を宣告され、自らの死と向き合いながら必至に病気のことを調べた患者の知識にはそうそう勝てるものではない。というのが私の論理だ。

インターネットで見ず知らず同士のコミュニケーションは他人が傷つくことを怖れない罵詈雑言の嵐だという風説がある。だが、お互いに利害関係がないからこそ、心のうちを明かすことができたり、相手を思いやることができる。そんなインターネット上で必ずしも珍しくないことを記事にしたかった。

勿論、掲示板の記事を市民インターネット新聞の記事にしたことは賛否両論があった。

だが、当の父親はたくさんの人達に知ってもらうことで、自分が障害者のこどもを持つことの意味や意義を極めたかったらしく、彼の感謝のコメントに接することもできた。

そして、市民記者活動をはじめて1ヶ月が経とうとしている頃、私のブログの1日のアクセスが千件を越えた。インターネット新聞の相乗効果だと考えた私は、次のようなエントリーをブログに書いた。

エントリータイトル：

個人ブログを書き続ける意味

本文：

通常、ブログというのは、自分の興味を限定してそのことについて書くというのが、通例だと思う。たしかに私の場合は、子育てや地域、芸術やメディアなどという興味の問題の 카테고리もある。しかし、私にとって一番重要であることは、自分が消費者であるということである。

地域においても、行政サービスの消費者という立場、学校においても、学校教育というサービスの消費者の立場。消費者のプロであることが、私をささえるアイデンティティーである。これを自嘲気味に言い換えると、素人ということになる・・・。

キュウタロウの友人は、声無き株主を声ある株主にしたいと言って、活動しているそうだが、私は、消費者の声を世間に登場させることを目標にブログを書き、ウェブ市民新聞に記事を寄せる。消費者が意見を言うという、企業はクレーマーかと気色ばむ。しかし、それではいけない。私はさまざまな企業に提案をしてきたが、企業側の対応はすべてがクレーム処理。私が提案したことを建設的に取り入れて製品に生かしたという例はない。私はこれから、消費者の立場で、企業に提案していこうと思う。アクセス数が千を越えるならば、一定の効果も期待できるのではないか...

もちろん市民インターネット新聞にも記事を書く。こちらはアクセス数は万の単位。とはいえ、市民インターネット新聞に書けないこともある。そこで、私はメディアを駆使しながら、消費者にとってのよりよき 21 世紀に尽力したい。もちろん、すべてにおいて読者にとって魅力ある記事をめざします。よろしく願いもうしあげます。

ブログ熱。

私がブログを開始してからすでに1年近くが経っていた。ブログをスタートしたキッカケは、所謂子育てブログを作ろうとしたもの。当時のブログに私は次のように書いている。

私は娘の公園デビュー以来、さまざまな子育てに接してきた。その経験から、こういう子育てをすべきであるということがなんとなく分かってきたし、こういう子育てをした人は、こういう子どもになるということも明らかになってくる。

ある日、うちの娘があるクラスメートの女の子にいじめられて保育園に行きたくないという。保育園のいじめなんて、どっちが悪いという話ではない。いじめる方もいじめられる方もそれぞれの理由や問題を抱えているはず。そこで、娘の保育園のクラスメートの女の子のお母さんに、相談を持ちかけた。私は、うちの娘がいじめに弱い気持ちも打ち明けたし、そういう争いが子どもの心を育てていくから、双方の親が情報を共有して、まずは静かに見守るべきであるという私の気持ちも訴えた。

だが、結果は最悪。何日かたったお迎えのとき、そのお母さんのご主人が私を睨みつけた。私は、彼に近寄っていき、彼の怒りの理由を聞いた。彼の言い分は、「俺の女房に文句を言うな」そんなことだったと思う。私は私なりに、自分の経験を披露して、こういことをすると、こうなりますよ。と提案したつもりだった。だが、私の提案は娘をとりまくコミュニケーションを悪化させることにしかなかった。

同じようなことが、娘の成長にしたがって、さまざまな場所で起きた。その典型は、小学校や近所の児童館…。私はその都度起きている問題を指摘し、進むべき方向を示唆したが、交渉先のほとんどは問題が発生していることすら認めがらなかった。

経験で人の考えが変わる。私はそのことをおもしろいと思う。たとえば、子育てをする前は、「怒ってはダメ。子どもは叱るの」という教育論が正しいと思っていた。だが、実際に子育てをしてみると、子供を怒らないなんてことはまず無理。そして、叱るという行為は、アルプスの少女ハイジのロッテンマイヤーさんじゃないが、とっても冷たい行為に思えてくる。勿論、怒るにも程度が必要。怒った場合にはその倍の愛情を注ぐ必要があったり、さまざまな注意が必要。それでもなお、怒るといのは、親の喜怒哀楽を見せることだから、素晴らしいこと。もし、親が自分の喜怒哀楽をみせずに子育てをしていたとしたら、そのコミュニケーションは歪んでいるに違いない。

私は、現実社会で、自分のまわりから、口コミ的に情報を発信することが実生活に支障を巻き起こすのなら、インターネットを使って、ある程度距離を持った人たちに情報を伝達することで、少しでも日本の子育てのあり様を変えようと思った。だから、私が子育ての話 personal ブログに書くことはネタ(匿名な事象で事実性は保障されない)ではない。

自分の経験から、他者に助言する。経験は事実であり、意見でないから、口論にはならないはず。でも、現実はそうではなかった。経験から導き出した考えに、相手は不快にな

ったり、反論する。そして、起きている事実さえ、認めない。まさに袋小路に迷い込んだようだった。

もちろん、無名の自分が日本の社会を変えることなんかできるはずはないし、そう思うことは傲慢だ。でも、10年ぐらい続けてみて、俺はやってみただけでダメだったんだ。と、娘に嘆くことはできる。ジョン・レノンだって、世界に平和をもたらすことはできなかったんだから、それでいい。やらない理由にはならない。

そして、ブログを書き始めて1年が過ぎ、アクセス数はようやく一日700件に近づいた。なるべく多くの読者と出会いたい。そういう気持ちから市民記者にもなった。そして、アクセスは突然千件を越えた。

喜んだ私は感謝の言葉をブログに書き込んだ。だが、千を越えたのは別の理由だった。

爆発的に増えたのは、巨大掲示板あなざあチャンネルに、私に関するスレッドが十数本立ったこと。スレッドとは掲示板のひとまとまりで、誰でも新しい話題があればスレッドを立てることができる。

新規にアクセスした人のほとんどは掲示板で悪口を言われ放題になっている私のブログを興味本位に見に来ただけ。私の意見や発言が受け入れられたり、広がっているのではない。やじ馬が火事を遠めで見るかのように、たくさんの人達が私のブログを見に来たのだ。掲示板に私のスレッドが立ったのは、私がインターネット新聞に記事を書き始めて2週間ほど経ってから。書き込みの数はすでに千件を越えていた。

私は、それまでにも、電子掲示板やブログでの経験から、インターネット上での感情丸出しの論争やスパムまがいの行為に私はある程度慣れていたと思う。また、インターネットで意見を言ったり、自分の身の回りのことを記すといっても、メディア的な世界とプライベートな世界の線引きは明確にしてきたつもりだった。

もともと表現の周辺のいざごごには関心を持っていたから、臼井吉見の川端康成の自殺の原因にまつわる小説の裁判沙汰も知っているし、柳美里の親友とのできごともおさえている。だから、名誉毀損で訴えられるようなドキュメンタリーという手法ではなく、小説的な手法を用いていた。勿論、その裏には小説に対しての憧れやインターネットは所詮バーチャルに過ぎないという諦念もあった。一世代の大勝負ならば実名もよしだが、それ以外は勘弁だ。

そんな思いは私が長らくテレビやラジオの制作の仕事をやってきた経験から培ったもの。だから、自分の中では破綻はないと決め込んでいた。だが、今回のバッシングは、その量と質が大幅に違っていた。そもそも原因は、市民インターネット新聞が市民記者に実名で記事を書くことを条件としていたこと。私はインターネット新聞で、実名にスパンタというネット上の名前をそえて記事を書いていた。

固定ハンドルネームというのだが、簡単にいえばずっと使うネット上のニックネームで

ある。私はスポンタという名前を数年前から使っている。スポンタは英語の spontaneous から来ている。私はその由来をブログに書いている。

親友のイギリス人夫婦。彼らの子どもたちと私と娘が世田谷の公園で出会ってから、すでに6年が過ぎています。彼らは、日本が好きで日本に住み、日本で商売をしているが、それでもロンドンへの一時帰国から日本に戻ってくるときに、また日本人の独特の国民性と付き合うのかと思うと、慄然とするのだという。そして、帰国したてのあるとき、私に次のように言った。

「きみは日本人には珍しくスポンティニアスだ」

「日本人との付き合いはたいへんだけれど、きみと話をするとほっとする」

私はそのとき、スポンティニアスという英語の単語を知らなかったので、訳がわからぬまま家に帰り、英語の辞書をひく。

spontaneous：自発的な、率直な、自然発生的な。

彼らが子供を通わせているインターナショナルスクールでは、食べ物や習慣、宗教も違う子どもたちが、ひとつの学校でない混ぜになって学んでいる。そこでは、他人と自分が違うことはあたりまえだから、そのことで自分を見失ったり、不機嫌になることなどありえない。普通の人といっても、肌の色、眼の色などさまざまに普通の人などという概念さえありえない。なのに、日本の日本人社会では…。私はスポンティニアスというレッテルをイギリス人から付けられ、自らスポンタと名乗った。

イギリス人の友人が、私のことを「日本人には珍しく、思ったことをはっきり言う」と感じるのなら、それは私と議論する他者にとっても同じはず。少なからず日本人としての違和感を私に感じているはず。ならば、私はその体験を語ることでその違和感を少しでも減じよう。

自らの体験は自らの解釈によって文章となる。実生活では摩擦を恐れて伝えられなかったことも、ブログ上の第三者に対しては気持ちを伝えることができるかもしれない。否、自分の気持ちを伝えることが目的ではなく、私の体験や私の解釈がネット上の他者にとって有益であれば、それでいいという態度。勿論、ブログに文章をつづることでの達成感はある。コメントがつけばうれしい。だが、そういう達成感やコミュニケーションの喜びでブログを書くのではない。だから、マスコミや他のブログに自分と同じ考えや意見が載っていたら、記事はアップしない。勿論、似たような記事になることはある。だが、そのような場合でも、情報の発信者としては、それらとの差分を明確に意識している。

インターネットでの基本的なブログの読み方は斜め読みだろう。読み手としての私が興味を持って読めるのは、1200字が限界。かといって、情報の送り手である私の筆力では、短い文章では微妙なところを伝えることはできない。ならば、スポンタという固定ハンドルネームで書き続けることによって、私の文脈を知ってもらい、たとえ短い文章であって

も理解されるような読者との関係ができればいいと考えた。

私はテレビ報道をワンコメント・ジャーナリズムだと思っている。誤解を恐れずにいえば、その行為は本質的に、ピンポンダッシュとあまり変わらない。つまりは言ったもん勝ち。だが、インタラクティブを特徴とするインターネットではそれはできない。メディア特性を活用しないやり方だ。

そういう思いを心に秘めながら、こつこつとスポンタという名前でインターネットで書き続けていた。その成果物が1日に数百というアクセス…。だがその数は、ブログの女王・真鍋かおりは勿論、商品プロモーションに利用される女子大生ブロガーのアクセス数にも遠く及ばない。それでもアクセスランキングのサイトがたくさんあるので、ブログをやっていると、いつのまにかアクセス乞食という心境になる。私もブロガーとしてアクセス数を増やしたい思いから、アクセス乞食になっていて、有頂天になっていた。だが、アクセス数は私へのバッシングが発生していることを示している。巨大掲示板あなざあチャンネルに書かれていた私に関する批判の書き込みは何から始まったのか……。それは、私が、同僚の市民記者のブログに書いた書き込みが発端だった。

市民記者のブログの話題は、藤堂とメジャー新聞との記者のネット上の議論を話題にしたものだった。キュウタロウの株式大量取得が社会悪であるかどうか。藤堂もメジャー新聞の記者もジャーナリズムをちらつかせながらお互いが名誉毀損で訴えることを匂わせながらのチキンレース。個人ブロガーの私には不毛としか思えない。そのコメント欄に私は次のように書き込んだ。

コメントタイトル：

日本語なんてくそくらえ。

本文：

日本語がなっていないと市民インターネット新聞に批判が集中している。だが、それは本質論ではない。私は、世の中の問題に直面して、そのことを公にして世の中を改善したいと思う人がいた場合、その人が満足な国語力を持たなかったとしても、一生懸命彼の文章を理解しようと努力する。誤植や語句の間違いがあっても、そんなことは気にならない。なぜなら、そんなことよりも彼の今の感情のすべてを受けとめたいからだ。

私の英語は長島茂雄と同じレベルである。しかし、私には相手と友達になりたい。理解しあいたいという意欲がある。だから、強引にずけずけと喋る。私が正直辛かったのは、まわりに英語が喋れる日本人がいる場合。娘の幼馴染のドイツ人のお父さんと日本人のお母さんと知り合いになった。家族同士のお付き合いで、通訳など介することはできない。お母さんは最初のうち、私の英語に疑問符をつけていたが、私が彼女の夫と友達になりた

い、理解しあいたいという気持ちを知って、次第に英語の間違いを指摘しなくなった。

もちろん、国語力があるにこしたことはない。だからといって、国語力のない人に発言を認めないという意見に私は納得できない。もっと記事を精査せよという意見がある。これも私は納得しない。インターネットはさまざまな意見を載せるべき。だから、それを吟味するのも読者であって、まずい記事だから批判するというのでは、インターネットで記事を見る必要はない。

テクニックかナイフか。演技か真実か。これは芸術論であり、演技論であり、表現論である。人が何かを表現することは、典型的な自己韜晦の所作である。だが、そこにおいて、自分を表現したい気持ちとの格闘は必要だ。

私は、記者が記事を書く作業が自己韜晦を肯定する作業になってしまっただけはおもしろくないと思う。記事を書くことにおいても自己韜晦(自分の存在を隠すこと)の世界に安住してはならない。私は記事を書くことは、恥をかくことだと思っている。署名記事を書くことで自らを晒し、大多数の面前で恥をさらす。自分が笑われることの代償として、相手に自分の気持ちを伝えることが許されるなら、こんな幸福はない。そういう勇気が市民記者には求められていると思う。

署名記事とはそういうこと。インターネットでの書き込みが、便所の落書きと言われるのは、その内容の愚劣さではなく、情報発信者への検索性が確保されていないことだと思う。

勿論、市民ウェブ新聞にもペンネームで署名された記事もあがっているが、その場合にも編集部という組織を通じて、情報発信者にトレースできる。私はサイト上でなるべく返事を書くことにしているが、トレースできない情報発信者に対してはその範囲ではない。それは、人が名乗っているのに自分は名乗らない無礼な奴だ。という意味だけではなく、情報発信者固有の文脈の中で、その人の発言を吟味しないと意味がないと考えるから。とはいえ、私のブログ上の記事を読めと強制するわけではない。私は、私という文脈を知っていただくことで、誤解の可能性が減るのではない。そのように期待するからである。書くことの勇気。わたしは同胞の市民記者たちに訴えたい。

誤植

X 誤解の可能性が減るのではない。

O 誤解の可能性が減るのではないか。

いやいや偉そうなことを書いても間違える。どうしようもない私です。許してください。

~~~~~  
振り返ってみれば、「日本語なんてクソ食らえ」というタイトルが軽率だった。

「クソ食らえ」という表現はあまりに粗野だ。言葉を軽んじることを批判することは賛同者を得やすい。つまり、平和運動や戦争反対、人権擁護と一緒に、誰も反論することがで

きぬ文言…。トートロジーとでもいうのだろうか。ディベートの最終兵器の類だ。

私は映像やイベントを演出するのが仕事だが、そのための文章も書く。だから、そういう業界向けの文章修行はしてきたと自負している。そして感じるのは、仕事によって文章のスタイルを変えなければ顧客を満足させられないこと。新しいメディアについても同じことがいえるのではないか。だから、新たに書き始めた市民記者たちの国語力が批判されることは間違いだと思っている。勿論、市民記者の国語力への批判は、編集能力の低さの現れでもある。編集部から私にやってくる事実誤認を指摘するクレームメールは、彼らの責任逃避の気持ちを感じさせた。

とはいえ、編集は勿論のこと、採用不採用を決める権限のある人たちを批判する気持ちに私はならなかった。新しいメディアのあるべき文章スタイルは、これから市民記者たちが記事の文章スタイルの多様性から導き出されるものであって、旧来のメディア観にとらわれた部外者の批判によって形成されていくものではない。そう私は考えていた。記事の内容ではなく、誤字脱字や文章力が批判されることで、市民記者たちが記事をアップしにくくなる状況。オープンゲイト社は実名で記事を書くことを市民記者に強いていたから、このままでは書く者がいなくなる…。

その考えの裏で私は、あなざあチャンネルのことを猛烈に嫉妬していた。彼らが当て字を使うのはワード検索に引っかからないための修辞法である。だが、そうして編み出された手法は、文章の巧拙にとられることなく、その内容をダイレクトに味わうべきであり、感じるべきだということを実践している。

私のコメントは火に油を注ぐ結果となり、同僚市民記者の個人ブログを飛び越え、インターネット上のいろいろなところに飛び火していった。はじめてあなざあチャンネルを覗いたとき、すでに私のハンドルネームをグーグルで検索すると、検索結果は3万件をゆうに越えていた。今でも、スポンタで検索すると2万7千件を越えている。そして、そのほとんどの記事が私を嘲笑し、批判している。

あなざあチャンネルのスレッドのタイトルは、「【基地外】スポンタ【市民記者】」そして、「【スポンタネチズム】市民記者を見守るスレ【ヘタレマスタ】」。ヘタレマスタとは私と一緒にバッシングされた和歌山在住の市民記者である。

同時に、私に関する Wikipedia ともいえるのまとめサイトも出来た。「はてなダイアリー：中村厚一郎とは」。その他、オープンゲイト市民インターネット新聞の市民記者を一応にまとめた Wiki も何者かによって作られた。

掲示板の書き込みもまとめサイトも誰が作ったのかはわからない。ただ、ここで重要なのは、それらを作り上げた動機が私に対する嫌悪によるものだけということ。それは彼らにとって正義である。彼らの文脈の中で、私は体罰主義者の卑劣漢。または、有名になりたい症候群の浅はかなオヤジである。劣情と正義感がない交ぜになった動機がサイトをアップさせるための少なからぬ時間と技術を彼らに消費させた。正義とはなんとも怖いものか。

私がバッシングされた理由は、実は市民インターネット新聞に書いた記事が原因ではな

かった。それまで私が書いてきたブログに対する批判が主だったものである。

バッシングの標的となった私のブログエントリーは次だ。

-----  
ブログのエントリータイトル：

アミューズメントな人間関係でなく…。

エントリー本文：

土曜日、わたしが主宰しているバンドで、多動症的傾向をしめしている小学生の男の子の頭を叩き、スネを蹴った。勿論、どつきは吉本のツッコミ程度、スネは柔道の刈技程度である。信念があっても、はっきり言って辛い。体罰の底に私の感情がないわけではない。私の感情が体罰に結びついていないと完全に否定しきれない。男の子への体罰は、彼の両親が見ている前でしか行なわない。体罰は短く行う。説得力のあるものにする。ねぎらいの言葉はかけない。メソードどおりに行ったつもりだが…。(略)

-----  
私は近所の児童館で、「ピアノで遊ぼう」というボランティアをやっていた。何故、それを始めたかといえば、娘の友達の女の子が我家にやってきて、ピアノをつまびいたからだ。その子が一本指で弾く「ドレミのうた」にあわせて、私は伴奏をつけたら、ほんとうに楽しそうな表情をした。それからほどなくして、その女の子の噂が娘から入ってきた。曰く、嘘つきだという。つまり、その子は、自分は英語を習っている。ピアノを習っていると、平気で嘘をつく。彼女の家は、両親が若く、下の子もいるので経済的に余裕はない。だから、彼女が習い事をしたくともできない。かといって、クラスメートの父親でしかない私に何ができるでもない。そこで始めたのが、児童館でのピアノサークルである。児童館の廊下にポスターを貼って、土曜日の午後を過ごしたが、その子はやってこなかった。やってきたのは、ピアノを習っている子ばかり、彼らは、得意満面でマスターした練習曲を弾く。ピアノを本当に弾きたい子は、ピアノが弾けないという劣等感を持っている子である。だが、劣等感を持っている子は、なかなか自分からピアノを弾きたいなどと言い出すことは出来ぬのだろう。

私のカリキュラムは、2つのコードで曲を弾こうという簡単なものだったが、生徒はなかなか集まらなかった。

そんなとき、娘と同級生の男の子が私に電話をしてきた。「おじさん、エレキギターを教えてよ」。落ち着きがなく、友達関係も上手くつくれない、多動症傾向のある彼が私に電話をしてきた。私は、ピアノをギターに代えて、レッスンを開始する。

彼とのレッスンが始まって半年ぐらいのエピソードを書いたのが、先のブログである。少年はエレキギターへの興味はあるが、それが続かない。コードを押さえることもできないのに、かき鳴らす。これでは音楽にならない。そもそも、サイドギターのシャッフルは、

ビート(拍)に合わせるものであって、メロディーにあわせて行なうものではない。

少年の父親と少年、そして、私と私の娘。毎週日曜日の午前中。5分と集中力が持たない彼ととつき合いながら、半年はレッスンを続けたのだろうか…。その年の9月。少年の父親がヤマハの音楽教室でエレキギターの先生に習うことになった。少年のエレキギターに対する興味は衰えていない。だが、多動症傾向があり、集中力が続かない状況が改善されなければ、プロのミュージシャンでもある先生はレッスンを諦めてしまうだろう。荒療治ではあったが、彼の多動症的性向を少しでも和らげるには体罰も仕方ない。私は、体罰を是認する教育者のホームページをにプリントアウトするとともに、少年の父親に渡した。そのときのことを書いたブログのエントリーがバッシングされたのだ。

5年前の当時も、そして今も、体罰について肯定されているわけではない。とはいえ、戸塚ヨットスクールの戸塚校長が刑務所を出所してきて、マスコミの浅薄な論者たちが議論を交わしてから、少しは変わってきたような気がする。スタジオコメンテーターを勤める教育者の中には、他人の子供に体罰をするつもりはないが、自分のこどもには体罰を処するという者も出てきた。

私は、体罰はプロレスの反則のようなものであると、たびたびブログに書いてきた。反則はやってはいけないが、反則をしないプロレスは窮屈である。反則をやることは褒められたことではないが、3回までは許される。私は体罰を肯定しないし、肯定することはよくないと思うが、否定することは窮屈である。そして、何よりも、教育というものが、教育者が被教育者に何物かを刷り込むことだとするならば、教育する側も痛手を負わなければならぬ。手を汚す覚悟が必要だと思う。

私は、小学4年の子供たちを夏祭りのステージに上げた。キーボードでCとG7のふたつのコードを引くだけのことだが、それだけで演奏が成り立つし、盆踊りのステージ上につくられた舞台上でこどもたちはスターになった。

この同じステージに前後して登場したのが、ダウン症の青年だった。毎年のステージで彼は歌を歌うのだが、誰も聞いていない。彼は、もう三十歳を越えているのだろうが、アルバイトをしながら、老いた母親と暮らす彼。一年に一度のステージが彼の日常にとってどういう意味を持つのか。そんなことを思った私は、小学生バンドに彼を招き入れた。そして、秋祭りのステージで彼と一緒にステージに立つ。

日常の彼はファストフードの店でアルバイトをしているという。社会福祉に貢献したい企業の方針によって、彼を雇い入れているのだ。だが、その職場に彼は不満があるという。彼は、厨房や接客をしようと思って行ったのに、草むしりをさせられたと怒っている。彼が働くのは、誰でも知っている巨大チェーンである。サービスはマニュアルで規定されている。障害を持つ彼がマニュアル通りに働くことはできたとしても、それには時間がかかってしまい、客からクレームを受ける可能性は高い。それに、もし彼がつくった料理に不都合があれば、店そのものの存続にも影響する。ホールでの接客も、心の広い客ばかりではないだろうから、障害のある彼には難しいといえる。

どんな仕事でも苦勞があるし、仕事をしてお金がもらえるだけで感謝しなければいけない。自分も仕事をしているけど、君は雇わないよ。でも、あの会社は君を雇ってくれる。こんな素晴らしい会社はないじゃないか。と、私は彼に説教をした。

私の言葉に、それまで執拗に、明確に話していた彼が、突然、私の話を理解しないという素振りを見せる。

都合が悪いことになると呆けたふりをするボケ老人がいるが、彼もその一種だったのかもしれない。勿論、彼だけが悪いのではない。彼の人生について、彼の心について、もっと深く関わろうという人や組織がいなかったのだろう。彼の周りにいる人たちは、彼に楽しいことや嬉しいことばかりを提供して、悲しいことや苦しいことを遠ざけてきた。それはまるで、彼が障害を持っていることで悲しみと苦しみを十分に与えられているとでもいように…。だが、そのような思い込みこそ、健常者の傲慢であって、彼を歪な人間に育ててしまった。とはいえ、日曜日の数時間しか交わらぬ、私のささやかなバンド活動で彼を矯正することなど殆ど絶望的だ。

そして、一年が過ぎ、彼といくつかのステージを終えた頃、彼がわがままを言い出した。すでに彼がボーカルをやる曲を練習していたのだが、別の曲をやりたいと言い出したのだ。

カラオケではたくさんの曲を歌いたいののは分かる。だが、バンドではたくさんやればいいものではない。多くの曲をやるよりも、ひとつの曲の完成度を高めていく。それが常道である。ましてや、小学生と障害者の混成バンドである。ステージに完成度を求めるならば、新しい曲をやってもいいことは一つもない。

私は何度も彼を説得したが、彼は納得しない。そして、そんな説得が説教に変わったある日、練習中に彼が倒れたのである。園児が座るような低い椅子から、後方に彼が崩れ落ちた。私は、児童館の職員を呼ぶと、職員は救急車を呼んだ。

程なくして救急車は到着。救急隊員は彼をストレッチャーに乗せ、脈拍などの数値をモニターするためのセンサーを彼に取り付けた。だが、救急車は一向に発車しない。そのことは彼の昏倒がパフォーマンスに過ぎぬことを表現していた。しばらくして、彼の母親が現場にやってくると、救急車はサイレンも鳴らさずに発車した。

私はブログにそのことを書いた。私を嫌いな人間が内容を要約すれば、「スポンタが障害者を病院送りにする」となる。確かにそれは分かりやすいし、インパクトがある。バッシングには好都合というものだ。

そして、もうひとつはインターネットに関して。

私は健康な成人男性なので、インターネットでエッチな画像を見る。そんな自分を誇る必要はないのかもしれないが、そういう日常があることで、手鏡を持ち歩く経済学の大学教授のような犯罪に身を染めることをしないでずんでいるともいえるだろう。もっとも、インターネットでその思いを増幅しまって、刑事犯に繋がるケースもないとはいえないだろう。

そして、ある日、私は少女アイドルグループのメンバーの盗撮動画をインターネットで

発見する。その画像は、テレビ局かどこかのトイレで撮影されたものであり、便座に腰を下ろしてる女性タレントがトイレットペーパーを勢いよく廻すシーンであった。この動画は盗撮ではあったが女性の秘所が映っているのでもなんでもない。有料サイトのトレーラー(予告編)として公開されているサイトで一部分を見たに過ぎぬので、用を足すところもない。勿論、用を足すところといっても、それは表情から類推するしかないのだろうが...

私は、その動画を娘と妻に見せた。それが猟奇的であるとして、巨大掲示板でバッシングされた。

私とその動画を娘に魅せた理由は2つある。ひとつは、トイレットペーパーを無駄に使うな。という節約の意味である。

娘は清潔好きなのか、それとも浪費好きなのか、カラカラというトイレットペーパーが回る音を楽しむようにトイレットペーパーを消費する。数回も彼女がトイレに入ろうものなら、すぐに紙はなくなる。経済的に余裕のない我家ではたまったものではない。そこで、この動画を見せ、トイレットペーパーを浪費することがみっともないこと。恥ずかしいことであると、娘に分からせたかったのだ。

娘に伝えたかったもうひとつは、世の中の卑劣さである。

当時、発売と同時にヒットチャートを席卷する少女アイドルグループ。そのスポットライトの陰で、こんな悪事が起こる。

少女たちが輝かしい笑顔でテレビに登場する姿には、何の翳りもない。だが、彼女たちは寝る間もないような厳しいスケジュールの中で、歌詞を覚え振り付けを憶える。そして、ステージで脚光をあびる。彼女たちを迎えるものの大部分は、感動のまなざしであり、賞賛であり、憧れであり、応援だろう。だが、その中には少なからずの嫉妬も混ざっている。そして、当然のごとく彼女たちは男たちの性欲を刺激する。男たちの欲望が明るく発散されるならいいが、それが盗撮のように陰湿に発散されるものもある。私たちは知ることのできぬが、精神病的なファンもいるだろうし、その中のわずかがストーカー的な行動に出ていることもないともいえない。否、そのような男性ファンがいないはずはない。

輝かしい少女アイドルグループに憧れるのは悪いことじゃない。だが、お洒落な格好をしてスポットライトを浴び有名芸能人と交流する姿に憧れてしまうだけでは浅薄である。テレビで世の中に出ること。有名になることで、いかに嫌な思いをするか。そういう嫌なことから戦う勇気を彼女たちが持っていることを知ってもらい、アイドルたちを尊敬して欲しいと思ったのだ。

私がブログに書いてきたことは、私の人生の文脈の中では破綻ないできごとであって、それがいかなる反響をよぼうとも披露したことに後悔はない。だが、私の行動の表面をなぞることで私を批判するネット者たち。巨大掲示板の住民たちが自らを肯定する道をひらいたとすれば、私は反省すべきとは思った。

反省の思いとはまったく別に、インターネットに綴られていく私の批判や無理解に無性

に腹が立った。かといって、個人ブログ同様、各種の掲示板にコメントを書き込むと新たに火に油を注ぐことは分かっている。私はやり場のない怒りを癒すこともできぬからと、掲示板をなるべく覗かないようにつとめた。

とはいえ、私の頭の中で自己弁護の思いが広がっていく。曰く、私が書いたことは私の真実だし、インターネット上に自分のことを晒したことに後悔はない。私は映画学校で校長である今村昌平から、「表現とは自分を晒すこと」との薫陶を受けた。自分のいいところばかり晒して自分の醜いところを晒さないのは卑怯であるという美意識もある。小説家の林芙美子は「あなたの小説はゴミ箱を引っくり返したようだ」と酷評されたが、けっして表現をやめなかった。

それまで、私がブログで五百件を超えるエントリーを書いてきた理由は明確だ。それは、私がそれまで実生活で関わりのある人たちに直接、心得違いや誤りを指摘してきたから。そうした場合のすべては、過激に反発されたり、自己弁護に走ったり、無視されるだけだった。現場の職員たちの仕事はある意味、現場での顧客のクレームを上司のレベルまで上げないことであるといっても過言ではない。そして、ほとんどの場合、その後のコミュニケーションに支障をきたす。これでは何の解決にもならない。

私はあるべき明日のことを説いているのに、それを今日への批判だとして現場の人たちから反発される。相手から反発されてしまったら、あるべき明日は訪れない。だから、私は注意深く固有名詞を書かなかった。まるで小説を書くように、自分の日常をつづったつもりでいた。だから、どんなに私が叩かれようと、それは思想信条の問題であって、表現者の勲章だというような屈折した思いもあった。

\*\*\*\*\*

バッシングされる私。

\*\*\*\*\*

表現者に毀誉褒貶はつきものである。だが、そのように楽観視している状態ではないと妻が怒っている。

私は、怒りっぽい性格なのであなざあチャンネルを見ることを避けていた。だが、妻は、自分のことではないから、冷静に掲示板を見続けた。彼女は忙しい年度末の丸二日間をぼうにふって、丹念にリンクをたどり、検索をかけながら、ことの発端と全貌をつかんだ。

私は自宅の住所をインターネット上には一切掲載していない。それにも関わらず自宅住所の詳細が明らかになっていった。どうも地域系の掲示板などで、私のことを話題にして、地域の掲示板ユーザーが書き込んでいるようである。

考えてみれば当然だ。私がよく行く豆腐屋は住所を載せてある。お店の宣伝効果をねら



ったから当然のことである。そのお店に行くということは大体の生活圏が分かる。そうやって調べていけば、娘の通う小学校の固有名詞を知るのは簡単だ。類推していけば、わたしが話題にしている児童館も、どの児童館であるか調べるのは簡単だ。巨大掲示板には、そのようにして、私の家のおおよその場所を記した地図が張られ、娘の通う小学校のホームページのリンクが貼られた。娘の遊ぶ行動範囲もしめされる。そして、スポンタという人間は社会悪の権化だから、攻撃せよ。攻撃者を募るとの文言が躍っていた。

そのスレッドは市民インターネット新聞関連にとどまらず、ご丁寧にも、人権擁護、児童虐待、DV、子育て支援、地域限定スレッドにまでコメントがあったり、リンクが貼られていた。

市民記者は、実名での投稿が原則だった。かつて既存のメディアの住人だった主宰者には、実名で記事を書くことが報道の基本であると考えていた。一方の私は、実名で書くことで表現の幅が狭められてしまうならば、実名や固有名詞にこだわっても意味はないという意見。とはいえ、実名で書くことが誠実であるとも感じていた。そこで、実名の横にハンドルネームを添えることで、ブログの読者にも私の記事である表記にした。勿論、市民記者メディアの読者たちが、記者である私に興味を持ってもらい、個人ブログを閲覧してくれるとうれしいという気持ちもあった。だが、その結果として現実となったのは、私の名前を手がかりにすれば、我が家を襲撃することも不可能ではないということ。妻が丸二日をかけてあさったエントリーは三万件以上。彼女は、この脅迫を警察に訴えるか、2ちゃんねるの運営者に削除依頼を出すかを案じていた。そして、事態を楽観していた私にメールを送ってきた。

-----  
べ・ヨンジュンが自らを「公人として発言し、文を書かなくては。行動も然り」と言っています。今やあなたは「公人」になってしまったのです。ある意味メジャーになったというのでしょうか？そうかも。

であれば、貴方自身を誤解されないように、きちんと身の回りの誤解されやすいことをチェックしませんか？ プチギレキャラは、今後やめましょう。それは私のためではなく、娘のためです。

あなたは見たくないと言うので、私があなざあチャンネルを調べたところ、次のことをやってほしいと思います。

1. ミキシー（他のこの種のものからの脱会も検討してください）を脱会できますか？脱会しないのなら、年をさば読むなんてアホなことやめましょう。貴方はそのままの年齢でもとても素敵です。若いです。自分が生きてきた年月を自負してください。私は更年期障害の婆と書かれていますが、「じゃあ実際会って見る？惚れんなよー」とフンと思っていますよ。

後注：芸能人が年齢にサバを読むように、ミキシーで、私は年齢を詐称していた。相手が想定する年齢によってコミュニケーションの質が変わることを言い訳にしておく…。気がついていると思うけど、あの関係者から内輪話が漏れているようです。どうも個人ブログで論争をしたときの人に関わっていて、その議論に加わっていた私もこのバッシングと無縁ではないことが分かりました。(私がブログを始めた頃一年ほど前に、ブログで紙オムツに関する論争を展開したことがある。私のブログの目的は、自分の娘の子育てを通じた経験をブログで語ることで、世の中に散見する子育ての問題を提示することだった。コメント上での論争は、10人以上のネットワーカーたちの中で続けられ、賛成派・反対派・傍観派に分かれて議論が続いた。そして、反対派の中には、私のブログ以外の掲示板やメールで情報交換をしあう人たちもいたようだ。)

3. アドレス変えますか？

4. ブログの引越しも検討しませんか？

過去の記事は財産ですが、ここまで誤解されて引用されてしまうと、将来に影響が出てしまいます。ブログのおかしな連中がアホなことをあなざあチャンネルでやっているのなら、ブログから引越しませんか？ 私もちよっと考えます。

5 教えて goo の貴方のコメントを削除できますか？ あなたは真面目に回答していますが、部分的に悪用されています。

(教えて goo の恋愛のカテゴリーで、高校生の恋愛問題についてスポンタの名前で回答をしていたことがある。教えて goo の質問者たちはとても誠実に自らの悩みを打ち明けていたので、スポンタの名前で回答をしていた。その誠実さに、あいまいに答えている回答があると、それでは質問者たちの誠実に答えていないとの思いがひろがって、かなりの回答をしていた時期があった。)もっとも、これに関してはあなたがあまりにも偏ったカテゴリーに回答しているので、面白がられていると思います。

6. エッチサイトへ行くのはやめましょうね。何だかしらないけど、貴方がエッチサイトへ行った記録まで掲示板にのっかっています。これって、ある種のハッカーみたいなのかしらね？ 恐らく貴方のアドレスから、記録を全部一生懸命拾ったみたいで。あなたのアドレスからのアクセス記録がどうやったら調べられるのかは？ ですが、出来る人には出来るのでしょう。(インターネットのエッチ部門のアクセスランキングのトップ10に入るような、とても健全な?無料サイトを覗いていたのです。私は、映画学校時代、ピンク映画でアルバイトをしたこともあるし、ピンク映画から一般映画の映画監督に上りつめた親しい友人もいる。きわめて正常な男性の行為なのであったが、それを妻から指摘されたのは、ちと辛い。)

-----  
私のバッシングには、3つのキッカケがあった。

ひとつは、ブログの紙おしめ論争にはじまった私の反対派。オフ会などで交流があるらしい彼らは、いち早く「スポンタ攻撃隊」を作った。ふたつめは、ミキシー関係の人が市民記者で記事が採用されなかった人達を刺激して、私へのバッシングをそそのかしたこと。みつめは、あなざあチャンネルで祭りに参加している人達....

バッシングする者の中にも優しい人がいて、次のコメントを残してくれた。

-----  
長くなるので、私があコメントを残すきっかけとなった原因を箇条書きで書いてみます。

1. スポンタさんがページビューアップの目的で、ピングー(新着記事紹介のための信号を発信すること)を乱発していた。これって、嵐にも似た不正行為として批判されていい。
2. 私の知り合いがスポンタさんの記事にトラックバックしたにもかかわらず、その記事に対して擁護するがコメントを書いたのは奥さんだった。それが、なんとも意図的であり、必死感が漂っていて、嫌な感じだった。
3. どの記事も『自分の記事をすべて読んでいる人』に対して書かれているようで、前後関係がさっぱりわからない。
4. 書いてあるテーマについて読者は興味を持つが、非常にステレオタイプされた価値観を読者に押し付けるような書き方をしている。
5. アクセス数が増えたことに得意になっていることを公言して憚らない。
6. ついでに自分の文章作成能力が高いと自慢し、コメントを残しまくっている。

以上のようなことが積み重なって、バッシングにつながったんだと思います。

きっかけとなったコメントを書いた私が言うのも何ですが、つい、ぶちっときてしまったんです。(爆) あほなことしたな、と自分でも思います。とはいえ、スポンタさんに対して嫌悪感・不満を持っていた人たちが結構いたことがわかったので、まあ、よかったのかなとも。(よかったのか?)」

-----  
あなざあチャンネルには、私の住所や仕事先を突き止めたというコメントもあった。バッシング者たちは自分が脅迫の罪に問われぬよう犯行を予告することはしないが、攻撃者を募っていた。勿論、そのようなコメントを私が脅迫ととれば脅迫は成立する。そして、妻が見た中には、直接、私を攻撃をするとの発言もあったようだ。そして、彼女は私専門の過去ログの保存庫を発見したという。

なぜ、そんな保存庫が存在するのか。理由は簡単である。スポンタは犯罪者である。だから、後に事件を起こした時の証拠として提出できるように残しているのだ。現在のスポ

ンタに打撃を与えるだけでなく、未来のスポンタも抹殺してしまえ。当事者の私にしてみれば濡れ衣も甚だしいが、彼らにとってみれば社会貢献であり善意の行動である。彼らは同行の士を募って、連絡網をつくったり、役割分担をして作業をしていた。

たしかに掲示板の投稿者の中には、他の投稿者の記事に対して書きすぎだと指摘するものもいたし、私に「家族を守れよ」と促すものもあった。そして、あなざあチャンネルに存在する削除依頼の方法を指南してくれた。だが、私も妻もブログを運営しているので、削除依頼は却下される。

では、警察に訴えるかべきか。私にも妻にも警察への不審感はない。ただ、現時点で何も起きていない。その後のモナーに関するエイベックス経営者へのネット上の脅迫が事件化された事例の後ならば、当時の私のケースでも警察が介入してもおかしくない事例だったのかもしれない。しかし、私たち夫婦は、いま警察に相談に行っても気休めにはなるかもしれないが、実効はともなわない。逆に警察官に自宅周辺をパトロールしてもらうことのほうが、地域で生活する自分たちにとってマイナスだと思えた。

バッシングにあった次の日。私はフリーランスのシステムエンジニアたちを束ねた組合の事務所を訪れた。あなざあチャンネルでバッシングを受けている私が何をすべきなのか。そのことをインターネットに詳しい旧知の知り合いに尋ねたかったのだ。

「概ね好意的な書き込みじゃないですか」

前もって電話をしておいたシステムエンジニア氏は、にやりとしながら言った。

彼の発言は、私の自尊心を刺激した。なぜなら、彼の発言が私の市民記者活動に対して受けた、当事者・関係者以外の初めての発言だったからだ。

インターネットの弱点にバーチャル性があると指摘された時代があった。それを克服するために、クリック&モルタルという標語も出来た。その意味は、ネット上で素晴らしいシステムを構築しても、リアルな世界がないと信頼性を持たずに、ビジネスとしてヒットしないこと。

その数年前には、バーチャルモールという架空商店街(インターネットショッピングモール)をビジュアル的に表現するムーブメントもあった。それらは、三次元CG制作会社の技術披露の場であって、スポンサーやユーザーに利益ももたらさなかった。数年後、今度はフラッシュのブームが来る。ここでも、目新しさはあったものの、インターネットデザイナーやホームページ制作会社の受注金額を高めるだけ。その評価はグーグルというシンプルな画面構成の評価が上がることに比例して下火になった。フラッシュという技術は目新しい技術であるだけで、スポンサーやユーザーに利益をもたらさなかった。

インターネット上のe-ラーニングに関しても同じことがいえる。インターネット上に展開する有料e-ラーニングサイトの惨憺たる状況は眼を覆うばかり。これも、e-ラーニング制作会社とソフト会社の一時しのぎ的な利益を生み出したにすぎない。

とはいえ、最近では企業教育などで e-ラーニングは堅調な伸びを示している。その理由は、研修と試験という実体をともなった企業の人事考課システムのひとつとして採用されたからである。スポンサーである全国的に展開する大企業にとっては、移動費用を削減するメリットがあったし、ユーザーともいえる社員にとっても、人事システムの公平性を期待できたし、労働時間の効率的活用も実現された。勿論、教育専門業者たちも新しいビジネスフィールドを得ることができた。これなどは、クリック&モルタルの思想が活きた事例だと思う。

考えてみれば、インターネットの技術革新と時代の変遷は、広告やマスコミが爛り立てる技術革新が単に技術の進歩でしかなく、それが社会にとっての有用性とはまったく関係がないことを証明する歴史だったのかもしれない。ならば、現在の地上波放送の再編成や映像や音声を使ったマルチメディアにしても、所詮やっていることはバーチャルモールと同じで、将来を約束されているわけではない。

ふりかえれば、テレビ番組をつくっていたときは勿論、ラジオ番組をつくっていたときも仕事と関係のない知人や友人たちに自分が関わった番組の話題をすると、「あ、それ知っています」とか、「観たことがあります」という反応が返ってきた。20代の私はそのことがこの上もなくうれしかったし、自分のアイデンティティーをくすぐる出来事だった。舞台をやっているときは観客の数は限られる。それでも、街中にポスターが貼られるし、何よりも観客たちが足を運んでくれることで、手ごたえや充足感を得ることができた。

それに対してインターネットはどうなんだろう。2000年はブロードバンド元年といわれた。当時は、インターネットがビジネスになる時代がようやく到来したと言われていたがまだまだ ISDN。ほとんどは ADSL であり、光のインフラが整備されつつある時代。その年の秋、私はインターネットのストリーミング(動画)番組を作っていたが、関係者以外に番組をインターネットで見ている人はいなかった。そして、私が「やっているよ。観てね」と行った場合でも、「みたよ」といってくれる人はほとんどいなかったし、感想を述べる人など皆無だった。

YouTube が盛んな今と違って、当時のストリーミングは操作も複雑で、パソコンに与える負荷も大きかったから「見たい人」でも見れなかった人も多かったのは事実である。とはいえ、高度情報化時代というキーワードは死語になり、インターネットの時代が来ていたと思う。なのに、インターネット上のメディアで発信者が感じる社会からの手ごたえ・感じる浸透度は皆無といえた。それはどんなにインターネットが社会に浸透しようとも、インターネットがいかにもマス志向しようとも、プル(消費者が能動的選択する)のメディアであることに変わらない。インターネットとマスメディアの間には、桁違いのスケールサイズの乖離がある。そして、それは劇場内に限られた熱気のように、集まっている人たちの中では限りなく熱くとも、その熱気が世の中に広がっていくことを感じさせないものようだった。

「いやあ、たいへんなんですよ…」

さまざまな思いをのせて短いセリフをはいたつもりだったが、システムエンジニアの越山にその通り伝わったのだろうか。とりあえず、自分のうろたえを隠すのが大人の態度でしょ。との思いから、私も苦笑いで返した。そして、深刻な悩みについて、打ち明けていく。

越山は、プログラミングの仕事の合間に、スポンタで検索をかけ、いくつかのあなざあチャンネルのスレッドを斜め読みしていく。

「何で、あんなに叩かれているんですか？」

彼は叩かれている事実は把握しているが、叩かれている原因については分かっていないようだ。

その仔細を説明するには、500 を上まわる私のブログの記事を読んでもらわなければならないし、そもそも口頭では伝わらない内容だからブログで書き始めたのだ。私は口を濁すしかなかった。

「別にあなざあチャンネルと言っても悪い奴らじゃないし、きちんと説明をすれば納得してもらえることもある。私はそういう事例を見てきましたから」

とはいえ、私はさまざまな経緯から、巨大掲示板で発言することは火に油を注ぐことにはかならないと確信していた。ほとんど無名の私が同業と言うのもはばかられるが、シナリオライターの野沢尚氏がインターネットでの議論により精神的にまいってしまい将来を囑望されながらも自殺してしまったことも記憶に新しい。

「降臨というんですよ」

私はコアなあなざあチャンネルの愛好家ではないから、彼の話に興味津々だった。私は、「逝ってよらしい」「お前もな」と言い合う屈折したあなざあチャンネルの住人たちのダンディズムに共感していたが、それは文学としての文脈であって、情報工学的にはほとんど無知だった。

そして、ほんとうのところを言えば、私は私に対する罵詈雑言のすべてを把握している訳ではない。あくまでも妻からの間接的なものであり、彼女なりのやさしさと冷たさのフィルターが加味されたものだった。その意味では私は当事者でありながらも、当事者である資格を持っていなかった。

私は心配そうにしてくれた彼の同僚の女性プログラマーに私の妻の相談に乗ってくれることをお願いして、事務所を去った。女性プログラマーは親身になって、妻の話を聞いてくれ、相談に乗ってくれた。

彼女のアドバイスによって、私が行なったのは、個人ブログの関連記事の削除だった。プロフィールの削除。ホームページ上のアドレスの変更。掲示板の閉鎖。等々である。勿論、そういう作業を行っても、検索エンジンにキャッシュは残るから、不毛な作業でもある。キャッシュとは、検索エンジンが検索スピードを上げるために一時的にデータを保存していること。だから、私がネタ元であるデータを削除しても、キャッシュは数ヶ月残っている。それがグーグルのやっていること。そして、すでに私専用のデータベースが、私

の知らないところに完成しているのだからまったくもって意味はない。

ただ、その行動には明確な意味づけがあった。どんなに批判や中傷が起きようと、メディアに信頼性がなければ、その言説は評価されないということ。つまり、噂の真相を飾った記事が4大新聞の紙面を飾ることはないし、そういうところの発言を引用することは、その引用者の信用も汚すということ。その文脈で、私がブログの中で意見を述べた対象の人たちが批判を浴びることを阻止したかった。偉そうに言えば、罪を憎んで人を憎まずということか。なかなかそういうことの実践は難しいし、私のそういう微妙なニュアンスが伝わっていなかったのがすべての原因でもあるのだが…。

あれから1年以上経った今も、我が家は襲撃されていない。もちろん、インターネット上の私に関する記載もその多くが残っている。だから、今もその状況は変わっていないのかもしれない。だが、今になって考えれば、何万という記事の多さに比べれば、書いた人間の数は比べるほどでもない程少ないと理解できる。どんなにヒートアップしたといっても、所詮インターネット上のバーチャルなできごとであると、気を静めることもできる。

だが、その一方で、当時も、そして今でも、インターネットに犯行予告があることは珍しいことではない。そう気を引き締めて日々を暮らすべきなのだろう。

\*\*\*\*\*

孤独な市民記者たち。

\*\*\*\*\*

「この原稿は市民記者としての独立した私見であることをまず断っておく」

市民記者として、そう書くことをなかば義務づけられて記事を書いてきた人間は、バッシングされた悩みを誰とも共有できない。

妻のように、深くあなざあチャンネルを読み込んだ人間ならともかく、私のバッシングの表層だけを見ればそれほどの被害でもないと思えることもできる。だから、アクセス数の量や言及の数で、うらやましく感じることも仕方のないことかもしれない。

ただ、あの時に私と私の家族においていたことは、その約半年後に起き、犯人が逮捕された事件とまったく同じ。その事件の被害者である音楽出版社の社長はガードマンを雇う経済力もあったし、社会的注目度もあったから、警察に捜査を依頼できた。無名のわたしたちは途方に暮れながら、ただただおびえながらちごまっている他なかった。

私が記事を書いた当初、藤堂に直接メールを送っていたが、すぐに市民記者としての正式登録を経て、投稿システムを使うことになっていた。

市民記者それぞれに配布されたIDとパスワードを使って、記事の管理画面をひらき、投

稿画面に行く。記事を書き終えたら、記事のカテゴリーを選択して、確認ボタンをクリック。すると、確認画面に行く。私の記事の分量は、どうしても長くなってしまっていた。記事の分量は800字程度とされていたが、藤堂自身はその決まりを守っていなかったから、その決まりは、有名無実といえた。だが、さまざまな記者がエントリーをあげるにつれ、そうも言ってもらえない状況になり、私も、最大でも1200字程度を目安に記事を書くようにするとともに、それを越える場合は、連続記事の体裁をとった。

確認画面でエントリーを確かめてから、投稿ボタンをクリックする。すると、投稿した記事は自分の記事管理のページにアップされる。

投稿直後の記事は、リストにはチェック前という表記がある。投稿後時間が経過していても、チェック前という表示がある場合は、市民記者は記事に再編集を加えることもできるし、投稿を取りやめることもできる。だが、いったん掲載・非掲載の決定が下ってしまうと、市民記者は、編集することも記事をリストから削除することもできない。

スタート当時の私は、30本近くになるまで、投稿記事が非掲載になることはなかった。だから、このシステムへの不満はあまりなかった。だが、いったん非掲載の断が下されると、自分が投稿した記事を見ることもできないというのは、なんとも理不尽に思えてきた。

もっとも、当時の私にそれほどの憤りがあったわけではない。なにより編集者は、私の試験答案を鑑別する試験官であって、受験生が試験官を批判することは不遜であることは勿論、自らの受験生としての立場を危うくすると感じていたからだ。

私の記念すべき没原稿の第一作は、3月24日に投稿した「キュウタロウ、巨大資本に敗れる?」というものだった。

手元に残っていた記事のドキュメントを採録する。この原稿が没記事に値するのか、没ならばその理由は何なのか。

-----  
記事タイトル：

キュウタロウ、今度は巨大資本に敗れる。

本文：

プロ野球参入で敗れたキュウタロウが、メディア買収でも巨大資本に敗れる---。そういう記事が翌朝の新聞に踊ることは容易に想像できる。だが、私はそうは思わない。これでインターネットの世界は確実に変わっていく。一度動き出したムーブメントはもう止まることはできない。

...と、思っていたら、新聞には、「白馬の騎士かトロイの木馬か」という記事が踊っている。キュウタロウがラジオ局を獲得しただけで大成功という意見がある。インターネットの旗手であるキュウタロウがラジオ放送に参画することにより、市民ウェブ新聞もインターネット事業者としてはじめて記者クラブに加盟することができる。そのことでいまのインターネット報道のあり方が大きく変わるかもしれない。



今回はキュウタロウの株式大量取得をキッカケに、ネット系巨大資本がテレビに進出する。これまで、インターネットは著作権などの問題で一人前扱いされなかった。だが、その現状が少しずつほぐれていく。今後は、インターネットにおけるエンタテインメント系情報発信のネックだった各種の著作権問題が整備されていくだろう。それらの問題にキュウタロウが一切加わずに問題が解決していくなら、こんなに楽なことではない。

-----

4月4日、オープンゲイトの編集部は、市民記者どうしの意見交流のための掲示板ができた。

それまでの編集部から市民記者への連絡事項はメールだった。だが、メールで規約を作っても、メールの山の中に埋没するし、新人市民記者はそれにあたるできない。その点、BBS(電子掲示板)に留意事項がまとめて書いてあれば、気になったときに参照することも可能だ。当時はまだ、記事の投稿数が二百を越えた頃だったから、メディアの側も私のような市民記者の側もまさに暗中模索だったと思う。

たとえば、ひとつの記事に対して、複数の写真を添えることは可能なのか。その場合のレイアウトは指定できるのか。私はニュースセンターに問い合わせることを自らの禁忌要件にしていたので、記事を送りながら、その様子を見て自分なりに判断していた。

そのようにして、市民記者が責任を持つことの但し書きや、記事の分量、写真の解像度やキャプションの体裁などが、判例法よろしく並べられていった。

だが、この掲示板。市民記者として登録した人なら、共通のIDとパスワードを入れれば誰でも閲覧と書き込みが可能な形だった。個別のIDのログインでなければ、荒れることも予想はできた。勿論、匿名で投稿する人もいたが、あまり問題はなかったと思う。ただ、運営者を怒らせたのは、そういう問題ではない。市民記者の未公開掲示板の情報は勿論、未公開掲示板が存在することさえ市民記者登録者以外に漏らさないで欲しい、そういう運営者の願いが聞き入れられなかったのだ。

ここに大いなる矛盾が存在していることに、藤堂は気づいていたのだろうか。市民記者はインターネット新聞という組織の中の人間だが、それと同時に読者でもある。市民記者だけのコミュニティーという概念が成立するのか、それは絶望的な企みのはずなのに…。

藤堂は、シリーズものの特集を組もうと提案した。私は少しでも記事を書く登録者を増やそうと、国語力に左右されない、花見の写真を記事として募集したらどうかと続けた。また、インターネット上のニュースメディアでありながら、土日に記事がアップされないのではメディア特性にもとると指摘。編集側のヒューマンリソースが足りないのならば、平日の記事のうちで休日に相応しいものをプールしておいて、土日にリリースしたらどうだろうと、提案した。

これには同僚市民記者にも賛成の声があがったが、藤堂が実行することはなかった。

ある同僚市民記者から私にメールが届いた。曰く、この掲示板には、運営側の誰かが管理者としてホスト・ホステス役をつとめなければならないのに、その役目をする人がいない。それが、この掲示板でのコミュニケーションをとげとげしいものにさせている。と。当時の私は、編集部公認の市民記者交流掲示板の他に、研修会で出会った市民記者をはじめとする数人の市民記者と同報メールのやりとりをしていたのだ。

インターネット以前のパソコン通信の時代から掲示板は存在した。日本にはじめて登場したパソコン上のコミュニティであるニフティーサーブのフォーラムでも、いわゆる荒れる現象・アラシが起きていた。そういう 20 年近い経験の中から、コミュニティの管理者であるシスオペのハンドリングが重要であることを、多くのインターネットユーザーは経験として共有していた。シスオペの役割を果たすべきだったのは、運営の責任者だった藤堂だと思うが、彼にはその資質も意欲もはなかった。そういう不満が噴出したせいかどうかは分からないが、果たして非公開掲示板の内容は逐一あなざあチャンネルに流れていた。

この時期、私と同様なバッシングに藤堂も遭遇している。インターネットに慣れない彼は、あなざあチャンネルに降臨して議論をふっかけ、火に油を注ぐとともに、自らの感情もヒートアップさせてしまった。その頃、私の未熟な文章力と運営側の編集リソースの不備もあって、記事についてのさまざまな苦情が編集部から私にやってきた。その指摘のいくつかは、読者から寄せられたメールや、記事つけられたトラックバックからだけではなく、あなざあチャンネルの内容を編集部が閲覧して、私にクレームを言ってきたものではなかったのかと、私は推論した。

あなざあチャンネルの市民インターネット新聞ウォッチに対して、編集部はそ知らぬ顔でそのうちのいくつかを平然と修正し、そのいくつかを無視している。だが、そのようなやり取りに対して、記事がアップされた後の市民記者には一切の編集権がないから、何も文句がいえぬ。勿論、記事の責任は市民記者にあるというのに…。

4月13日、市民記者を対象にした研修会がひらかれた。費用は無料で、講師はテレビ局の解説委員を予定していた。講義内容は、日本とアメリカにおける、新聞とテレビのジャーナリズムについて、だという。

あなざあチャンネルでバッシングに遭遇し、市民記者なんて…。と、思いはじめていた私だったが、同僚の市民記者たちに会えることは魅力だった。そして、実名を強いることで、バッシングされ、襲撃予告をされ、個人ブログを閉鎖しなければならなかった私の苦境を知っているのかと、藤堂や編集部の人たちに尋ねたかった。勿論、記事の責任は自分が負う。そう同意書にもサインしている。そんなことは先刻承知。だけど…。

そんな愚痴っぽい気持ちの私は、斜めに傾きながら、オープンゲイト社のあるビルに向かった。

研修は、予定されていた講師の都合がつかなくなり、運営上のトップである藤堂が講義

することになった。はじめての市民記者向けの研修会とあって、大阪や和歌山から出席した市民記者もいた。私は、登録時の有料研修会で顔見知りになった体育大学の講師の青年を見つけたから、彼と並んで坐ることにした。

講義の内容は、日本におけるジャーナリスト教育の歴史や、結果として根付いていないジャーナリスト教育。また、諸外国のジャーナリスト教育の現状について。わたしは、自分が立ち上げたメディアの有効性を強調するだけの講義内容にやりきれなさを募らせた。

私は連日記事をあげていたが、まだまだ一日にアップされる市民記事の数は少ない。多くても5本ぐらいだっただろうか。記事が少ないことは、自分の記事が目立つことで、プライドをくすぐられるが、そのままでは、市民インターネット新聞がメディアとして成立しない。

ここに集まった市民たちは、自己責任を承認し、小額の報酬にも不平を言わずに記者活動をしようという奇特な人たちだ。だが、その大部分はまだ記事をあげることができない。勿論、彼らがまだ市民インターネット新聞に対して様子見を決め込んでいる部分もある。だが、私には、これから彼らが本気で記事を書き始めたとき、私と同じような状況が訪れることが予測できる。ここに集まった人たちは、薄々私の状況に気づいていて、そういう危険があるのならば...。と、記事を書かないでいるとも考えられる。ならば、その対策をねらなければ、この市民インターネット新聞の繁栄は永久にない。

だが、藤堂には、そのような危機感はまったくない。講義の内容をレポートした私の記事には、彼が「個人の連帯」と「勇気」が大切であると語ったことに感銘を受けたと書いてある。だが、実際の私は、もっと具体的な対策を練るべきだと考えていた。勇気だけで突っ走れというのなら、神風特攻隊と同じ。玉砕するほかない。市民記者が連帯できるコミュニケーションツールが存在して、それが勇気の源泉になる。さらに安心して記事が書ける制度がどうしても必要だと考えていた。

一時間ちょっとの講義が終わると、懇親会になった。アルコールがはいってしまったら、有効な議論などできない。私は、まわりの参加者たちと差しさわりのない話をして過ごした。とはいえ、どこかタイミングで藤堂をつかまえて、わたしを取り巻く状況と、それに対するメディア側の対応などについて意見を交換しようと思っていた。だが、当日の参加者にとって藤堂は話題の中心人物であって、一人占めするのは、大人気ない。最多掲載数を誇り、非公開市民記者交流掲示板でも多くの発言をしている私だったが、藤堂を遠くから眺めるほかない。私は、和歌山在住の市民記者と歓談した。

柔和な印象の男性で、私と年齢は同じくらいだろうか。彼はさびれていく地方都市をなんとかしようと、地域活動に精を出してきた。初対面の私に、名刺代わりにと、自分の活動を紹介した地方誌の切り抜きを差し出した。

彼は藤堂との間に問題を抱えていた。というのは、彼がオープンゲイト社のネームバリューを使って、地域の活性化に一役買おうとしていたからだ。その彼の思惑は、一切の経

済活動や売名行為を許さない藤堂の姿勢とぶち当たった。私は企業に属する団体が名前を売ることや経済活動を否定するのは愚の骨頂だと思っている。藤堂は経済活動と決別することがメディアの独立性を保つための条件とし、それが情報の信頼性を生み、結果として、読み手の情報リテラシーにも貢献すると考えている。だが、私はそうは思わない。どんなメディアであれ、組織の経営や存続に関わる固有の問題は存在する。ならば、それぞれのメディアがそれぞれのメディアの事情を公にすることによって、受け手はメディアリテラシーを得ることができる。

報知新聞に、巨人を賛美する記事ばかりでつまらないと文句を言う読者はいないだろうし、デイリースポーツで巨人のことを悪く書いていると文句を言う読者もいない。もし、本当のことを知りたければ、利害関係のない第三者の立場の新聞を読んで対照すればいい。朝日新聞にしたって、サヨク系親中国・北朝鮮系新聞と宣言してしまえば何の問題もない。その後ほどなくして、彼は藤堂との摩擦に疲弊し、市民記者として休筆宣言をすることになる。ただし、彼は書きたいことがあれば、個人ブログに書くし、ジャパンインターネット市民新に書いていい。

座の中心である藤堂はかなりの時間、ナオミという女性市民記者につかまっていた。彼女は帰国子女であり、最近フランスから帰った。彼女の専門分野は美術と医学の関わりだという。そして、ようやく懇親会も中締めになろうとしたとき、ナオミは藤堂を背後におさえながら、当日の参加者に向けて力説する。

「みなさん。オープンゲイトの市民ウェブ新聞は、赤瀬川原平を見出した読売アンデパンダン展のようなものをめざしましょう」

私は、その考えに納得ができなかったので、彼女の言葉をさえぎった。

「ちがうでしょう」

「ちょっと待ってください。反論は最後まで聞いてから」

彼女は最後まで話を聞かないので反論するのは非礼であると私をなじる。言論の内容ではなく、お行儀を非難された私は従うしかない。

「読売アンデパンダン展というのは、1949年に日本アンデパンダン展としてスタートした公募展です。読売という新聞社の名前がついていますが、それは1957年からのことで、単なるスポンサーの名前というだけです。この展覧会の素晴らしいところは、「無審査、無賞、自由出品」という平等主義の理想のもとに実施されていたことです」

藤堂は深く頷きながら語る。「私は市民インターネット新聞の主宰者という形で、みなさんよりも上の立場に立つような形になってしまっています。でも、私は、みなさんの記事を検閲しようとは思わない。ただ、語句を訂正したり、事実を確認するだけ。あくまでも、みなさんの自由を私は守って生きたい」

ナオミは、藤堂の言葉を追い風にして続ける。

「それまで官展・帝展など審査員の派閥によって作品を発表できなかった若手の芸術家た

ちに活動の場があたえられたんです。私たちもそういう自由な表現の場を謳歌しましょう」

ナオミの自由という言葉に、藤堂は拍手をする。すると、集まった市民記者たちも続いた。そして、その拍手の輪が収まったところで、ナオミは私の発言を促した。

「アンデパンダンっていうのは、インデペンデント。独立という意味ですよ。だから、アンデパンダン展というのは無審査の展覧会。無審査だから作品に権威はないのかもしれないけど、だからこそ、既存の団体や組織からは独立できる。そして、読売アンデパンダン展は、個人では借りられない大きな美術館で行なわれることでステータスがあった。一方のオープンゲイトはキュウタロウの名声でステータスがある。とっても似通っている。でも、どうなんだろう」

「あなたも読売アンデパンダン展を足がかりにして有名になった赤瀬川源平のようになりたいんでしょ」

ナオミは意地悪そうな目つきで私に微笑みかける。

「たしかに有名になることを望んでいた部分もありますよ。有名になれば社会的な発言権が得られますからね。そして、事実、あなざあチャンネルでバッシングされることによって有名にもなったのかもしれない。昨日、スポンタで検索をかけたら2万件にもなった。でも、それを私が望んでいたことかといえば、必ずしもそうでもない」

目の前にいる私が検索結果で2万件を越えるヒットを記録する有名人であることに市民記者たちざわめいた。

「勿論、何故、ネット上で有名になったかといえば、あなざあチャンネルでバッシングされたから」

「有名になればいろんな批判が出てくるのは当たり前でしょう」

「でも、読売アンデパンダン展が何故終わってしまったか。そのことを考えるべきなんじゃないかな」

「どういうことでしょう...」

「あなたは、日本アンデパンダン展ではなく、読売アンデパンダン展といった。読売アンデパンダン展は、日本アンデパンダン展の第九回展から第十五回展の六回で終了した。何故、そんな短命に終わったか、あなたは知っているでしょう」

「反芸術ということですか」

「そう。あなたが尊敬する赤瀬川はまだアバンギャルドだった。だが、それ以上に過激な反芸術的な人達がすべてを台無しにしてしまった。無審査を良いことに、鑑賞者を不快にしたり、展示会場の施設を傷つける。額縁というフレームを越えて会場の壁に絵を描くことも芸術の一つかもしれぬ。だが、そんな表現が広がっていけば、読売アンデパンダン展という展覧会そのものが中止に追い込まれるのは必至だ」

ナオミは腕を組みながら、私を睨みつけている。

「ここに集まっている市民記者の皆さんはお行儀がいいかもしれぬ。たが、市民記者が何千・何万と集まってきたときに、いまのままの自由が保たれるのだろうか。そして、問題

は赤瀬川原平。あなたは帝展や官展で拒絶された彼を発掘したのが読売アンデパンダン展で、市民インターネット新聞はそれをめざすべきだというけど、どうなのかな。赤瀬川にとって権威ある展覧会に合格できなかったから、その鬱屈を読売アンデパンダン展にぶつけた。そういう部分もあるんじゃないかな。それって、一流大学に受からないから、四流大学で我慢する。そんな匂いがする」

「違いますよ。アンデパンダン展は無審査。つまり、権威は一切ないことで、超越している。そもそも入学試験なんて存在しないんです」

「でも今、確実にオープンゲイトの市民インターネット新聞は四流ジャーナリズムとして捉えられているんじゃないかな。ひどい言い方になるけど、三流ジャーナリストにもなれなかった人達の受け皿として市民参加型ジャーナリズムがある。そういうのって違うと思う。職業記者と市民記者は違う。そのことに目覚めなければいけない」

プロとアマチュアという違いはあるが、そこに優劣はない。プロスポーツや将棋の世界では、プロとアマチュアの実力の差は歴然だが、それが一般的なことでもない。たとえば、音楽の演奏家などでは如実だ。プロの技量を超えるアマチュアの存在など枚挙に暇がない。もし、市民参加型ジャーナリズムが四流と捉えられたらどうということになるのだろう。四流ならば、三流、二流、一流と、トップを目指していくことになる。だが、そんな既存のジャーナリズムのお尻を追っかけることに何の意味もない。

藤堂は権力の検閲機関としてジャーナリズムは期待されているのに、既存のジャーナリズムのほとんどは墮落してしている。だから、その補完的なものをパブリックジャーナリズムで成し遂げるのだ。と繰り返し述べる。それは一流が墮落しているから、二番手の自分達はその座を掠め取ろうとの意志ともとれる。だが、私はその考えには否定的だ。戦後半世紀以上にわたって民主主義を経過してきた日本にとって、国民である限り国家権力に加担している部分は否定できぬ。そのような複雑な世の中になっているというのに、世の中を批判するだけでいいのか…。

「カウンターカルチャー(対抗文化)じゃしょうがないでしょってこと。あるべきはサブカルチャー(傍流的文化)。メインのカルチャーがないと、カウンターカルチャーは存在しない。ならば、そんなメディアが長く続くとは思えない」

断定的に言い切ったまま、私は口をつぐんだ。そして、元の歓談・談笑に入っていく。

サブカルチャーは、メインがどうなるうとも独立して存在する。だから、時代が変遷すれば、サブカルチャーが注目され、表舞台に登場することも無きにしもあらず。電車男でブレイクしたアキバ系文化などはそういうこと。一方のカウンターカルチャーはどうか。こちらは、メインがないと存在しない。できない。このたとえ話が妥当かどうかは疑わしいが次のようになる。

巨人ファンは野球ファンだが、アンチ巨人(ファン)は野球ファンではない。巨人ファンは東京ドームに足を運ぶが、アンチ巨人ファンはわざわざお金を払って東京ドームで野球を見るような人たちではない。だから、そのような人たちがいたとしても表層的な現象

に過ぎず、時代を生み出していく動力にはとうていなりえない。

私とナオミの議論は初対面の者同士が集まる会合では異様に映ただろう。私は高ぶった感情とやりきれなさを冷ましながら、一人缶ビールを口にしている。

すると、東京在住の市民記者・真由美が近づいてきた。

「お疲れさま」

「あなたは？」

「真由美です」

その名前で私はすぐに彼女を理解した。彼女もすでに市民記事をいくつか上げている。彼女が紹介するのは舞踏系のイベントである。彼女は、市民記者交流掲示板でも、たひたひ発言していた。だから、初対面といっても、顔を知らないだけで、旧知の間柄といえる。

「私もネットでバッシングされたことがあるわ」

出会う早々彼女は自分の辛い過去を白状した。そして、私の個人ブログの記事のほとんどを読んでくれてもいた。

「実名って、辛いわよね」

彼女は、缶ビールのプルトップをプシュッとひねると、それを私に手渡す。

「私がバッシングされたのは、高校時代から使っていたニックネームだった。誰も見てなんかいないと思ってブログに書き込んでいたら、同じプロジェクトチームの誰かがそれを見てたのよね。そして、忙しいスケジュールなのに、ブログなんて書いてるって、批判してきたの。私は忙しい作業の中でストレスを抱えていたから、気分転換のひとつだったけど、それが他人にとっては、閑だから書いてるっていうふうにとられちゃったの。クライアントから問題視されるし、スタッフのチームワークもめちゃくちゃ。その仕事は途中でやめるしかなくなったわ。でも、実名じゃないから、それを知ってるのは、ほんの少しの人。それがせめてものことね」

真由美の出版社はサブカルチャーやゲーム関係に詳しい。きっと彼女がからんでいたプロジェクトもネットに詳しいおたくたちが集っての共同作業だったのかもしれない。

「大変でしたね」

彼女が何を書き、どんな摩擦が起き、結果として仕事を失ったのかは分からない。だが、編集者として一線でやっている人間に何故そんな間違いが起こるのだろうか。彼女にとってのブログは、心情を吐露するためのまさに日記だったのだろう。女性にとってのブログとは、そんなものなのか。と、私は感慨に耽る。

では、私にとってのブログは何だったのか...

私と真由美が打ち解けて本題にはいるかなという気持ちになった頃、ナオミが割り込んできた。アンデパンダン展で私と対立した彼女は厳しい視線を私に投げかけると、真由美に向かった。

「はじめまして」

ナオミは真由美と名刺交換をはじめた。割り込まれてしまえば、私にはなすすべもない。

私と真由美との間が口説きモードに入っていたとしても、それはまだスタートラインにも立っていかないような状況。女同士の会話のモードチェンジは素早く、私は彼女たちのパワーに跳ね返された。

私に起きていることは、3人で語り合うには、あまりにデリケートな問題を含んでいる。新幹線の終電に乗り遅れるので、仕方なく会場を後にする人たちと一緒に、私も会場を後にした。

その日のことを、私は次のような記事にまとめている。

-----  
記事タイトル：

市民記者勉強会開かれる

記事：

13日晩、市民記者の勉強会がオープンゲイト本社で開かれた。この勉強会は外部の講師を予定していたが、キャンセルとなり、市民インターネット新聞の主宰である藤堂が1時間に渡り講義した。

講義の内容は日本におけるジャーナリスト教育の歴史や、結果として根付いていないジャーナリスト教育。また、諸外国のジャーナリスト教育についても触れられた。藤堂の論旨は、日本のジャーナリズムの根本的な構造をとりあげ、そこから生まれる諸問題について、市民ウェブ新聞の生み出すジャーナリズムが有効な解決策の一つとなりうるというものだったと思う。

藤堂は、今後、大学との協力関係を構築し、市民記者インターネット新聞を盛り上げていく方針とのこと。「ジャーナリズムは個人が連帯してつくるもの」。彼の言葉が市民記者である私の心に響いた。

さて、講義が終わると懇親会になった。記事をすでに書いている人、まだ記事を書いていない人、それぞれが缶ビールと簡単なおつまみで、交流の場になった。ふだんインターネットでしかつながっていない人たちとの交流は数年来の友達とあったように暖かいものだった。

始まって数ヶ月。パブリックジャーナリズムの抱える問題が見えてきた。しかし、実は、それらは新しいものではなくて、ひとりの個人が社会と対峙したときに必ず通らなければならない永遠の課題だと思われる。

藤堂は、最終的には記事を書く勇気の問題であると指摘して会合をしめくくった。

-----  
記事には、私があなざあチャンネルでバッシングされていることも、そして、藤堂が同じく経歴詐称問題などでバッシングされていることも、一切書かれていない。



翌日。私は学生街にある真由美のオフィスを訪れた。彼女は、芸術愛好家や、おたく向けの書籍や雑誌を手がける出版社の共同経営者でもあった。数人の編集者と非常勤の編集者。こぢんまりとしてはいるが、厳しい出版の世界で生き残ってきた歴戦を飾る書籍が事務所には山と積まれている。

私よりも少し年下ではあるが、高校時代から文章を発表し、彼女には編集者としても豊富な経験があった。そして、自分でプログラムも書ける彼女は、私よりインターネットに詳しい。

「スポンタさんは、自分の文章が藤堂さんに直されることが苦痛じゃありませんか？」

「え、どうして？」

「私は毎回とっても頭にくるの。だって、あの人、文章作成能力がないんですもの。彼が自分で書いた文章を読めば分かるでしょ。あの文語調をきどったもったいぶった言い回し。あんな文章を書く人に自分の書いた文章に手を入れているかと思うとぞっとするわ」

「そうかなあ、ボクはあんまり感じないけど」

私はシナリオライターとして原稿も書くし、ディレクターとして映像もつくる。それらの現場で培われた私の職業感覚と、明らかに彼女の違っている。私は倉本聰や橋田須賀子のようなビッグネームではない。だから、自分の原稿を一字一句変えてもらっちゃあ困ると言えるような権限はない。さらにいえば、シナリオは所詮机の上の論理であり、それが俳優という肉体を得て変容する。その変化がおもしろいのだし、原稿を書いた人間としては、それを楽しみたいと思っている。勿論、シナリオの不備で現場の人たちに迷惑をかけたくないという、無名の私にとっては仕事の受注継続にも関わる重要な問題も含んでいる。だから、どんなに編集部で原稿を直されても、文句をつけられようと平気の平でいられる。

「私は本名で編集者をやっているし、出版社の社長でもある。その私がおかしな文章を書いたことにされてしまえば営業妨害をされていることになるわ」

「ぼくは企画書や放送原稿やナレーション原稿を書いてきたけど、活字になるようなものは、あまり書いてこなかった。その辺が真由美さんと違うのかなあ。ま、いい加減なんだろうな」

ディレクターをやっているれば、役者から文句を言われることもあるし、プロデューサーから無茶な要求をされることもある。集団作業とはそんなもんだと思っている。だから、自分から出て行ってしまった言葉たちを直すのなら、自分のいないところで勝手にやって欲しいという気持ちがある。勿論、それを無責任と罵る人もいるかもしれないが、自分としては精一杯書いた物。それがズタズタにされるところに出来れば立ち会いたくはない。

「わたし、オープンゲイトの藤堂さんに何度も電話してるのよ。でも、なかなか要領を得ないの。市民インターネット新聞の記事は、編集者と市民記者がイーブンの関係で作らなきゃいけないと思うのにな。編集部が市民記者の上に立つのは仕方ないにしても、少なくとも共同で作った記事の削除権が市民記者の側にあると思うの」

彼女の専門分野は演劇や舞踏である。終わってしまった過去を自分勝手に表現する私の記事と違って、彼女の手がけるのは、未来のできごとだ。だから、記事の単純なミスでも観客に無駄足を食らわせたり主宰者に迷惑をかけることになる。

職業柄の責任感を持つ彼女は、最終的な校正を終えた原稿を見ることができないのでは関係者に対する責任がまっとうできないし、リンクが確実に機能しているかを市民記者が確認できないのでは困ると訴える。市民記事が集まるようになって二月も経っていない頃のことである。システムの不備があるのは当然のことかもしれない。

「たいしたシステム変更じゃないのに、何で変えられないのかしら」

真由美は何度も藤堂に交渉したという。彼女が要求するシステムは至極もったもなことであり、何の障害もないのなら、即刻システムが変更されていい類のものだった。だが、そもそもそのようなシステムについて、藤堂は関心がなかったようだ。聞いた話ではオープンゲイトのシステム開発部のエンジニアが藤堂に設計図を見せ、実施したのだという。そこに藤堂の意見はまったく反映されていない。否、意見を持つほどのネット知識を彼は持ち合わせていなかった。

そして藤堂は次のように切り返す。

「取材でオープンゲイト社の名前をつかっちゃだめですよ。あくまでも市民記者としての取材であって、それが結果としてオープンゲイトの市民インターネット新聞に採用されるんです。市民記者が記事に責任を持つというのはそういうこと。オープンゲイト社は市民記者に取材を依頼することはありえないんですから」

どこに記事が掲載されるか教えもせず取材が成立することなどあるのだろうか。まったくもって現実離れした規約である。当時、日本中の人々がオープンゲイトとキュウタロウの名前を知っていた時期だから、それも納得できるような気持ちにはなった。だが、八千円を払って市民記者になった自分達がオープンゲイトの外の人間だと捉えられていることが釈然としない。

今にして思えば、藤堂が目論んでいたのは、市民記者を率いることで自分の価値を高め、そして、社会に自分の意見を発信することだったのではないか。そして、オープンゲイトの名前をほしいままにするのは自分一人であると。

彼は独立したジャーナリズムには、いかなる経済活動とも無縁であることが条件だと固く信じていた。だが、本当にそうだろうか。NPO といえども、組織自体が利益を貪ることは許されないが、協力した人たちに人件費を支払うことは許される。原則論ばかり言っている、キュウタロウの抜群の知名度を使って市民参加型ジャーナリズムを一気に成立させてしまう千載一遇のチャンスを逃すことになるのではないか。

「藤堂さんの手間を少しでも減らすために、市民記者同士で勉強会をやりましょうか」

登録者が続々と増えているのに、記事の数は上がらない。それは、登録者が記事を書く能力を持っていないことを現れかもしれない。市民記者同士が協力して自分達の記事作成能力を上げる。それが悪いはずはない。

だが、藤堂は市民記者たちが自主的に集まる場合にもオープンゲイトの名前を使うなど言う。真由美はボランティアさえ拒絶する藤堂の行動を理解しかねている。それは彼女が扱っている出版分野とジャーナリズムの乖離を表現していたのかもしれない。

オープンゲイトの市民インターネット新聞では市民同士の交流が難しかったが、それぞれが個人ブログをやっていたから、実際に記事を上げている市民記者のグループができあがる。そして、同報メールをやりあうことになる。

同報メールのやりとりを通じて、私は市民記者の裕美と知り合う。彼女も記事管理システムを改革する提案を藤堂に行っていた。彼女は個人事業主として企業の経営コンサルタントをしており、真由美の提案よりもより具体的であり、彼女は藤堂のオフィスを訪れたという。

「市民記者だけが集まる掲示板にしても、もう少し上手なやり方があるわよね」

初対面で行った銀座の裏通りのラーメン屋で彼女は私にそう不満をぶつける。

「リソースがないんなら、自分がボランティアで作ってあげてもいいのに」

彼女の手にかかれば、丸二日で掲示板の構築ができてしまうという。

「そんなに簡単なの？」

IT関係で仕事をする彼女は、ネット上のさまざまなところで情報を得ている。彼女は試写会に足しげく通い、その映画紹介を市民記事としてアップしていた。この日も、招待券が一枚残っているということで、私はその誘いに乗った、その帰りにラーメンを二人で啜る。なんとも色気のない話だが、ここは評判の店である。

個人事業主として日常業務に追われる毎日の中で、週に2~3回試写会出向く彼女のバイタリティーは敬服に値する。

「ねえ、ねえ、私の映画の記事どう思う」

裕美は無邪気に私にたずねてくる。

「ん、んー」

「そっか、スポンタさんは映像の専門家だったわよね。じゃ、裕美の記事なんか、どっかでばかにしているんでしょ」

「いや、そんなこともないけど...」

「じゃ、どうなのよ。男だったら、はっきり言いなさいよ」

「...ん、いいのかな」

「怒らないから言ってよ」

「それじゃあえて言うけど、裕美さんの記事って、あれ、映画批評なのかな。それとも映画の宣伝文なのかな。ボクにはその辺がとっても中途半端で、居心地が悪いんだよね」

「居心地が悪いとききましたか・・・」

「あーあ。人が一生懸命に書いたものをそのように貶すか。ま、いいけどね。こっちは映画が一本只で見れた。それぐらいのギャラしかもらってないけど、やっぱり招待券をくれ

た会社に気を使いすぎになってるのかな」

「そんな気持ちはないのかもしれないけど、バツサリ斬るわけにもいかないでしょう」

「そうよね」

裕美は端の先につまんだ麺を空中に泳がしている。

「スポンタさんにも貶されて、ネットではバッシング。あーあ。市民記者なんてやめちゃおうかな」

裕美は絶品のスープを飲み込み一息つく。

「もう、失礼しちゃうわよね。確かに間違えたのは私よ。でも、それをすぐに直せないってのはどういうことなの。もう信じられない」

陽気に話す裕美だが、内心は穏やかではない。主演俳優の出演歴や監督の演出歴など、確認しても確認しきれぬ項目も多い。そして、たとえインターネットで確認したとしても、それが間違っている場合も皆無ではない。記事につけられた読者のトラックバックでの指摘に、彼女は誠実に対応する。まず、オープンゲイトの編集部にはメールを打つとともに、電話をかける。だが、彼女のように積極的に編集部に働きかけても、対応は鈍い。そんな彼女をあなざあチャンネルの書き込みは容赦なくバッシングする。

「もー、どうすればいいっていうのよ」

彼女は自分のブログに弱音を書く。すると、それをおもしろがってあなざあチャンネルが書く。そのどうどうめぐりが続いていた。

彼女も実名で映画評を書いていたし、個人事業主の営業拠点としてホームページと個人ブログを持っていたから、住所までネット上に上がっている。そこにあなざあチャンネルによる悪意の風評が広がっていくなら、ビジネスへの影響は必至だ。

「このままだったら、私、オープンゲイトなんかおさらばだわ」

このままでは、試写室に呼んでくれている配給会社の信用もなくす。本来のビジネスへの影響を考えた彼女は、その後、オープンゲイトの市民記者ではじめての登録辞退者となった。

私はそのことを8月19日の個人ブログに書いている。記事のタイトルは、「同僚市民記者撤退す」である。勿論、こんな話オープンゲイトの市民インターネット新聞に載せられるはずもない。

-----  
エントリータイトル：

同僚市民記者、撤退す。

エントリー本文：

さて、私の記事が掲載されないのは、私が投稿理由を明確にしなかったからだということはずでに明らかにしている。

先日、プライベートでも会っている同僚市民記者が市民記者登録の抹消申請をして、即刻受理されたという。わたしは、その方にその経緯を聞いた。驚いたことは、この方の場合には私のまったく反対だった。つまり、投稿後すぐに非掲載の処理がなされ、そのことの原因を問いただした市民記者に対して、「非掲載理由については明らかにしない方針」との説明がなされたとのことだという。問答無用ということか。彼女は、いままで現状をなんとかしようと提案などをつづけてきたから、相手側にとっては、クレーム的な存在になっていたのかもしれない。私を含めて同僚市民記者の何人かは彼女が書いた記事を読んだが、おおむね破綻のない記事だとの印象。誰ひとりとして、非掲載理由を想像できなかった。限られたリソースの中で、一般市民記者の文章をチェックするのは煩雑な作業である。ましてや、その作業の中核を担っている人たちがデスクのイスを暖めている時間がとても短いであろうことは、昨今の記事の数々を見れば明らかだ。理由を明らかにしている余裕はない。そういう事情であることはよくわかる。

とはいえ、市民記者との対話を否定してしまえば、市民記者メディアとして失格に違いない。キュウタロウが国政選挙に出ることで再びマスコミに注目されはじめている。トップが日本の民主主義のために一役買うのならば、その傘下で行われているこの非民主主義的行為は世の中から見逃されていていいのだろうか。プロ野球参入のときに、エロサイトへのリンクが問題になったが、今回はそれ以上に大問題だと思う。亀井さんや綿貫さんとお友達になりたいとは思わないが、市民インターネット新聞にとっても大きな転換点ともなりえるのではないか。発展的に考えるなら、国会議員でもあるトップが市民記者活動を支援するという構図は悪くない。国会議員がニュースメディアを持つことがタブーであると提唱する人もいるが、イタリアのベルルスコーニが持っているような巨大メディアではないのだから…。

私も含めて市民記者たちは一時的に、ネット上の有名人になったのかもしれない。だから、さまざまなバッシングを有名税だと指摘する人がいる。だが、妻は私に不平を言う。あなたが有名になったメリットが何かあるというの。メリットもないのに、デメリットしかない。そんなメディアで記事を書くことの意味がどこにあるの。

私は彼女に明確な反論ができなかった…。

-----

真由美と裕美。ふたりの女性市民記者の交渉にも関わらず、編集部がシステムを変更し、問題を解決することはない。そして、市民記者交流会で私と対立したナオミはいつのまにネット上から姿を消していた。

女性市民記者たちの交渉のさなかともいえる5月10日、情報の外部漏洩を理由に市民記者交流掲示板は閉鎖された。

どういう記事を書けばいいのか。どうしたらたくさんの市民記者が記事を書くようになるのか。それが交流掲示板のテーマだったと思う。だが、その議論は中途半端になったま

ま途切れてしまった。5月16日、掲示板は機能をアップして再開されたが、6月6日に再度閉鎖されることになる。

何故、掲示板が閉鎖されることになったのか、明らかにされていないが、藤堂が行なっている市民記者講習会の内容があなざあチャンネルに実況放送されたことと関係があるに違いない。あなざあチャンネルでは、藤堂の経歴詐称問題がヒートアップしていた。そのバッシングに少なからず、自分の同僚であるはずの市民記者が加担している。ならば、市民記者は自分にとって敵である。そういう気分で市民記者交流掲示板を眺めれば、その発言のひとつひとつが自分への批判に見えてくる。私は、批判の匂いがしないように掲示板のムードを盛り上げていたつもりだったが、徒労に終わった。結局のところ、藤堂は、市民インターネット新聞に君臨しながら、権力を監視し、市民を啓蒙したかったのだけである。では、そんな彼をささえていた思念が何かといえば、「社会の木鐸」「ウォッチドック」という仕えるべき主人が存在する概念。だが、その主人の姿が明確でない。仮に日本が民主主義だとするならば、市民こそ主人であり、市民記者こそその語り部。ならば、藤堂に市民たちを啓蒙する権限などない。そもそも「誰もが記事を書く時代」を追求する市民インターネット新聞において、藤堂が感じている疎外感こそが敵なのだ。

市民記者として名乗りを上げてから、3月と経っていないその頃、藤堂とのさまざまな交渉の果て、私の記事も多くがボツになっていた。

\*\*\*\*\*

市民インターネット新聞との決別。

\*\*\*\*\*

市民記者それぞれの改革の嵐を他所に、オープンゲイト市民インターネット新聞はそれなりの展開を見せていた。テレビ局が市民記者を紹介したり、有名月刊誌ではキュウタロウ現象に関連して、市民インターネット新聞に話が及んでいた。だが、それらの論調のほとんどが、市民が記者になり記事を書くことは褒め讃えているものの、その現状についても、その未来についても懐疑的だった。それを一言に言えば、素人にまともな記事が書けるはずもない。ということだ。

そんな6月24日、オープンゲイト市民インターネット新聞に次のような記事が掲載された。「韓国・ソウル市で市民記者世界大会が開かれる。当社市民記者も参加す」。

オープンゲイト社に、韓国のインターネット市民新聞であるネチズンタイムズ社から、参加要請・招待があり、一人の市民記者が参加したのだという。

ニュースセンターは招待の存在を市民記者に知らせることもなく、独断で市民記者を選び派遣した。同じく招待を受けたジャパン市民ウェブ新聞は、登録者に希望者を募り、その中から派遣者を選んでいった。

オープンゲイトとジャパンというふたつの市民記者を兼ねている人も少なからずいたから、てっきりオープンゲイト社には招待がこなかったものだと思っていた。韓国に出かけるような時間的な余裕はなかったが、この記事が引き金となって、私は反旗を翻すべく記事を書き、それをブログにアップし市民記者の記事にトラックバックした。

-----  
エントリータイトル：

市民記者が招待されて、M氏がソウルに飛んだ。

エントリー本文：

オープンゲイト市民インターネット新聞に、「市民記者が招待され、ソウルで世界市民記者フォーラム開かれる」という記事が載っている。本文を書いた市民記者は記事本文でそのことを語っていないから詳細は明らかではないが、市民記者活動で世界的に有名な韓国ネチズンタイムズ社が日本の市民インターネット新聞に注目し、市民記者の派遣を呼びかけたのだろう。

私は、市民記者として人並み以上の記事をあげてきた自負がある。そして今まで、さまざまな提案をしながら、市民ウェブ新聞を盛り上げようと、市民記者有志とコミュニケーションを図っていった。そして、彼らと練り上げたプランを編集部に提案していくことで、巨大掲示板などで指摘されている問題の多くを、運営者側のリソースの欠如といった要因に左右されることなく、市民記者側の知恵と努力によって改善できると信じてきた。

だが悲しいかな、市民記者同士が互いに情報交換する掲示板さえは閉鎖されている。これでは、市民記者同士が意見交換することもできない。紺屋の白袴ではないが、なんとも奇妙な状態だ。そして、疑問や相談などが生じたときには、市民記者は運営者にメールを打つなどして個別に問い合わせなければならぬ。そうした場合の編集部の対応は冷たく、「体制に文句があるのなら、記事を書かなくてかまいません」などと、暗に退会を促すような言動にぶち当たる。これでは市民インターネット新聞と銘打ってはいても、その実体は、藤堂ら編集部が市民記者たちの上に君臨し運営しているにすぎない。

もちろん、私がこのようなブログを書いているのは、これまでにたくさん記事をあげてきた人間として嫉妬もある。私よりも記事をあげていない人間が推薦を受け、ソウルに行った。そのことに私の感情が乱れていることは否定しない。

しかし、それよりも尚、私が危惧するのは、いま、編集部が行われていることが、あるべき日本の市民記者運動とは程遠い存在であるにもかかわらず、隣国から日本の市民記者運動であると誤解されていることである。

韓国のネチズンタイムズ社は大統領選にも影響を与えたといわれる市民記者新聞の成功例である。もし、彼らが提携先として、オープンゲイト社を選んだならば、日本の市民記者運動は致命的な打撃を受けかねない。所属している市民記者が語るのは悲しいことだが、今の編集活動は、透明性もなく、指針もなく、運営者個人の独裁体制によって行われている。

つまり、市民記者を集めてはいても、その実は絶対主義。それが、世界的市民記者の盛り上がりのおかげで日本の代表のように外国から捉えられてしまうと、まるで、金日成をオーソライズした北朝鮮のような形になってしまう。わたしの記事が掲載されないことはそれでかまわない。しかし、市民記者運動の渦中にある人間として、今起こっていることを知ってもらいたい。そのことが市民記者としてなすべきことだと信じている。いま、日本の市民記者運動に何が起きているのか。

わたしに取材を申し込んで頂ければ、わたしは誠意を持って回答します。みなさまからのご依頼を待っております。

-----

キュウタロウは与党から国政選挙に出てより一層盛り上がっている。だが、その裏で、私はオープンゲイト社と決別した。そのことは、少なからず注目を受けていたようで、通信社の編集委員である朝永のブログに私のことが掲載された。

-----

中村さんは、オープンゲイト市民インターネット新聞の中でも積極的に記事を書かれていた一人だ。これまでも主宰者の藤堂は外部との衝突が何度かあったようだが、ついに内部からも批判が出た。参加型ジャーナリズムは一般市民の多くの支持を得て、既存ジャーナリズムを超える存在になるのだと思う。ここまで多方面と衝突しながら目指す市民記者運動とはどういうものなのだろうか。

-----

ブログで反旗を翻した後、私の記事は内容に関わらず一切オープンゲイト市民インターネット新聞に掲載されなくなった。私が藤堂にその理由を尋ねると、「何故、あなたが批判する媒体にあなたは記事を送るのですか?」とのメールが返ってきた。

「私はあなたが何を言っても賛成しないが、私はあなたがそれを言う権利を死んでも守るだろう。私はフランスの思想家ヴォルテールのダンディズムを藤堂に期待していた。そういう部分にこそ、ジャーナリストとしてのプライドがあるのではないか。だが、その期待は無残にも裏切られた。

インターネットは誰でも書き込めるメディアだ。ならば、すでにフランス啓蒙主義者の



言葉も陳腐になっている。私はインターネットが生み出した新しい価値観を示唆するために執拗に記事を投稿したが、その意味さえ藤堂は理解しない。私は藤堂のインタビューが載っているサイトに次のようにコメントした。

-----  
Q: 市民記者運動に期待しますか? [YES]

コメント:

市民記者研修会に出席したときに、私はブログをリンクすればいいじゃないかと思っていた…。しかし、実際に市民記者活動をして気づいたことは、市民インターネット新聞とは、情報をオーソライズ(権威化)するためのシステムだということ。

オープンゲイト社の市民インターネット新聞の問題は、オーソライズする基準に透明性がないこと。これでは、市民を名乗る資格はない。自然増殖が可能なインターネットで、オーソライズというコンセプトを実行した藤堂氏には、先見性があり、この暴挙から新しい何かが生まれる可能性もなくはない。

-----  
ジャーナリズムにおけるアンデパンダン。市民記者の表現の自由の理想は、オープンゲイトスタート後わずか半年でもろくも崩れ去った。

\*\*\*\*\*  
インターネットからリアルへ。  
\*\*\*\*\*

ブログを書き始めて1年が過ぎた。市民記者になって半年が過ぎようとしている。それによって何かが変わったのかといえば、何も変わっていない。そして、市民記者活動との関係を断ってみると、バッシングされたことがまるでいままでのことがなかったように思えてくる。

あなざあチャンネルのあるカテゴリーで、アキバ系の男女の純愛を描いた書き込みが始まったのが、2004年3月14日。その内容があなざあチャンネルの枠を飛び出してインターネット上で話題になりはじめたのはゴールデンウィーク明け頃。

それが大手出版社から本になったのが、同じ年の秋。ついで、映画化され封切られたのが、翌年の6月。それがドラマシリーズ化されたのが7月。私がバッシングを受けた当時は、本が出版されただけの時期で、あなざあチャンネルはまだアンダーグラウンドのメデ

ィアとして存在していた時期ではなかったか。

それが、ひとつの小説の登場で一変する。それまで裏文化として、社会からある種のバイアスを持って眺められていたものに、スポットライトが当たるとともに、既存メディアの住人たちも、それをオフビジネスで眺めて、ひそひそ噂話をしているだけでなく、オンビジネスの場でも、堂々と話題にする習慣になってきた。以降、ギョーカイ人たちの行動は、若い人たちを原動力にまたたくまに社会に浸透していく。すでに、人に隠れてあなざあチャンネルを見たり、その話題をすることがある種のタブーになっていた時代は終わっているのかもしれない。

数年前にさかのぼるが、私はある団体の広報宣伝戦略に関わっていた。そのときあなざあチャンネルの書き込みを、ターゲットの考えを知るためのリファレンスのひとつとした。無論、鵜呑みにはしないが、考えるヒントにはできる。もっとも、これは私に限ったことではない。一流企業があなざあチャンネルの運営者に抗議したり、訴訟を起こすのは、企業がその存在とその社会性を認めていることの証しとも考えることができるからだ。

とはいえ、あなざあチャンネルの管理人は、インターネット上のコミュニケーションで世の中を盛り上げて、社会を活性化するためにこのメディアを創設したのであって、アンダーグラウンドな言説の巣窟にするつもりはまったくなかった。

私がバッシングの標的になったのは、実はあなざあチャンネルだけではない。それが、Wiki である。

インターネット上のまとめサイト。Wikipedia がそのひとつとして有名だが、ネット上の IT 用語辞典によれば、wiki は次のように定義される。

Wiki：電子掲示板(BBS)に近いシステムだが、BBS が時系列に「発言」を積み重ねるコミュニケーションツールであるのに対し、Wiki は、内容の編集・削除が自由なこと、基本的に時系列の整理を行わないことから、誰もが自由に「記事」を書き加えていくコラボレーションツール、もしくはグループウェアと言える。

そして、広く普及したのが Wikipedia。

これは、無名の市民たちが、それぞれの知を結集することで、百科事典をつくらうとするもの。このムーブメントの思想は、リナックスを生み出したものと同じ。リーナス・トーバルスはオープンソースの考え方を提唱し、その考え方に共感した世界中の技術者たちが協力して、新しい OS を作り出した。パソコンやインターネットに関心の低い人たちには知名度は低いようだが、もともとアメリカに対する対抗心や、マイクロソフトに対する不信感の強いヨーロッパでは、すでにリナックスは無視できない勢力になっている。最近では、OS の更新費用に悩んだ地方自治体がリナックスを導入しているとも聞く。

無名の人たちが報酬も省みずに、力をあわせてひとつのものを作る。そんな素晴らしいことはない。勿論、試行錯誤の状態がネット上にあるわけだし、完成された辞典ではない。ましてや、その内容に誰かが責任をとるわけではない。だから、信頼性の低い無責任のメ

ディアだと批判することもできる。だが、企業がつくる OS でもバグが存在するし、バージョンアップで品質を日々向上させていくのだから大差はない。否、その編集に関わるヒューマンリソースの数を比べれば、マイクロソフトなど足元にも及ばぬ。私自身、ウィキペディアで検索をして、その内容の充実さにほれほれとすることもある。そのように親しんできたウィキペディアと、自分が槍玉に挙げられているステージの@Wiki は同じ思想のもとにつくられている。

自分に悪態をつく Wiki を眺めていると、私の心の片隅に、よくぞここまで調べてくれたとの思いがあることを否定しない。だが、その行動の背後にあるものは何だろうか。と、考える。そして、私に対する怒りの直情を見し暗澹たく思いになる。

あなざあチャンネルと違って、Wiki 系のサイトやリモートタグのサイトは、アンダーグラウンドなメディアだと感じる人は少ないだろう。青少年へのフィルタリングのリストに入っているかどうか確認していないが、まずは入っていないだろう。とすれば、そういう表文化なところで糾弾されている私は、悪の権化であり、社会的に抹殺されなければならない。いまも「スポンタ」で検索を駆けるとヒット数は 2 万件を越える。それが何を意味しているのか。なんとも覚束ない。私が市民記者活動をやめようがやめまいが、私のまとめサイトはいままでどおり存在し、私をバッシングしつづけている。あなざあチャンネルも細々とだが、いまだに私のウォッチを続けている。

さて、オープンゲイト市民インターネット新聞に私が反旗を翻すきっかけになったのは、韓国のネチズンタイムズ市民インターネット新聞の主筆ユンの存在である。私は、新聞系インターネットメディアの 1 周年を記念した、国際シンポジウム「ネット・ジャーナリズムの可能性」(6 月 7 日・東京・御茶ノ水)に行った。

シンポジウムの基調講演は、アメリカのシンクタンクの重鎮だという。彼の演題は、「メディア経営におけるインターネット・ジャーナリズム」。曰く、ネットによって新聞の領域が侵されているのではない。そもそも、若い世代がニュースを読まなくなったのであって、紙媒体からデジタルヘユーザーが流れているとの分析は間違っている。と。

そもそも、既存の情報関連産業が破綻の兆しを示しているのは、新聞だけではない。音楽やテレビ、ラジオも例外ではない。そういう業界はそもそも固定費が高く、利益率が低いものだったが、それを大量生産・大量消費することでビジネスとして成立させてきた。だが、世の中の情報のコモディティ(日用品)化の流れの中で、特権的立場が失われ、デフレ現象を起こしている。さらに、マードック氏がやろうとしたような垂直統合的なメディアのアライアンスは古いとし、これからはジャーナリストもネットワークにもっと参加しなければならないし、そういうインテグレートしたジャーナリズムのモデルが重要だと結論づけた。米国人講師は図らずも、「垂直統合の利点は過大評価されやすいこと」と指摘していたが、キュウタロウが逮捕されすべてを失いつつある今、この指摘を振り返ると、まさにそのとおりだ。

企業買収の話題はマスコミを席卷し、キュウタロウは時代の寵児としてもてはやされた。だが、それが過大評価であり、ネットワークをインテグレートしていく地道な作業とは別なもの。株式の専門家は、オープンゲイト社株の暴落は株価全体の凋落につながらないとの意見を述べているが、この講師の意見はそれを裏付けるものでもあった。

つづいて、ネチズンタイムズ市民インターネット新聞の主宰ユン氏が「市民記者とネットジャーナリズム」という演題で語り始める。「すべての市民は記者である」。それが市民記者運動で一番重要なコンセプトだった。

「新聞が登場する前の地域のコミュニケーションは、情報の送り手と受け手はそれぞれを兼ねていました。でも、地域のコミュニティーに新聞記者が登場すると、情報の送り手と受け手は隔てられることになる。人々は知り合いの言葉よりも新聞の記事を信用するようになった。だが、どうだろう。本当に新聞の活字が信じるに足る情報を載せているのか。韓国では与党系の新聞ばかりで、政府や財閥に都合の悪い記事は一切載らなくなった。それが韓国の大不況を起こした原因でもある。中身のない情報に踊らされた結果、ある日バブルが崩壊した。でも、インターネットの登場によって、情報の送り手と受け手を隔てるものはなくなった。さらに、新聞後も存在した時間も空間といった隔たりもなくなっている。さらに、受け手の中の乖離もなくなっている。つまり、こども、学生、公務員、教授など、どんな立場の情報の送り手であっても、平等に情報の送り手になりうるんです」

ユンが主催するネチズンタイムズでは、航空事故に関して元パイロットが記事を書き評価された。日本同様、それまでの韓国でも航空事故に関する記事は、航空評論家が書いていたのだろう。何故なら、航空業界の人間は利害が絡むからマスコミで発言などしようものなら大問題になるからだ。だが、航空評論家とはものを書く人であっても、飛行機を飛ばす人ではない。この場合は、元パイロットが言い、それを聞いて専門記者が書いたという。

それでもいい。オープンゲイトのように、署名とか、個人記事とか、その責任は個人に帰るとか、そんなことを気にする必要はない。客席の片隅で私はユン氏の言葉に深く頷いていた。

「市民がそれぞれの専門分野の記事にする。オピニオンを述べることで、既存メディアにはできない市民記者媒体としての価値が生まれるんです」

ユンは、韓国での自らの成功の理由を次のように分析する。韓国は未曾有の経済危機に際して、インターネットインフラを整えることを起爆剤にすることにより、復活をめざした。ADSL ではあったが、社会への普及度は高く、小さな国土という個別の事情もあって、インターネットが国民の生活に深く浸透した。彼は言う、テクノロジーは社会を変えられない。だが、彼にとって重要だったことは、テクノロジーを仕える人たちが韓国社会にたくさんいたこと。だから、韓国での市民インターネット新聞の成功は、民主化のムーブメントとテクノロジーが結婚して生まれた子供であると。そのコアな部分は386世代が担った。386世代とは、30代であり、80年代に大学生活を過ごし、60年代に生まれた

人たちを指す。彼らは、1980年に光州事件が起こり、その後、沈黙か死かを迫られ、辛い沈黙を強いられてきた。そうした若き日に民主化運動に身を投じたひとたちが、いままた、ネット上で民主化運動を再燃させている。

確かに日本の紙媒体の新聞は、時間や空間の限界を持つ特性に縛られて苦悶している。ジャーナリズムが時間や空間に縛られなくなったインターネットのジャーナリズムにおいて、価値ある記事とはいかなるものなのだろうか。

だが、ユンは、そんなことをまったく気にしていない。彼が気にしているのは、民主化の流れ。韓国の民主主義の質を高めるためには、市民が積極的に参加すること。そのためには、市民参加型民主主義をネット上の中ですすめていくし、そのムーブメントを世界に広げていくと誇らしげに宣言した。

つづく、アメリカの巨大IT企業のネット部門の日本法人の事業部長は、ユンの講演に触れ、日本には韓国のようなアグレッシブなニュースサイトが登場するにはまだ時間がかかると感想を述べた。私はその理由は図りかねるが、アグレッシブ(攻撃的)という語を使ったことで意図が推し量ることができた。ユンは民主化のツールとして市民参加型のニュースサイトを構築していったのであって、既存の社会を攻撃するためのものではない。

エスタブリッシュに特有な、急激な変化が自分の領域を侵すことに対する漠然とした不安。見知らぬものたちが意見を発することに対する危惧。そういう漠然とした不安が彼の言葉から感じることができる。つづく、パネルディスカッションでも、日本人は和を持って尊となしという民族性を持つから、ネット上で有効な議論が交わされることは将来にわたってないと指摘する講師もいた。シンポジウムで、オープンゲイト者の市民インターネット新聞の名前が照ることは指摘されることはなかったが、彼らは、日本には市民参加型ジャーナリズムは定着しないという意見で一致していた。だが、どうだろう。ほんとうに日本人は、自分の個性を発揮することよりも集団の和を重んじ、集団の中に個を埋没させることに満足する民族性を持っているのだろうか。

パネルディスカッションの最後の質問コーナーで、私は客席から質問をユンにぶつけた。「私は、市民記者をやっているが、日本では、個が集団の中に埋没するのが好む傾向にあるのでなかなか難しい、韓国での市民参加型ジャーナリズムの成功の要因は何なんだろうか...」

私が確認したかったのは、韓国の葬式の泣き屋・泣き女などにみられるように、自分の感情を周囲にみせることを憚らない民族性が市民参加型ジャーナリズムの成功要因のひとつとしてあげられないだろうか。ということである。だが、ユンは、韓国での市民インターネット新聞の原因を、「インターネットの普及」「言論弾圧などによる市民意識の高さ」「国土が狭い」と答えるにとどまった。

たしかに集団の中に個を埋没させることが、日本人のコミュニティーでうまくやりすぎひとつの方法だった。しかし、最近では若者たちの間に、キャラクターがダブルことを嫌う風潮がある。芸能界の力学をこどもや学生たちが自分たちに適応したのがキッカケだ

と思う。簡単にいえば、ドリフターズには、デブキャラは高木ブー人でもいいということ。同じグループの中に、自分とキャラクターが同じものがあることを嫌うのだ。キャラクターがかぶると、いじめの対象になりかねない。そうした若者たちの傾向の深層心理には、他人とは違う自分を表現したいという気持ちがあるはずだ。そういう思いをすくいとってあげること。それがインターネットならできるはずだ。何も市民参加型ジャーナリズムの将来も悲観的に考える必要はない。いまはただ、市民参加型ジャーナリズムの仕組みに不備があるだけで、日本人がより多くの人に自分の意見を伝えたいと思っていない訳ではないのだ。

考えうる一番の問題は、情報を発信する個の責任の問題。韓国では北朝鮮のスパイ事件をきっかけに、国民番号制度が実施されている。国民番号を記入することによって、市民記者は自説に責任を持って発言することを強られるし、それはコメントする側、トラックバックする側についても同様と思われる。国民番号制度は、韓国のインターネットにおけるコミュニケーションの阻害因子の排除に一役も二役もかっているに違いない。

日本の政府系シンクタンクの教授は、「デジタルコマースの展開」という講義の中で、eコマースを考えるときの重要な視点として、利用の競合性と所有の排他性を指摘した。簡単に言えば、インターネットでは無料が当たり前であり、無料でなくても顧客を得ることができるのは、利用の競合性も所有の排他性がある場合に限られる。

だから、有料サイトをつくっても、利用の競合性をユーザーが感じられなければ、対価を支払う気にはならない。ネットジャーナリズムはその理論を越えられないから、なかなかビジネスとしては成立しにくい。事実、民主化のツールとしては大きな役割を果たしたネチズンタイムズ社の市民インターネット新聞だが、それがビジネスプランとして有効かどうかは、疑わしい。と結論づけた。

このシンポジウムに限らず、日本に市民参加型ジャーナリズムは根付かないとの意見はメディアに溢れていた。

- 
- ・日本人は、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」精神が人々の心に根付いており、議論そのものを嫌う傾向がある。
  - ・日本のジャーナリズムがさまざまな問題点を抱えているといっても、市民参加型ジャーナリズムがないとその問題を解消できないという程に危機的状況ではない。
  - ・日本には巨大掲示板やタウンミーティングなど、市民の不満のガス抜き装置がたくさんあるので、市民参加型ジャーナリズムに書き込む人は少ない。
  - ・日本の市民記者は暇な時間をつかって記事を書くのだから、既存のジャーナリズムとの質の差は歴然であり、そのようなものを社会は評価しないのは当然である。
  - ・日本の市民記者は自らの楽しみと自己実現のために記事を書くのだから、独りよがりの

ものが多く、読者の支持を得にくい。

-----

一方、私が市民記者をして感じた市民参加型ジャーナリズムの問題点は、以下になる。

-----

- ・日本は同一性の高い社会なので、発言することで自分の存在をしめさなくても、社会の構成員として認められる。逆に、自らを主張すると、異分子として自分の属する集団から弾き出される可能性がある。
  - ・公平中立であるべきというジャーナリズムの概念が、他者の悲しみも自分の悲しみとする善良なる市民感情と乖離している。
  - ・誹謗中傷であるかどうかは、司法機関によって事実性・真実性が争われることによって決定する。一般市民には、裁判に関わる費用(経費・時間)を支払う余裕はないから、市民記者が世の中の物事を批判するためにはかなりの覚悟が強いられる。
  - ・実名で記事を書くと、掲示板やコメント欄にさまざまな反響がある。なかには市民記者を喜ばせるものもあるが、市民記者を怒らせるばかりでなく、市民記者本人や家族の生活を脅かす場合もないとはいえない。ネット上のできごととはわりきれないような危機的事態もある。そういうものにひるんでしまって、市民が記者を書きにくい。
  - ・実名・匿名など署名に関わる混乱。トレーサビリティの確保および、複数人へのなりすましなどへの対策の不備。
  - ・運営に関する透明性の確保がなされていないので、市民記者が媒体にたいして疑心暗鬼になっている。
  - ・編集権が権力として機能し、市民記者が運営システムなどに意見をいづらい。
  - ・市民記者同士の横のつながりができにくい。(多様な意見の並立が難しい。日本人は無意識のうちに、合議や合意を求めてしまう。)
  - ・市民記者が参加型ジャーナリズムに加わって記事を書いても、受け手の側は旧来の読者のままである。つまり、読者のほとんどは記事に対して賛成も反対もしめさない。TB やコメントをつける機能はあるが、反応する人のほとんどは、記事に意義を唱える人だ。
- 

シンポジウムの意見を書き留めたものも、私が論考を書きなぐったものも、否定的な分析の進行。だが、その一方で、私を含めて、市民参加型ジャーナリズムが日本に必要でないと断言する人は一人としていない。

ならば、問題点を解決し、市民参加型ジャーナリズムが日本社会の有効なツールとして機能するようなシステムを作り出せばいい。大宅壮一は、テレビが世の中に登場したとき、「一億総白痴化」と切り捨てた。だが、私は、「インターネットは、無責任な日本人を続出

させる」などと、大家を真似ることを好まない。

アメリカの社会運動家で知られるラルフ・ネーダーは「情報は民主主義の通貨である」と語ったという。法律家からスタートし、消費者運動、市民運動、はては大統領選出馬まで、彼の活動の幅は広い。彼の言葉を私流に解釈するならば、「民主主義のすべての構成員が情報を発信することによってのみ、健全な民主主義が運営される」。現実には、物を言いたくない人もいるだろうし、ITリテラシーはおろか、国語力さえもたない人もいる。破綻のないメディアの文章になれた人には素人以前の文章と感じられたり、テーマや切り口についても、意味のない、つまらぬことしか思えるものも多いかもしれない。しかし、そんなものであろうと、情報は情報、通貨は通貨なのである。もし、苦々しい手触りに囚われて、それらを参加型ジャーナリズムから放逐するなら、メディアそのものが崩壊していくだろう。

現状は悪貨が良貨を駆逐する状態であっても、悪貨がひとりの個性から発せられた一枚のコインであれば、それを認めねばならぬ。それが民主主義だ。一元を笑うものは一元に泣く。そのことわざが21世紀の民主主義にもいえるのではないか。コミュニケーションツールとして無限の可能性を秘めているインターネットといえども、ユーザーは限定された与えられたメニューの中から、自分の好みにあったものを利用しているに過ぎない。

インターネットユーザーは、既存のコミュニケーションの枠を越えて自由にふるまっている錯覚に陥るが、極めて限定的な自由度しかもっていない。いまの市民参加型ジャーナリズムの状況も同様で、せいぜい従業員食堂でA定食かB定食かの選択がある程度に過ぎない。だから、みんな従業員食堂で食べないで、会社外の店で食べたり、御弁当を持ってきたりする…。個人ブログや各種電子掲示板で自分の意見を主張しているのはそういうこと。

そう考えてみれば、市民参加型ジャーナリズムの範疇を広げてみることも可能。そして、すでに成功している市民参加型ジャーナリズムは少なからず存在する。わたしが注目する、無名市民の書き込みが隆盛なサイトの代表的なものは、以下である。

-----

- ・カカクコム
- ・あなざあチャンネル
- ・みんなの就職活動日記

-----

それぞれのサイトが、書く人間の心をとらえて書き込みが盛ん。書き込む人の数十倍、数百倍も読むだけの人がいることを考えると、すでに大きなパワーを獲得している。

電気製品などはカカクコムで価格や評判を確認してから購入する習慣が一般的になっている。そのムーブメントを企業の側も無視することができない。一時期は自社へのバッシングを恐れてホームページの掲示板を閉鎖していた企業が、今度は、自社製品のブログで



コミュニティを形成して、ユーザー拡大をめざしている。だが、そういう御手盛り企業ブログは、始まる前から終わっていると、私には感じられる。勿論、解決策はあるのだが、それは、広報のレベルを越えて、会社の経営スタイルまで変革させることを前提とするから、なかなか難しいことだろう。

あなざあチャンネルも賛否両論の掲示板ではあるが、そこに集まった人たちのスケールをもはや社会は否定できない。電車男など、もう一時のブームという範疇を超えている。「みんなの就職活動日記」は、就職面接という密室のできごとをオープンにするという画期的な出来事である。もちろん、内定を諦めた人たちが書き込むのだろうが、彼らの指摘によって、その会社の評価や評判が落ち、内定辞退者が続出するのでは、企業としても見逃すことはできない。

これらに私が注目する点は、そういうサイトに書き込む動機が、あくまでも私情だということだ。組織やビジネスを離れて、自らの価値観と判断力で書き込みをする。そこに確固たる個を感じて誇らしい。逆に、そういうサイトにやらせや関係者がお世辞めいたコメントが書き込まれると、その匂いをかぎ付けた人たちがいっせいに非難する。きっと、消費動機・消費行動・就職活動を伴っていない人間の無責任な発言に嫌悪しての行為だ。

私は、書き込む人たちの、何物にもとらわれずにいたいという気持ちに、すがすがしささえ感じている。確かな個が日本には存在する。カカクコム、あなざあチャンネルなどの隆盛をみると、その数はけっしてマイナーな数字ではない。ならば、そういう確固たる個たちが、参加型ジャーナリズムに加われないのは、参加型ジャーナリズムが、彼らにふさわしいメディアの形を提供できていない。それしか考えられない。

日本ならではの確固たる個たちのダンディズムに、「名乗ることを潔しとしない」ことがある。対価を求めずに、社会を正道に導くことを促す。そういうダンディズムに異論のない人は多いだろう。慈善活動であっても、売名行為と非難される日本の精神的風土の裏側は、そういうこと。だから、匿名、すなわち無責任と蔑むのも早計だろう。

日本人の国民性を、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」の十七条の憲法に求め、日本人が議論そのものを嫌う傾向があり、市民参加型ジャーナリズムは成立しないという考えがある。最近の歴史研究では、厩戸の皇子は存在したが、聖徳太子はいなかったという説が有力だという。それはともかく、何故聖徳太子は、「和をもって尊となし」という言葉を残したのだろうか。答えは明白である。当時の社会にいさかみや戦争が続発していたからである。社会に和があふれていたなら、聖徳太子は和のことなど話題にするはずがない。時代は下り、板垣退助が「板垣死すとも、自由は死せず」と言った。もっとも、これも周りの人のつくり話という説が有力…。ま、真実として解釈するなら、板垣退助が死んだら、自由民権運動も終わってしまうと思ったから、そういう言葉を残したのだろう。5.15事件の犬飼首相は、「話せば分かる」と言って銃弾に倒れた。死者に鞭を打つようだが、話しても分からないから殺されたのだ。

つまり、言葉とは本来、現実を追うものではなく、現実に向かうものなのだ。ペンは剣よりも強しと言って見たところで、ペンを持って決闘に挑んだ人を見たことはない。「和をもって尊となし」の精神が宿った日本で、戦乱はなかったのか。集団の中で内乱はなかったと考えれば、論理のほころびが見えてくる。

アメリカなど他民族国家で文化的に同質性の低い社会では、お互いの異質性は当然のことなのであまり気にならない。構成員たちは、お互いの異質性には目をつぶり、お互いの限られた同質性を見つけ出し、共有することによって融和し・親睦を深める。

一方、日本は単一民族国家であり、文化的に同質性の高い社会である。そこではお互いが同じであることは当然のことだから、御互いの些細な違いが気になり、それが構成員同士のわだかまりにつながる。

そういう経験の蓄積から、同質性の高いコミュニティーにおいて、その構成員たちは自らの他者との差異を隠そうとするようになる。かたやアメリカのような異質性の高い地域では、個が自分の立場を確保しようとするとき、自分の異質性を主張することが必要となる。異質性の高い社会では主張することによってのみ、自己の存在が明らかになるからだ。主張しない個は無視され、あたかも存在しないかのように扱われてしまう。

日本では、個が自分の立場を確保するために、自分の特異性を主張すると、その異質性によって集団から弾き出されてしまう。いわゆる、出る杭は打たれるという奴である。とはいえ、日本においても個の充実がないわけではないし、特異的な個を社会に反映させたいという無意識も存在するから、「相手の気持ちを察する」とか「あうんの呼吸」などというもので、人事や社会の方向が決められていくのだと思う。

アメリカを国際社会といいかえてもいいが、集団の異質性・同質性は、個のアイデンティティーの確保に関わる大きな問題だ。そして、それは異質性・同質性のそれぞれについてどのように基準を置くかで、まったく変わってしまう。また、現代において、社会はさまざまなカテゴリーや規模のものが重なり合いながら営まれているから、ことは単純ではない。

たとえば、私の属する社会・集団のことを考えても、日本という社会、地域社会、娘の保護者の社会、ビジネスマンとしての社会、性別、年代などさまざまな社会・集団に含まれていると思う。そして、それぞれの中で、集団の異質性と同質性は異なり、個の存在もマジョリティーの側にいたりマイナーな存在だったりする。つまりは、日本を同質性の高い国家であると決め付けてしまうところに、論の乱暴さがあり、それがひいては「和をもって尊なし」という思い込みにつながっていく。

平均な人間などどこにもいないし、平凡な人間などどこにもいない。そのことをすべての日本人が体験しているはずなのに、教育関係者をはじめとして、十ぱ一からげにして扱っている。犯罪をおかした卒業生を平凡な生徒と言うのならまだしも、目の前のこどもたちを平凡な子などと形容する校長がいたなら、その人は盲目であるばかりでなく、冷血漢

でもある。とても荒っぽい思考が、日本人は同質性の高い社会だという社会通念を高めている。日本の社会が同質性の高い社会だとしても、それは国際社会や多民族国家に比べての話であって、日本の社会を単独で見れば、貧富の差、地域の差、個性の差、性別の差、宗教の差などがあり、けっして同質性が高いとは言い切れない。

インターネットにおける市民参加型メディアが、多様な異質性を認める方向で運営されるならば、市民参加型ジャーナリズムは成立するのではないか。その場合の障壁の一つは、日本人の行動パターンのひとつとして、安易にまとめや合議・合意を求める性癖だ。

たとえば、ブログにおいて、意見が並立することを念頭に開発されたトラックバックにしても、いつしか当事者同士で論争がはじまってしまふ。本来は、それぞれのブログの読み手たちが妥当性を判断すべきなのに、いつしかブログの書き手同士が戦いをはじめてしまふ。そして、始まった戦いは勝負がつくまで繰り広げられる。これなどは同質性幻想から日本人が逃れ切れていないことの現われだろう。

煎じ詰めれば、人と人は分かり合えない・・・。そういう諦念のうえにしか、新しい市民参加型ジャーナリズムが成立しないのではないか。

私が考える市民参加型ジャーナリズムの定義は、「メディアや組織の特権的な地位を背景に個が発信することに、背を向けた行為」である。

たとえば在任時代、小泉首相には総理大臣の立場での発言と私人としての発言があった。彼が、息子の俳優が出演した番組の感想を述べるのは、私人としての発言であって総理大臣としての発言ではない。発想を転換すれば、いままで無名の市民が発言することが市民参加型ジャーナリズムであるとばかり考えてきたが、すでにメディア発信力を持っている有名人であっても、そのパワーの源泉であるメディアや組織からの決別を表明することで独立した市民に戻り市民参加型ジャーナリズムに加わることも可能。それこそ市民参加型ジャーナリズムのひとつの形ではないか。そして、それこそが市民参加型ジャーナリズムを早期に実現するための近道でもある。

ところが、日本の民主主義をあるべき姿に導くべきはずの既存のジャーナリストたちは、いまどうしているというのか…。彼らのうちのほとんどは無視を決め込んでいたが、その一部は、市民参加型ジャーナリズムにケチをつける。素人の書いた文章にケチをつけることに何の意味があるのか…。見方を変えれば、市民記者たちは既存のジャーナリズムの受け手・お客さんでもある。自らの顧客に敵対表明をするなら、長期的にみて、既存のジャーナリズムの利益を削いでいくことは明確なのだろうが。

ほんとうに市民記者は信じる価値もない存在なのだろうか。天気予報の民間企業・ウェザー社は、登録会員1万名に観測用ピーカを配布して、3ヶ月に渡って降雨量を測定したことがある。気象庁の測定施設は全国に1300箇所だが、インターネットがあれば、僅かな費用でケタ違いのデータが市民から集めることができる。積雪に関して、愛知県では気象庁の観測は名古屋市の一点だが、ある雪の日、ウェザー社には80通のデータが寄せられた。

市民の情報は信頼性できないとの意見もある。だが、どんなデータにも誤差はつきもので、それは、気象庁のプロフェッショナルが行ったとしても、誤差はゼロにならない。天気予報に起きたことが、一般のジャーナリズムに広がっていかないわけではない。

通信社編集員の朝永氏は、「市民参加型ジャーナリズムに注目したのは、自分の職業が将来もあるのかどうか、そのことを突き詰めたい不安感だ」と、告白する。ならばやるべきことはもっとあるはずだろう。彼らが、自らの特権的に得た能力で、市民記者の援護をすれば、ニュース全体に関する一般の興味も盛りあがるに違いないし、それはけっして悪いことじゃない。既存のメディア人たちが、みずからの特権に気づき、その特権にあぐらを書いている自分を反省する。そういう既存のメディア側の行動が、今後の市民参加型ジャーナリズムを成立させるための大きな要因になる。だが、そのようなムーブメントは皆無だった。

\*\*\*\*\*

#### 既存メディアのジャーナリスト

\*\*\*\*\*

2005 年のはじめ。

東京の老舗ラジオ局の株式大量取得をきっかけに、キュウタロウとオープンゲイト社が注目を集めていた。ほとんど同じタイミングで、オープンゲイト社はインターネット上のニュースサイトに市民参加型ジャーナリズム・市民インターネット新聞を始めた。

3月上旬、私はその組織に登録、市民記者をはじめめる。市民参加型ジャーナリズムはあるが、1日2万アクセスを集めるのはこしかない。開始当初は記事が少ないこともあり、最多記事掲載数を記録。さまざまな問題にわが身を持って経験することになった。

まず最初に起こった現象は、トラックバックおよびトラックバック先のブログのコメント欄で展開する国語力に対するバッシング。

次に現れたのは、裏サイトを中心にはじまる市民記者個人に対するバッシング。個人ブロガーでもある私や市民インターネット新聞の提唱者・藤堂がまさきに標的にされた。ゴシップ、批判、中傷、そして、私に対しては襲撃声明もあった…。

そして、裏サイトの影響かは分からないが、既存のジャーナリストからの蔑視も…。

そして、オープンゲイト社の市民インターネット新聞は批判すべきレベルにも達していないというという評価。それは、キュウタロウへの社会的注目度があつたからの出来事で、本来ならば無視されておしまいだったろう。

プロフェッショナルであるべき運営側の編集能力に問題があるのはこちらにおいていくとしても、一般の市民は本格的なジャーナリスト教育を受けているはずはないし、文章作成能力も素人であることは自明。それでも、トラックバックされたブログや掲示板などのコメントのバッシングは容赦がない。市民インターネット新聞は、記者が実名で投稿することを基本としているので、記者活動が市民生活に影響を及ぼしかねない。だが、市民記者活動がただただ批判にさらされるだけで、記事を書くことが批判の対象にしかならず、尊敬を集められないならば、市民記者は百害あって一利なしだ。これでは、開始早々市民記者であることをあきらめ、個人ブロガーに戻っていく人も現れるのも当然だ。

世の中には多様な意見が存在してあたりまえ。だから、いかに正当な理論を記述しても、必ず反論は出るもの。また、文章術に関しても、文章のスタイルというのは人それぞれだから、批判の対象からは逃れられない。一方、クレームする方はたとえその数は少なくても、何度もトラックバックしてコメントをすることができる。そして、市民記者の側の良識や思想はインターネット上で精査されていくのに、匿名である場合がほとんどのクレームする側の良識は精査されない。私は批判にさらされることは表現者として避けられないことだから、書くことをやめない。だが、私のような考えの持ち主は皆無といってよく、一般の人はなかなか市民記者を続けられない。結果、記事は集まらなかった。

文芸月刊誌(2005.5月号)で、田中金脈問題を指摘することで名を馳せた日本の代表的な言論人は「ネットはメディアを殺せない」というタイトルで、市民インターネット新聞に言及していた。そこには市民記者制度の失敗との小見出しもある。

私は思った。日本を代表する英知の塊である言論人は、自らの高みにおいて、市民記者たちを鑑別したといえないだろうか。あの圧倒的な知の持ち主にしても、市民記者の誕生を喜んでいない。自分たちが市民記事の拙さを補い、擁護することで、国語力・論理力エリートたちの牙城となっている言論界を是正しようと、どうして考えないのだろうか。

勿論、私の推論の根拠となった彼の文章は、キュウタロウに関する特集の中のコラムであり、特集の主旨はセンセーショナリズムであり、現象を批判する文脈で貫かれている。ただ、自省的でもある彼が、「記者制度の失敗」などと小見出しをつけて、早々と結論を出し、文の最後を、「キュウタロウが豪語したような、いずれインターネットが旧来メディアを全部死滅させるなどという日は当分来そうもない」と結んでいる。その言葉の底にある日本を代表する言論人の激情の度合いというものを私は感じるし、無名のジャーナリストならば、そのような抵抗はもっと強いと確信する。

そして、彼らがやっていることは、テレビ創世記に「一億総白痴化」とテレビを切り捨てたこととまったく同じである。大宅氏の一言によって、時代は変わったのだろうか。大宅氏の言葉によって、テレビは過度に反応してエスカレートしていく。

この一流言論人の物言いは、国語力を誇るライターが、その優越性で市民を差別し、自らの既得権益を守るという狭い見の発露でしかない。だが、そのような企みは、インタ

ーネットによって淘汰されていく。そのような事例はすでにアメリカで存在している。

2004 年秋、アメリカ 3 大ネットワークの一つ CBS のニュース番組でアンカーマンを勤めていたダン・ラザーが降板を余儀なくされた。これは、ブロガーが 3 大ネットワークの有名キャスタを追いつけめたことで一躍注目された。ことの次第はこうである。

CBS のニュース番組が、ジョージ・W・ブッシュ大統領の兵役逃れを告発する。だが、使用した書類が放送局が捏造したものという指摘がブログでなされた。放送された映像を解読するもの。巷間の資料をあたる者、さまざまなブロガーたちが言論を統合していくことで、CBS ニュースは追い込まれていく。そして、トカゲの尻尾きりよろしく、ダン・ラザーは CBS から解雇された。

これをして、ブロガーが 3 大メジャーなに勝利したという論調がある。だが、実際は違っている。優秀なブロガーが存在したのではなく、個性を有するブロガーたちの集合知が有名キャスターを降板に追い詰めたのでしかない。

如何なる言論界の巨魁であろうとも、全知全能の神ではない。ならば、個性ある無名氏たちが、妥当性ある言論を結集すれば勝ち目はない。才能も権限も卓越した個であろうと、無限数存在する多才な個の集団にはひとたまりもない。だから、有名言論人たちは、個対集団という構造になることを極度に恐れ、各個撃破とばかりに、頭角を現しつつある個に一騎打ちを挑み、軽々と打ち負かしている。

そして、忌々しきことに、その構造は市民インターネット新聞の中にもはびこっている。かの編集者たちは市民の記事を鑑別し、自らの優越性を誇る。市民の味方になるべきかれらが、一番の障壁になっているのでは、市民参加型ジャーナリズムなど成立するはずもない。

勿論、私がインターネットの登場に際して、その登場を批判するような言説は好まないのは、ようやく社会的発言権を与えられた無名人だからという理由もある。だが、それ以上に、あるべきインターネットの姿、利用法というものを提示することが重要であり、必要であるという気持ちが強い。

私がオープンゲイトに応募した理由も実はそこにある。イーコマースやストリーミング番組の現場にいて感じたのは、世の中が「インターネットは出会い系サイトと自殺系サイトなどの社会悪しか社会に提供していない」という批判。

そんなことはない。生まれっぱなしのイノベーションを育てることもせず、ほったらかしにした社会のほうが悪い。勿論、それは私の考えが正しくて、世の中が間違っているということを声高にいいたいのではない。問題があるのなら、それを嘆いてばかりいなくて、積極的に行動しようよ。と、訴えたかった。

7 月 20 日。私はブログを通じて交流のあった通信社の編集委員・朝永を築地に訪ねた。彼は新聞終末論をタイトルにしたブログを続けていた。

「朝永さんのブログにたくさんの書き込みをしています。アラシと感じていないですか」

私はまず、朝永氏に謝罪した。

「いやぁ、あなたの書き込みにはたくさん反論が書き込まれますよねえ」彼は苦笑する。

「どうしてオープンゲイトって、あんなに叩かれるのかなぁ」

朝永が私に会いたいと思ったのは、市民記者にオープンゲイトの実情を知りたかったのだろう。だが、私にとってオープンゲイトはすでに終わってしまったことだった。そして、私が求めていたのは、編集システムを持たずに、言論を抽出すること。

彼は一流通信社の論説委員であり、著作をなし、ブログのアクセス数も一万を越える。仕事柄、彼はマスコミに交流が深く、テレビでも有名キャスターと対談している。そんな彼のまわりに市民記者たちが集まればどうなるか。

結果として、市民インターネット新聞と同じことができるのではないか。

「朝永さんは、渋谷のハチ公になってください」。初対面であったが、柔和な表情なにつけ込んで私は申し出た。あなたの周りに市民記者が集まって、記事を上げる、言論を展開する。そういうコミュニティができれば、いまの一切の中心を持たないブログスフィア(ブログによる言論空間)も進化できる...

「ただし、朝永さんはハチ公になりきるんです」。私の言葉に朝永はおかしな顔をした。

「だってそうでしょう。ハチ公が喋り出したら、集まっている人はビックリして、逃げ出す。だから朝永さんは存在感だけ示して、黙っているのがいい」不遜な私の意見に彼は鷹揚な笑顔をつくって見せた。

当時もそして今もブログには中心も周辺もない。それはある意味インターネットに共通のことだろう。だが、中心になろうとする勢力がいる。それは、アルファブロガーという言葉が流行らせたいと行動する人達である。アルファとは、アルファベットのAと同じで、「第一の～」という意味。つまり、ブログ界を引っ張っていくブロガー。あるベンチャー系のIT会社が年末に人気投票を行なって、ベストテンを選定し、そのブロガーを紹介する本を出版していた。だが、それらがブロガーを代表するのかといえば、疑わしい。なぜなら、主催者に近いIT技術のプロモーターであるブロガーが数多くリストアップされていたからである。ブログの女王といえば、眞鍋かおりという芸能人であり、芸能活動の延長線上でブログを書くタレント。同じように、アルファブロガーもITエバンジェリスト(業界論者)たちの巣窟といった意味しかない。

当時、私はアルファブロガーについて、次のようにブログに記している。

-----  
私にみたいなメタ議論者が、誰からも相手にされないのは仕方ないにしても、あるべきブロガーについて、ネット者は考えるべきだと思う。

インターネットは、既存のメディアに対抗するメディアじゃないよ。インターネットは、四流のメディアじゃないよ。インターネットは、既存のメディアを補完するメディアじゃないよ。インターネットは、既存メディアの劣化コピーじゃないよ。

リスペクトされるべきブロガーとは、エスタブリッシュ界を追われた人じゃないはず。リスペクトされるべきブロガーとは、商人ブロガーではないはず。リスペクトされるべきブロガーとは、対話を拒絶するブロガーではないはず。リスペクトされるべきブロガーとは自らが発信者であるはず。ネット上のネタばかり集めているブロガーは、リスペクトされるべきブロガーじゃない。

論壇系ブロガーというが、論壇はあるのだろうか。議論がそこから起きたのだろうか。私は、シリコンバレーからの手紙のブロガー氏に何度も対話を試みたが、一度も対話が成立しなかった。

ブログから何か生まれたのだろうか。ブログから何も生まれなくていいのだろうか。

ネットにおける言論の自由に関する根本的な構造を守るために、あなざあチャンネル閉鎖騒動はあるんだよ。なのに、Winney 訴訟における慶応大学の村井純先生のように、自らの失脚も省みずに擁護する人はいない。そんなブログ空間でいいはずはない。

「オーラの泉」に眞鍋嬢が出ているのを観た。彼女曰く、ブログをやることで、芸能界でやっていく覚悟ができた。と。私にはおっぱいの他にも魅力がある。江原氏は言う。ブログの他にも、内観の場所を持ちなさい。と。

だが、ブログはそうじゃないよ。内観(自分の心を振り返ること)したすべてのものをブログに出せないからダメなんだよ。ステークホルダーにまみれて、内観したものと違うものをブログに書いている。それが間違いなんだ。内観したものが、他者に触れて、それが劣情だと叩かれる。それもいい。

ステークホルダー(個の利害)が邪魔するなら、匿名やハンドルネームでいいじゃないか。内観する自分さえ、お天道様は見ているんだ。内観してで出来た自分が、ろくでもないもののだとしたら、他者から叩いてもらっていいし、そのような愚劣な自分から、他者が何かを気づいてくれれば、そんなうれしいことはない。

マンション構造偽装問題の藤田東吾氏がネット上で告発してから、アパグループのトップが懺悔するまでに、1年かかったよね。きっこの日記が問題を指摘しても、誰も知らんぷり。もし、インターネットにインテグレート機構があれば、そんなことはなくなる。その一年間に大きな地震が起きなかったからいいけど、インターネットの言論空間がやらなければならないことはある。

無国籍児がいる。明治時代の戸籍法がいまでも、使われているんだってね。滋賀県の高校生は戸籍がないからビザも取れず、海外への修学旅行にいけなかった。それがニュースで発信されるまで、私は知らなかったけど、関係者たちは組織をつくっているのだから、議会や役所をまわりながら、きっとネットも使っていたはず。でも、ネットは彼らを助けることはできなかった。何故だと思う？ いまのインターネットに、インテグレート機構がないからだ。

インターネットがあってもだめなんだ。もしインターネットにインテグレート機構があれば、滋賀県の高校生は修学旅行に行けたし、無戸籍児なんていうばかなことも、すぐに



なくなるはず。こんな矛盾はもっとも世の中にはあるはず。だけど、誰もそんなシステムをつくらうとしていない…。

リスペクトにたるアルファブロガーが知られていないのはしかたないにしても、なんとかインテグレートシステムをつくりたいものだ。

後注：メタ議論とは、議論のためルールづくりや議論そのものを批判するなど、議論のための議論をすること。ネット者の間では、議論に加わらないものとして批判の対象となる。

-----

朝永はアルファブロガーに名を連ねているが、もともとは日本の通信社の一つのアメリカ支局に勤めていた。彼は西海岸の大学に通っていて、在学中から通信社の支局でアルバイトをする。現場の下働きから始めた彼がキャリアを積んで十年以上経った頃、アメリカの現地法人で正社員として雇用される。そして、東京の本社に転属になった。これは伝統と格式を重んじる日本の通信社では初めてのことだったという。実際、彼の名前を職員名簿に載せるかどうかについても、少なからずの摩擦があったという。そのような状況の中で、彼はネットが新聞を打ち負かす主旨の本を上梓し、マスコミ人に多く読まれることになった。

彼が長くいたのはサンフランシスコ。その周辺にはシリコンバレーがある。彼はそこで、まだ無名だったビル・ゲイツなどを幾度となく取材してきた。ワシントンやニューヨークであれば本社から派遣された記者が風を切って振舞っていただろう。だが、ロサンゼルスよりも、さらにはなれたロサンゼルス。そして、シリコンバレーはもっと田舎である。そんな偏狭の地で、IT最前線取材してきた朝永の知識と人脈は、東京本社にとって魅力的な人材だったに違いない。通信社の東京本社にあっても、きっと彼はアウトサイダーだったに違いない。その違和感が新聞の絶望的未来とインターネットの楽観的将来を綴った本を書かせたに違いない。

彼の専門分野はITだから、日本に帰ってきてても多くのITエバンジェリスト(業界御用達)のアルファブロガーたちの殆どが顔見知りだった。だが、彼の本質はジャーナリストである。取材対象としてITを専門にしているだけで、彼はいわゆるITおたくではない。そのあたりの感覚が、凡庸なIT関連ジャーナリストと朝永を分けていた。

通信社の上層階にある社員食堂は、銀座の街を見下ろしている。それが、通信社の世の中に対する目線の角度を象徴しているかにも思える。朝永は私に、「あなたは自己の達成感を得るために市民記者活動やブログ活動をやっているのですね」とけしかける。なんと厳しい質問である。報酬を貰って取材し記事を書く人間は、市民記者の行為を自己満足のための行為と捉える。

「勿論、記事を書くことによって達成感もありますよ。それに自分の社会的な存在価値を高めるための行為でもある。でも、それは結果としてそうなのであって、言論をする事に

よって世の中が変わっていけばいい。でも、そんなことを真顔で言ったら誇大妄想狂ってことになる。だから、変わらなかったとしても、自分がやるべきこと。やれるだけのことはした。そう思いたいんです」

「つまり、そういうことを通じて、自己を確立したいのですね」

「そういわれてしまえば、否定するわけにはいきませんが...」

私は、その言葉の先を飲み込んだ。職業人は報酬を得ることで、満足を与える。そのことで自己を確立する。否、金銭的な見返りを求めて生きているということに辛くなって、金銭以外の価値観を求めて自己を確立しようとする。つまり、職業ジャーナリストである朝永と私は同じ荒野に立っている。ただし、私はジャーナリストに憧れないし、ジャーナリストの理想などばかげていると思っている。その点において、私は朝永よりも自由である。

ああ、嫌になる...。素人が発言すると、プロはまずこういう言い方をする。実名で発言すれば、目立ちたい・自己満足。そして、匿名で語れば、ストレス発散。なんで、マスコミ人たちは、そういう発想しかできないのだろう。彼らは、売文によっぽどコンプレックスを持っているのか...

「朝永さんは、お金を貰わなかったら、ジャーナリストを辞めるんですか」

「事件や新しいことが起きている現場に行ったり、有名な人にインタビューする。こんな楽しいこと、僕はお金を貰わなくてやっていたいなあ...」。彼は、愉快そうに笑う。

ビジネスとしてのジャーナリズムの中にいる彼は、屈託がない。彼は新聞の終末を語る本を書いたが、その動機は現実を悲観するのではなく、自分の仕事はどうなるのかという切実な興味だった。その本が新聞終末論を煽ったのは、出版社が煽情的なタイトルをつけたことが理由。これには彼も迷惑しているという。

では、新聞にとって変わるインターネット新聞が輝かしい未来を持っているのか。市民参加型ジャーナリズムがビジネスとして成立するのか。それは微妙である。ビジネスとして成立しなければその繁栄はありえないのは当然。だが、ビジネスになってしまえば、既存のジャーナリズムと同じ道を歩むに違いない。ならば、メディアとして繁栄することに意味はない。ならば、市民インターネット新聞の繁栄とはビジネス的な成功ではなく、市民記者が記事を書くことになる。

私がブログを通じた感覚では、読む人が100人いてもその中で書く人は一人いるかいないかである。だから、書く人を100人集めたかったら、一万人の読む人が母集団として必要だと思う。つまり、それだけのアクセス数が集まらなければ市民参加型ジャーナリズムは成立しない。また、100人の書く人たちにしたって、わが身に危険が及ぶならば継続して書くことはないだろう。オープンゲイトの市民インターネット新聞は一日2万アクセスと豪語しているが、母集団がその数ならば、登録しようとした人たちが数百人なのは、とても妥当な数字である。そして、その数百人のうち実際に書くことを続けているのは五十

人を下る。その原因は、書く意欲を持った人たちが安心して書ける環境を市民記者媒体が提供していないからだ。

市民が安心して記事を書ける環境を整えるためには、運営者は何をすればいいのか。それは、既存のマスコミが持っているような法務対策であり、セキュリティ対策である。それは、ある種の個人情報エージェントや保険制度かもしれない。そして、それは、市民参加型ジャーナリズムに対してのみ言えることではなく、すべてのインターネットユーザーに必要なシステム。個人情報エージェントは、インターネットに関わる匿名性の不備を補完する。そして、保険制度はバッシングや損害賠償裁判に個人が対応できるシステムを提供する。

インターネットの社会への浸透はめざましい、いまやインターネットをバーチャルな世界と揶揄することも死語と化している。否、メタバース(もうひとつの宇宙)としてセカンドライフが登場し仮想現実であることを誇る今。メールもリアルであり、ホームページもリアル。ならば、インターネットはリアル。そして、これからはますますインターネット上になんらかの形で個人が存在しなければ社会的に認められない時代が来る。しかし、個を守るシステムがないのなら、インターネットにサイトやブログを立ち上げることは勿論、コメントを書き込むこともできない。

ミキシーは限定されたコミュニティーを提供することで成功した。その関係が仮想と切り捨てていいのだろうか。勿論、そのコミュニティーが拡大すればするほど、いままで内側だと思っていたものが、外側に感じられるようになる。そのようにして、次々に SNS が生まれては使い古されていくという虚しいムーブメントが繰り返される。そのコミュニティーにおいても、個人情報エージェントと保険制度は必要となる。ならば、それらのシステムは、市民記者に限らず全てのインターネットユーザーに必要なのだ。

だが、実際といえば、ブロガーの多くは炎上し、ブログを閉じる。そして、市民インターネット新聞の運営者たちは、市民記者に発言する勇気を求める…。

朝永氏は、マスコミ各社が持っているような法務対応セクションを持っていなければ発言などできぬ。と、指摘する。結局のところ、それは彼のリアリズムの発露なのだが、それは結果として、私が提案するシステムが作られぬことによって、マスコミがその優位性を確保しようとしていることも含意している。

マスコミ対インターネットの最大の対立点が、「匿名 vs 実名」論争である。マスコミは、インターネット言論を「匿名性は無責任」として罵倒する。インターネット側は、マスコミの実名性をいいことに、固有の組織・団体や有名人をバッシングする。そういうまったくレイヤー(次元)の異なる合戦が行なわれている。

インターネットが社会から信頼されていないと言うが、それもマスコミの作り上げた虚像だろう。大衆は、インターネットを信じているから、援助交際走り、集団自殺に集う。そして、ウィキペディアの情報を未確認であるとしたうえで受け入れる。考えてみれば、大出版社の百科事典は記名であるが、それこそ私論が集まって書物を形成しているこ

との証明でもある。評判を集めていた縄文学者が遺跡の発掘で不正を働いていたことがあった。捏造されていた考古学は修正されたが、程度の差こそあれ、学問とはそのようなもの。紙を打ち抜いた活字は揺ぎ無いパワーを誇っているが、永遠のベータ版に過ぎぬ。勿論、新版では改変されたのだろうが、私は過去に遡って百科事典の当該項目が変更されたことを知らぬ。ならば、インターネットのウィキペディアの方が誠実だ。

匿名での大型掲示板への書き込み。そして、スパムメールやブログのコメント欄のアラシ、バッシングにしても、匿名での大量発信がその原因のひとつ。でも、本当に匿名は不道徳で悪なのだろうか。これらのシステムを拒否する方法は多くある。そのシステムを温存してきたインターネットには、もうひとつ別の事情があるような気がする。それは、スパム、アラシもトラフィック(情報の通信量)を増やすからである。そもそも、通信の需要があるから、情報インフラが拡充されてきたし、トラフィックがあるから広告の価値も上がった。それが流通している3分の2が不要なトラフィックであり、それを軽減する取り組みがなされるならば、IT業界全体が萎んでしまう。だから、それらを軽減する対策はとられないだろう。

だが、グーグルメールなどのフリーメールで受け取るスパムの数が画期的に少ないことを考えれば、スパムやアラシを制限する・コントロールする技術はすでに存在していることは明らかだ。

さて、市場は、見えざる手によって動かされていると形容されることがあるが、見えざる手こそ、匿名の大量の個のことだ。そもそも、日本の民主主義もその根本は、匿名による選挙によって成立している。アンケートなどで匿名にすると、無責任な批判が集まる。かといって、記名にしたのでは本音の意見は集まらない。

国会では記名投票が行われるが、記名投票では国会議員たちは派閥や党利に縛られて自由な投票はできないので、投票結果は歪になる。国民の意見もマスコミの意見も郵政民営化を望んでいたのに、国会だけは違っていた。これなども匿名でないことの弊害といえないだろうか。勿論、代議制なのだから、自分を選んでくれた選挙民たちのために自分の投票行動を明らかにすることも当然という考え方もある。だが、小泉首相が行なった郵政民営化選挙のときの野田聖子議員のように、民営化反対で当選したにもかかわらず、選挙民を裏切って、民営化賛成に投票する輩もいる。ならば、記名であることよりも、他から影響を受けない匿名のほうが、匿名により無責任になる危惧よりも、ましである。

そもそもマスコミが強いる「実名」に意味があるのか。実名こそが責任ある発言を保障するのだろうか。これもはなはだ疑わしい。実名は生活と不可分であり、もし発言することによって実生活に影響が出るならば、誰も発言などするはずはない。あるべき姿を目指すべきなのが社会のありようだが、誰も自分の生活への影響を恐れて率直な意見を述べないならば、世の中はあらぬ方向へ進んでしまう。

そのようにして、起きるのは、「ものを言う人」のバイアスが世の中に与える悪しき影響。私は、それをクレームマーケティングと呼んでいる。ステークホルダーたちは、自らの

利害のためにしか発言しない。これではクレーマーと形容される消費者と根本的に同じだ。関係者の中の良識の分子ではなく、クレーマーな分子たちだけで議論がすすめられる。学者といえども、国も財団などから資金を提供してもらっている限り、研究の途中で研究の無価値さが見つかったといっても、その自説を披露する自由はない。そのことで自分の家族は勿論、同僚たちの生活の安定にも影響を及ぼすならば、当然のことだろう。

では、それでも発言をする人。実生活への影響も省みずに発言する人はどういう人なのだろうか。それは正義感がつよく、自分の生活を危うくすることも省みない人たちなのだろうか。確かにそういう立派な人もいるかもしれない。だが、そういう人たちの多くは、捨てるものがない人、守るべき人がない人。また、言うことでしか、自分のアイデンティティーが保てない人。言うことでしか、まわりの人たちを守っていけない人たちといえる。そういう人たちの言説が、社会全体をあるべき方向にすすめる動因になるのだろうか。私には極めて疑問に思えてならない。

百歩譲って、社会にとって、実名が責任と信頼をうるためのものだとしたら、それは個人にとっては、まったくもって厄介なことになる。よほどのことがない限り、日本の戸籍法では、ひとつの名前を一生名乗り続けなければならない。名前を使い続けていけば当然のように毀誉褒貶が生じる。私は、そういうものを乗り越えていくのが人生であるが、乗り越えられない事態に巻き込まれることもないとはいえない。個人や法人に破産制度があり、やり直しがきくように、情報化社会においても、傷ついた自分の名前というブランドをゼロからやり直す制度があってもいい。だが、それが実名では難しい。

近代以前は、幼名があり、元服して名前を戴き、大家になると、襲名などをした。それは、それぞれの個が過去を清算して生まれ変わることだともいえる。そして、それがとても自然であった。足軽の日吉丸が、太閤秀吉になる。生き方が新しい名を生み出し、名が人を成長させる。出世魚ではないが、そういうことがあったと思う。

勿論、一生同じ名前で呼ばれ続ける人たちもいた。それらは使用人であったり、身分のない人たち。彼らに共通するのは社会的な責任を果たすような立場や地位になかったことだ。四民平等の世の中では、社会的な責任から無縁な人など存在しない。9・11事件以降は、すべての人が自分の潔白を証明する義務も責任も負う。そういう時代が訪れている。

トレーサビリティ(言論の発信者へ行き着く術を確保すること)が、実名至上主義の理由とするならば、高度情報化社会の実現により、トレーサビリティは確保できる。ならば、実名にこだわる理由はない。だが、近代以降、トレーサビリティの確保を第一の理由にして改名がほとんど不可能になっている……。トレーサビリティを確保すればよいのであって、実名である必要はない。トレーサビリティの確保を主な理由として、実名主義を貫くのは、旧態然としている。西洋に見習った制度なのかもしれないが、どうやら日本人の社会風土には合致しないような気がする。

トレーサビリティさえ保持していれば、実名であろうと匿名(ただし固定ハンドルネーム)であろうと、問題はない。たとえばファミリーレストランが混雑していて、リストに名

前を書いて待つ場合を考えてみればいい。ウケを狙って、芸能人や有名人の名前を書く。それでも、ほんの数十分の間トレーサビリティが当事者の間で保たれていれば何の問題はない。そもそも実名である必要はないし、実名であることで、そこに行動の記録が残ってしまうことを嫌うなら、ギャグではなく、当然の行動である。芸能人などは、本名と芸名を使い分けることによって、自分が工作中なのか、プライベートなのかを明確に分けることができる。

玉川高島屋の店内放送で、「蒲池法子さん...」というアナウンスがあったのを憶えているが、芸能人としての松田聖子ではなく、私人としての彼女が買い物をしているのだから、騒めきたってはいけない。と自制した記憶がある。

同様に、病院の待合室で薬を待っているとき、有名人の名前が呼ばれると、待合室全体が色めき立つことがある。もちろん、そういうときの殆どは同姓同名の人。実名だから仕方ないと、本人は諦めているのかもしれないが、病院といっても基本的にファミレスで順番を待っているのと同じこと。トレーサビリティさえ確保されていれば、名前などどうでもいいのである。実名によってワンストップサービスが重用された時代は終わっていい。

市民が発信することの背景には複雑な事情がある。だが、プロのジャーナリストは違う。朝永は、アメリカの現地採用という日本のジャーナリズムの傍流という立場から市民インターネット新聞に興味を持った。そして、オープンゲイトの主宰者である藤堂は、日本のジャーナリズムから拒絶されたところから、市民インターネット新聞を立ち上げた。藤堂はアメリカでフリーランスで記者として記事を書き、日本で外国通信社に雇われて記事を書いた。そして、本流に受け入れられぬ鬱屈をアカデミズムに求めた。だが、彼のジャーナリストとしての評価は高まらず、存在感を増すために市民インターネット新聞を立ち上げた。彼らの発想は、すべて商業ジャーナリズムのものであって、藤堂がそれを否定しようとも、それは同じ評価軸のうえのもの。その典型が実名批判である。

彼らは、ジャーナリズムが世論を生み出す。または、世の中をリードしていく。との妄想に取りつかれている。そして、ウォッチドックや社会の木鐸などと嘯く。だが、インターネットが普及し、大衆との24時間365日の情報のやりとりが可能な今、世の中をリードすることは、世論から外れることを意味する。そして、リードするという概念の底に、ジャーナリストである優越感や、市民蔑視・啓蒙臭が存在する。社会の木鐸とは、見張り役のことだろうが、ジャーナリストは誰から役目を仰せつかったのだろうか。民主主義の時代、見張り役を依頼したのは、大衆に他ならず、自分たちのご主人ともいえる大衆を実名・匿名として差別する根拠はどこにもない。何故なら、民主主義を支える重要なシステムである選挙制度が匿名で営まれているからである。記名制度による民主主義は弊害が多い。そのことを日本というコミュニティーは理解している。そして、記名によってなされる投票が、全体主義しか生み出さないことを、ソビエトの瓦解などの歴史が証明している。中国でも北朝鮮でも選挙は行なわれている。でも、だからといって、民主主義であるかどうか

かは疑わしいのだ。

「なんでマスコミの人は、そんなに実名に拘るんでしょうね」

朝永氏に私は問いかける。

「インターネットが普及して読者と交流することができるようになったんだけど、マスコミの人は読者と対等な視線に立つのは怖いからじゃないかなあ…。だって、相手が名乗らないのって、とっても不安でしょ」

なんとも素直な意見が私には意外だった。

「それに相手が名乗らない限り、相手がどんな能力を持っている人かどうか分からない。ひょっとすると自分の広告主かもしれないし、圧力団体の人かもしれない。そんな可能性を考えたら、匿名な相手と対話することなんかできませんよ。それをするのはよっぽどのばかか向こう見ず」

「そうですかね。飛行機で座席が横になったり、トランジットで時間があいたときに見知らぬ人と対話をする。それって別に珍しいことじゃないでしょう」

「君はぜんぜん分かっていないね。実名でインターネットに登場している以上、ネット上の言論で負けることは許されないんですよ。たとえば、自分を否定することは自分の権限でできるけれど、自分が所属する会社までは否定できないでしょ。だから、よっぽど自分の言論に自信がなければネットで自分の意見を書く事なんてできない。そして、少しでも自分が不利だと思ったら、相手が名乗らない卑怯者だと罵倒する。そして、それまでのネット上の記事を削除する」

「それって卑怯じゃないですか？」

「仕方ないだろう。実名を名乗っている私たちの方が不利なんだから」

「それなら、匿名でインターネットに記事を書けばいいじゃないですか」

「そんなことはできないだろう。匿名ならば、自分がマスコミの人間だって分からない」

「そんなことはないですよ。匿名(固定ハンドルネーム)で発信する小児科医もいる。評判になったきっこの日記だって、疑わしいけれど、ヘアメイクと職業を明示した匿名ですよ」

「いや。僕はそういうのはしたくない。ジャーナリズムっていうのとは根本的に違う気がする」

「だからといって、匿名者をバッシングする妥当性はないんじゃないかなあ…」

私は、それ以上の言葉を飲み込んだ。

「きっこの日記ねえ。あれはみんな評価するけど、あの中の情報は、みんな僕らが知っている情報なんだよ」

「そうなんですか？」

「多分、あのブログをやっているのは女性のヘアメイクなんかじゃない。だって、小泉首相の周辺のことや、マンションの構造計算書偽装問題にしたって、芸能人のヘアメイクをしている女性が触れられる情報じゃない。たぶん、女性のハンドルネームをつかって、マスコミ関係者がブログを書いている。いや、きっこというネームを使っている人が何人か

いるんじゃないかな。そのうちの一人が女性ヘアメイクで、その他にマスコミ関係者がいる。そのマスコミ関係者は、裏取りができていない情報でも、ブログならオッケイとばかりに、書き込む。そんな感じじゃないかな」

「だとしたら、そのマスコミ関係者は、野党系の人なのかな。小泉批判はあるけど、野党批判の記事は見当たらない...」

「きっとそうだろうね。国会で、野党の若手議員がキュウタロウの偽メールで大臣を批判したら、それが偽装だったことがインターネットで分かり、政治家としての未来を閉ざされた。裏取りがなされていようがまいが、自分たちに都合のいい情報だったら流してしまえ。そういうツールとしてブログや匿名が使われている。それって必ずしもいいこととはいえないだろう。実体のある新聞社や記者は責任を追究されるから、そんなことはしない。やっぱり匿名で言論することはいけないだよ」

朝永の意見も一理ある。だが、ほんとうに新聞社は責任をとってきたのか。誤報を流さないできたのか。自分達に都合のよい言論を紡いでこなかったのか。

初対面の者同志がいきなり自己紹介もせず、一気に語り合う。これこそ、インターネットあってのこと。二時間あまりは瞬く間に過ぎていった。

「ところで、朝永さんは何で市民参加型ジャーナリズムに拘っているんですか。ジャーナリズムなんて、ほとんど死語でしょう」

「痛いこというね。でも、ボクみたいなジャーナリストは存在するし、僕はジャーナリストであろうと思っている。きっとインターネットが市民社会に完全に浸透したあとも、それは無くならない。きっとポストジャーナリズムっていうのが生まれてくると思う。それが何なのか。それを早いうちに見つけておかないと、自分の仕事がなくなる。そういう危機感があるんだよね」

たしかにインターネットのなかった時代、マスコミにしか情報発信ができなかった。だが今、ブログや掲示板をつかって、誰でも簡単に情報発信ができる。そのような時代にジャーナリズムがいまのままでいいはずはない。

「ぼくはアクティビズムが重要だと思っているんですよ」彼は、NPO 活動をあげながら、ジャーナリズムが市民運動と密接に繋がっていかねばならぬと考えている。

「将来、アクティビズムとジャーナリズムの垣根はなくなるでしょう」

いままで既存の報道機関がメディアを牛耳っていたので、アクティビストたちはジャーナリズムに入っていけなかった。だが、インターネットの発達とともに、今後はアクティビストもジャーナリスティックな活動をするようになる。

そうなのだろうか...。私には到底そうは思えない。私の語感では、アクティビストは主観者であり、ジャーナリストは客観者。そこに問題があるのではないか。だが、ジャーナリストは客観者を装った主観者である。つまり、ジャーナリストもアクティビストも、何かをいいたい人、何かをやりたい人である。そういう人達だけが牛耳る社会というのも、



もうひとつの問題を孕んでいるのではないか。

ジャパンインターネット新聞は、オープンゲイトと並ぶ市民参加型ジャーナリズムだが、私には、そこが左翼的市民運動の活動家たちの主観で覆われてしまって收拾がつかなくなり、読者を想定していないメディアに陥っている。本来、アクティビストはジャーナリストに自説を語るべきであり、ジャーナリストはアクティブに読者に働きかけるべき。それがいまは、アクティビストたちがようやく自説を語るメディアを得たことに狂喜乱舞してしまって、そのメディアを覆い尽くしている。それが結果として、彼らをメディアから排除するキッカケになるとともに、サポーターを増やすことにもつながらないことを理解しない。

私は、帰り際に尋ねた。

「ジャーナリズムが保持すべき取材対象との客観性・中立性というモラルは、ジャーナリストに冷酷さを強いるのではないですか」

「私はジャーナリストである前に、一人の人間でありたい」と彼は即答した。

\*\*\*\*\*

ジャーナリストは既存メディアに背を向ける

\*\*\*\*\*

オープンゲイトを放逐された私は、またブログの世界に戻っていった。ブログに戻っていく。日本ではブログが普及する真っ只中である。それは、インターネットが大きな転換点を迎えていることを如実に表現している。だが、インターネットで何が起きているのか。または、何が起きていないのか。その認識は極めて難しいし、インターネットを見る人のステークホルダー(利害)・価値観によって大きく異なる。

私にとって、何が起きているかといえば、誕生から時間も経っていないが、すでに市民インターネット新聞に明るい未来がないこと。だが、その一方で、ブログの普及によって、普通の人が自分のことを書いたり、意見を述べるのが珍しいことではなくなった。その一方で、それら市井の意見が結集してひとつに意見に向かっている。ネットの上の意見は、ただただ散らばっているだけで、放置されたままでいる。

結局のところ、インターネットやブログがコミュニケーションのツールだとしても、そこでのやりとりは殆どが一步通行。そして、人気が集まり、注目されるのは、既存のメディアで有名になった芸能人・有名人ばかりだ。彼らはブログ提供会社から原稿料を貰ってブログ記事を書く。眞鍋かおりがブログの女王と言うが、彼女はブロガーではなく、芸能人がブログを書いている。それもお金をもらって。そういう人達は商人(あきんど)ブロガーと私は名づけた。これは、ホモセクシュアルでもないのにゲイでお金儲けをする人・

商人(あきんど)おかまを援用した言い方。そんな子持ちのおかまちゃんたちも純然たるノンケ(性的多数派)ではなく、たぶんバイセクシュアルの性向を持った人達であるに違いない。商人ブロガーもそんな形。そもそもブログだけで生活が成り立つほどの報酬を得ることはありえない。

芸能人・有名人以外でアクセス数を集めるのはアルファブロガーという人達。かれらの多くは、ブログを普及することで自分のビジネスを成功させようとする技術系の会社を営んでいる人やフリーランスで活動している人達が多い。彼らはブログを書く事で原稿料を得ているのではないが、企業の広報活動のようなもので、副次的に経済効果に繋がっていく。そういうブログが散見される。

だが、地方新聞の記者だった成宮は違っていた。私がオープンゲイトから拒絶されたとき、彼も似たような状況に陥っていた。彼が地方誌を退社したのは、2005年3月末。彼が新聞記者生活を送ったのは9年あまり。私が市民記者として活動した3ヶ月とは比べるべくもないが、ふたりが経験したことの類似性は果てしない。私が彼を知ったのは、朝永のブログである。朝永と成宮は面識があるらしく、一緒に酒でも飲みましょう。と、誘われたことがある。

私は成宮にメールを出し、彼の引越し先のマンションの近くで会うことにした。

「いやぁ、引越しの片付けに手間取っちゃって…。それに就職先も探さない」と

「もう何処か決まってるんじゃないですか」

「いくつか目星はあるよ。ただ、それにしたって、詳しく条件を聞いてみなけりゃ分からないし、相手だって、履歴書を見て社内調整もあるよね」

成宮は地方誌を退社後、東京で就職活動をしていた時期であり、引越し後の忙しさで、彼と会うことはない。それが私と彼の距離とっていいが、彼のたどった道は、興味深い。

成宮は私よりも一回り若い。彼は大学を卒業後、地方新聞の記者になった。彼は修行時代、警察関係や裁判関係など、事件・事故・紛争事の最前線にいた。そして、文化面や中高生向けの紙面を担当する時期にブログと出会う。彼は、新聞記者であることを明示してブログを書く。

「でも、勇気がありますよね。自分で記者であることを示してブログをやるなんて」

「そうかな。新聞人って、編集委員になって記名で記事を書けるようになるのが目標だったから、割と自然なことだったんですよ。ただ実名じゃないし、自分が新聞人・それも地方紙の記者であるってことは公開しただけだよ」

「それってどうして？」

「いやぁ…。やっぱり、会社からお金を貰っているのに同じ名前で別の場所で書くっていうのは、どうかなって」

「そうですか」

「当時のボクは、労働組合にも参加していた。だから、組合の仲間と語り合ったこと。それをそのままブログに書いたわけじゃないけど、ほとんどそこの論調と同じことが、プロ

グの記事に反映されていったんじゃないかな」

「ふふ...ん。まったくボクとは違うんですね」

彼のブログのテーマは地方誌からみたマスコミであり、それは権力への嫌悪に彩られていた。つまり、政治家や官庁、一流企業も悪者だが、どうように中央紙も悪者。彼の舌鋒は鋭く、マスコミのことをマスゴミと形容しては憚らなかった。

「なんでマスゴミなんて書くんですか。成宮さんはマスコミの一員なんだし」

「マスコミにいるからこそ、いまのマスコミが腐っていることが分かるんじゃない。ボクは新聞社にいて、それを感じているから、毎日ブログに書く。それでいいんじゃないかな」

「でも、ブログに書くことで、職場でのコミュニケーションがおかしくなったりしないですか。私は身の回りのことを書いているけど、仕事のお客さんのことは絶対に書かない。そんなことをしたら、仕事を失いますよ」

「スポンタさんは市民記者をやっていたから、ジャーナリズムを理解しているかと思ったけど、そうでもないんですね」

「ていうと」

「失礼かもしれないけど、ジャーナリズムが社会に果す役割が社会の木鐸だって言われているのを知ってますか」

「社会の木鐸ね...」

「そう。反権力とでもいうのかな。マスコミが第四の権力って言われるのは知ってるかな。つまり、司法行政立法の三権でこの国は成り立っている。だけど、それが腐敗しているのが現状なら、それを監視する。正していく。それがマスコミのあるべき姿。でも、そうあるべきマスコミが三権と癒着している。そういう現状を打開するのが、自分がいた地方新聞だと思っていたんですよ。ま、でも、それも夢破れた...。というか、結局、やめることになっちゃったけどね」

彼がブログを書き出したのは、朝永が「ネットは新聞を抹殺する」という新聞の終末・悲観的未来を描いた本がキッカケだという。朝永は出版と同時に「ネットは新聞を抹殺する」というブログを開設した。それは、同著が現在進行形の出来事であり、その状況を把握するには、ネットでの交流が必要不可欠であると考えたからだ。この本はシンクタンクの研究員と朝永の共著であった。そして、朝永は殆どはじめての書籍出版だったため、主筆である研究員に遠慮している部分が多い。朝永は、「ネットは新聞を抹殺する」という刺激的なタイトルは出版社が拵えたものであって、自分は迷惑している。と嘆く。私はそんな攻撃的な人間ではない。そのことを朝永はブログを通じて訴えながら、市民参加型ジャーナリズムという言葉を使って、新しいインターネットのムーブメントを煽っているようなところがあった。朝永のそれは、シリコンバレーでの経験やアメリカのジャーナリズムから見た、日本のマスコミへのアンチテーゼであつたらう。だが、成宮はそうではない。

成宮の日本のメジャー新聞に対する批判に手加減はない。マスゴミという言い方は、普通マスコミ人以外がするものだが、彼の場合は例外だった。マスコミ人でありながら、マ

スコミを批判する。

彼は無名の地方誌記者としてブログを立ち上げたが、彼の情熱は記事を書くことだけで満足しなかった。彼は、記事を書くと、それを有名人のブログにトラックバックさせた。

ここで、ブログを説明しておく。ブログとは、空欄に書き込むだけで発言できる簡易型のホームページである。それまで一般的だったホームページでは、HTML という言語を学ぶか、HTML エディターというソフトを買ってこななければホームページを作れなかった。だが、ブログは違う。ブログをはじめようと思ったら、ブログのサイトに行って、文字を打ち込むことだけで、ホームページが出来上がる。いままで、新しい言語を習得したり、アプリケーションをマスターしなればできなかったホームページ作りが、思い立ったが吉日とばかりに始められるのである。勿論、ブログはホームページと違って機能は限定されている。洋服でいえば、オートクチュールではなく、イージーオーダーといえるのかもしれない。だが、出来上がりを見れば、普通の人にはその違いは分からない。これによって、爆発的にブログが普及する。

そして、ブログにはホームページにはない2つの特徴があった。そのひとつがトラックバックである。

成宮は、記事を自分のブログにアップさせると、それを有名人のブログにトラックバックさせた。トラックバックとは自分のブログに行くためのリンクを張ること。有名人のブログに自分のブログの記事へのトラックバックすれば、閲覧者が有名ブログからやってくることを期待できる。そして、ブログをやっている有名人本人も自分のブログにはられたトラックバックに関心を持っているはず。だから、有名人が記事の中でトラックバックの話題をとくとして取りあげる。そんなことが起きると、有名人のブログからの多量なアクセスがやってくる。

成宮はこのシステムをつかって、有名人のブログにせっせとトラックバックを送った。トラックバックの送り先は、ブログ空間のセンターを自称する木村剛という経済コンサルタントが管理する「週刊木村剛」。彼のブログは他のブロガーの記事を紹介することで成り立っている。彼の言説は独特で、彼に何かを書かれると、書かれた側は反応せざるをえない。そういう批判でも嘲笑でもない、不思議な記事がアップされる。すると、話題にされた側は無視するわけにもいかず、反応の記事を書かざるをえない。そのようにして記事を書かせることを「釣る」、書かされることを「釣られる」と形容されるのだが、実業の世界で上手に渡り歩いてきた彼は、多くの摩擦を潜り抜け、多大なアクセス数を誇っていた。ネット者の間では、絡みつ়くとコミュニケーションをあわせて、カラミニケーションと揶揄されていた。

成宮は木村のブログに度々トラックバックを打った。そして、ある日、木村がの知るところとなる。木村は成宮の記事に関する記事を上げる。そして、それに成宮も新たに記事を上げる。そして、またトラックバックをする。木村のブログを経由してやってきた閲覧者がコメントを書くと、成宮は感謝の言葉を欠かさずに書き込む。そのようにして成宮が

トラックバックの対象としたのは木村のブログだけではない。朝永のブログもそうだし、その数は有名無名にもはや拘っているとは思えないほどの多量であり、それはトラックバックやコメントを打ちまくると形容されるほどだった。結果、3ヶ月も経たぬうちに、成宮のブログは1日のアクセス数が2万を記録する有名ブログとなった。

「でも、成宮さんは何でネットで評判が悪いんですか...」

成宮に投げかけた言葉は、朝永が私に投げつけた言葉を思い出させた。「どうしてオープンゲイトはあんなに叩かれるんだろう。キュウタロウがつくったオープンゲイトが新聞資本が専横する日本プロ野球に参入しようとしていた。だが、それを球界の長老たちは許さない。そして、露骨な嫌がらせをする。キュウタロウと双壁をなすベンチャー企業家を対抗馬として出し、その企業家にプロ野球への参入を許したのは誰にとっても明らかだ。キュウタロウは時代の寵児として、マスコミから脚光を浴びた。だが、それは出すぎた杭でもある。キュウタロウが日々更新する社長ブログには数千にも及ぶコメントが着くが、そのほとんどは彼を批判するものだった。

一方の成宮のブログはどうだったのだろうか。マスコミが腐敗していることは誰の眼にも明らかだし、それを記事にする成宮はマスコミに不満を持つネット者たちに受け入れられてもいいはず。だが、有名になった後の彼は次第にネット者から嫌われていく。その第一の理由は、彼がアクセス数を増やすためにトラックバックやコメントを大量に打ちまくったからだ。その数は常軌を逸しており、何かを表現したいという純朴な望みとは違う別の何かを彼が望んでいることを表現している。それを多くのネット者が理解するのにさして時間はかからなかった。

そして、彼のマスコミ批判は地方紙から中央紙を批判すること。そして、政府や権力を批判するというステレオタイプである。ときとして単純な批判構造が破綻しているところをコメントで指摘されても、彼は一切無視した。それは、批判以外のコメントに対して律儀に返礼の言葉を返すものだから、彼のブログを継続して閲覧しているネット者には、彼の雅量の狭さが手に取るように分かった。

ブログを始めて一年も経たない頃、成宮は勤めている地方紙を退職することを明らかにする。彼はその理由を明らかにしていなかったが、一連の行動から察するに、最初からトラバークを覚悟のうでブログを書き、そして有名になり、次のキャリアのための実績を稼ごうとしたのではないか。

そして、彼は上京し、こうして私の前にいる。

振り返ってみると、彼は自分が属する地方紙の内部告発をしたのか。といえばそんなことはない。彼は新聞の未来を憂いただけである。彼は、自分がいる地方誌とは遠いところにあるメジャー新聞・中央紙を批判しただけ。それがジャーナリストの仕事なのかと考えれば、放談の類。だが、それでも尚、現役記者が記事を書くことは稀有なことであり、それが朝永には少なからず評価されていたに違いない。だが、朝永にしても成宮のような現役記者が仕事と離れて記事を書くことを望んでいたのだろうか。

ある地方紙にマスコミ人たちから尊敬されている記者ブロガーがいた。国松である。彼は朝永と成宮とともに一冊の本を成している。彼は県警の不正を暴いたことで全国的な知名度を得ている。その活動で彼はいくつかの賞にも輝いていた。彼こそ、ジャーナリズムの真の実践者なのだろう。私は彼のブログに行ってみた。

すると彼も悩んでいる。彼は新聞社や放送局の社員記者が「糞蠅」であると罵倒する本に自らの良心を苛まれていた。

職業新聞記者を糞蠅と罵倒する筆者の論理は明快である。自分達は会社員という身分を保証されたところにおいて、どこかに取材していったとしても、そのような立場から発せられたものは読む人の心を打たない。たとえ組織の中にあつたとしても、組織の中で抵抗することは可能だ。それをせずして、社外の抵抗者・反抗者のインタビューの記事をしたためて自らのジレンマを解消させるのは卑怯である。自分の足元で戦えぬものは社外的にも戦えぬ。反戦に関する談話をとり、それを紙面に掲載しても、ほんとうに社会に何かを寄与したといえるのだろうか。国松の同僚記者たちは、「何もそこまで言われなくても」と不平をもらしたが、彼の魂に、糞蠅という言葉は深く刺さっていた。

この頃の国松は地方紙の特派員としてイギリスに出張中だった。ロンドンで取材をしている彼にとって、日本の動静はことのほか気になる。私が、彼のブログを訪れると、親しげなコメントの交流がはじまった。

「そんなにめげる必要はないでしょう」

市民記者の私が新聞賞をとった職業記者を励ますことも奇妙だが、成宮に言わせれば新聞社とはマスコミであり、その組織に属するものが、蠅と揶揄されても至極当然なことだ。

「僕はめげてないかいけないよ。ただ、だったらどうすればいいのか、そのことを考えているだけさ。いま会社の命令でロンドンにいるんだけど、それが僕には何かから逃れてここに来ている。そんな逃亡者のような感覚に陥っているんだ。日本にいたまま批判されていたら、こんな気持ちにはならなかったんだろうけどね」

イギリス滞在生活の中で、彼は日本語でブログを書き、ジャーナリズムやブログについて思索していく。

「インターネットの言論はフラットだ。という意見があるが、果たしてどうなんだろう。今までは既存メディアを中心に紡がれた『絶対的正義』の言論が主流だったが、インターネットがある今、かつての『絶対的正義』は相対化され、その権威は薄れ、フラット化していく。いや、そうではない。インターネットの登場とは無関係に、既存メディアを錦の御旗のごとく『絶対的正義』を振りかざし、自ら狂気的世界に陥っていった」

国松の日常がどういうものか、私は知らない。ただ、彼の中でインターネットはとても抽象的な何かであり、彼の知性を刺激する。私は、彼のブログにコメントを残した。

-----  
まず絶対的正義という語の定義が存在しないところから論を始めませんか。ネットが無限の地平だとしても、自らの絶対性を客観的に捉えることができぬなら、その無限の地平は自分の主観の限度で切り取られてしまう。

具体的にいえば、「殺人する人間は人間ではない」という文をトートロジー（純粹律）とすれば、殺人する人は人間ではなくなり、この世界の人間ではなくなるわけです。しかし、殺人した人間を人間ではないとして扱うことが許されるのかどうか。まずは、人として殺人者であるかを審議せねばならぬ。これは矛盾。結局のところ、絶対的正義などというものはどこにも成立しないんですよ。あなたも私も主観的正義にきりとられた島宇宙に住んでいることではないんですよ。

そして、もしフラットな言論の場が成立するとしても、それは、とって小さいコミュニティの中でのこと。つまり、新聞を購読しているとって小さいコミュニティ。

-----

国松は私のコメントに触発されて、新たにエントリーを上げた。それは、豆腐屋を営む生活人を描いた小説についてである。豆腐屋の主人は日々の生活に忙殺されブログを書くことなどできぬ。そのような生活者を置き去りにしたブログもまた、既存メディアのジャーナリズムと同じ轍を踏む。彼が指摘したかったのはデジタルデバインド(パソコンを使えない人たちに情報格差ができてしまうこと)の問題だろう。自省的になったジャーナリストが自らの立場を踏まえながらも、インターネットに反駁したい気持ちが私には感じられた。私は自分の心の棘が相手に突き刺さらぬように次のようにコメントした。

-----  
私のコメントにレスをいただきありがとうございます。私としては、国松さんがご立腹ではないかと心配し、反省していたところでした。仰っている豆腐屋さんの話は、鈴木大拙が言うところの妙好人に近いのかもしれませんね。

さて、絶対的善を振りかざす人も気持ちが悪いけれど、主観的善を持たない人というの、気持ちが悪いのではないかと考えています。マスコミの方々、いままで絶対善を錦の御旗にして言論をしていたのですが、インターネットでは、主観善を自らのエンジンとして行動しなければならないというのが現状だと思います。

そして、炎上に遭った多くの個は、自分の主観善でしかないものを絶対善と信じているから、自らの主観を軌道修正することができず、暴発するか引きこもる。そういうことが起きている。ならば、主観善を明確にすることと、主観善から自由になること。それが、ネット者に求められているのだと思います。主観善から自由になることは、主観善に無責任になることではない。そのあたりが、禅的な考えで極めて難しいのですが...

コメントするキッカケを頂戴したことを心より感謝いたします。

-----

私のコメントに呼応したのかは定かではないが、彼は高らかにブログについて総括する。そして、いつしか話題は実名・匿名論に入っていく。オープンゲイトの市民記者活動で一番苦しめられたのは、実名に関する事柄であり、それが市民記者を傷つけること以外、何も生んでいないことを私は理解していた。

-----

別エントリーでも指摘しましたが、実名の暗喩は信頼度の実現ではなく、問題発生時のトレーサビリティの確保のためです。実名を強いることは、腹を斬る覚悟がなければ発言をしてはならぬという、御殿様の論理です。わざわざここに書いているのは、実名が属性になったとしても、信頼度は変わらないことを指摘するためです。

属性をさらすことは、ステークホルダー(利害関係)を情報の受け手が知ることにより、読み取りの正確さを向上させるということです。匿名であれば雪印の社員は自分の会社の悪性を批判できる。だが、実名・属性を明かしたら、社会の悪性(事実)を批判することなどできない。ただし、文章の表面は手触りがよくなる。ただそれだけのことです。

私は、実名になることによって文章の見栄えがよくなるが、信頼度(事実度)は減ると考えます。文章の見栄えばかりを気にするメディア人たちが多いことを私は嘆いています。

-----

いくつかのエントリーにまたがりながら、私は彼のブログにコメントを続けていく。

-----

>ネットがあれば、多くの人が比較的自由に、手軽に情報は発信できる。

これが大きな誤解だということに、メディア者およびメディア出身者は気がつかない。これがエスタブリッシュたちの傲慢だと思う。何で日本のブログがヘタレているか理由が分かりませんか。その理由はステークホルダーでがんじがらめだから、切実な問題は書き込めないため。デジタルディバイドでも、国語力ディバイドでもなく、ステークホルダー(利害関係)ディバイドというものが存在するんですよ。ま、そんなことはメディア者にはどうでもいいことなのかもしれませんが、切実なことは書き込めない。映画にもなった「ダヴィンチコード」と同じことなんです...

-----

-----



たしかにネットで手に入れることのできる情報は、真実であるとは限りません。とはいえ、マスコミで提出情報も同じようなものです。たとえば、警察発表を 100%鵜呑みにしてマスコミは報道をする。警察に限らず、密室で行われたことは当事者しか分からない。だから、当事者たちが口裏を合わせて発言したものを、当事者以外の人間は、どこまでいっても真実であることもないことを確かめることはできない。今まで戦争当事国のエスタブリッシュたちの言説にマスコミは何度も騙されてきた。その類例は枚挙に暇がない。ならば、真実というテーゼの立て方そのものが空虚であるというのが私の考え方です。

人は神様ではないのだから、真実を確かめることはできない。そんなことは誰でもわかっているのに、真実を売ることを強られるメディアを日本人たちはつくってしまった。それが問題だと指摘しているのです。

たとえば、ロス疑惑の M さんは、自分の無実を主張していますし、裁判でも無罪になった。でも、M さんが殺人をしていないと思いますか。現在も含めて、世の中には、異なる個の主観の集合体でできあがっている。(同じものを見ても感想は違うのですから...)

結局のところ、客観的な真実などというありえないのに、真実を礎にして、既存のメディアたちが報道をしているところにすべての問題があると思っています。真実性をもってして、ブログよりもプロプレスの方がグレードが高いというのは浅薄な論理だと私は捉えています。

-----

私はいくつかのコメントを国松のブログに書き込んだが、ある時点を境に一切のコミュニケーションは終了した。

\*\*\*\*\*

アメリカでは、ジャーナリストが草の根ジャーナリズムを実践する。

\*\*\*\*\*

一月ほどたったある晩、銀座のパソコンメーカーのショールームで、アメリカの有名コラムニストであるダニー・ギリガンの出版記念イベントがあった。イベントの司会は朝永である。ギリガンはブロガーとして全米でも著名。彼は自分のブログで市民記者を養成して、インターネット市民新聞をやっていた。彼はグラスルーツ・ジャーナリズムを提唱し、実践していたがグラスルーツとは草の根のことだろう。おしゃれなパソコンメーカーのショールームには、百人ほどの人が集まったのだろうか。彼の訳出された本のタイトルは、「市民ジャーナリズムが世界を変える」というもの。アメリカ在住歴が長い朝永が進行役兼通訳。ギリガンの紹介と短いスピーチが二十分ほどで終わると、一般参加者との質疑応

答になった。

「個人ジャーナリズムの登場によって、既存のジャーナリズムはどのように変わるのでしょうか？」

朝永のブログの常連であるブロガーがギリガンに尋ねる。

「変わるだって？ それまでいまのジャーナリズムが生き残っているかどうかも分からないさ」

朝永は既存のジャーナリズムのことをレガシーメディアと翻訳する。レガシーとは時代遅れのとの意味だろうが、そういう言葉を選択する朝永の立場は明らかだ。

「アメリカでは新聞はすでに終わってしまったのですか？」

ギリガンはかつて新聞社に勤務していた。彼が退社したことは、彼が新聞というメディアを見限ったと判断されても仕方ない。

「いやあ、別にボクは新聞が終わってしまったとは言っていない。ただ、新聞というビジネスモデルがどうだったのか。それが問われる時期が来ていると思うんだ」

「というത്？」

「新聞が発信する情報がすべてじゃなくなったということさ。新聞もインターネット上の個人ジャーナリストも等しく存在する。それがこれからの時代じゃないかな」

「でも、ネットの中にいるジャーナリストは、新聞と肩を並べられるような品質を持っているんですかね」

「たしかに私のブログでも、かつてアラシがあった。だから、いまはアドレスを打ち込まないとコメントができないようにした。つまり、アドレスで所在が分かり、本名で発信する。そういうジャーナリストとして基本的なことを踏まえる習慣ができれば、ネットの中のジャーナリズムだからといって記事の質が低いことを必ずしも意味しない。ボクはいま、ネット上で市民記者に記事の書き方を教えている。インタビューの仕方、記事の書き方など、市民記者の質問に答えながら具体的にコーチをしているんだ。その結果、市民記事の品質はだんだん向上してきていると思うよ」

客席の最前列にいる私だったが、五メートルと離れていないところにいるギリガンの姿がとても遠くに感じられた。アメリカ人にとってブログとは、否、彼が思い描く市民記者の姿は私にとって異様に映った。オープンゲイトの市民記者講習会でもジャパンインターネット市民新聞でも理想とされていたのは当事者発信である。ジャーナリズムでは自分が取材したことを一次情報。人から聞いたことを二次情報。メディアで得た情報を三次情報という。それからいえば、自分が体験したことは0次情報といえる。日本は日記の文化があるというが、自分や自分の周りのことを記す。それが日本の伝統だ。だが、ギリガンはその市民記者養成カリキュラムにおいて、インタビューの仕方を講習する。アメリカ人には0次情報という概念はないのかもしれない。

「ただひとつ、問題があって、皆さんもご存知のようにアメリカは訴訟社会なんだ。私が市民記者の記事に手を加えると私にもその記事に関する共同責任が発生する。だから、残

念ながら私は市民記者の記事を編集することができないんだ」

私は客席で落胆していた。たしかにオープンゲイトの市民記者も記事の責任を負わされていた。だが、ギリガンほど明確に、自分と市民記者の間に一線を引くことはなかった。市民記者が責任を取ることが明文化されているとはいえ、編集部はできる範囲で記事の裏を取り、文章を整えるためのアドバイスをしたり、加筆・訂正もした。だが、ギリガンはその一切をしない。それで草の根ジャーナリズムの主宰者などと偉そうに語るのだろうか。

「ブログは書き込みの内容の信頼性は一切保証されない。だけど、草の根ジャーナリズムはブログとは違う。一定の信頼性を持って受け入れられる」

朝永は、会場に語りかける。

「この中で、日本でも市民参加型ジャーナリズムが実現すると思いますか？」

会場で手を上げたのは2割程度だろうか。

「じゃ、ブログをやっている人は？」

こちらも、手を上げたのは、殆ど変わらない人数。

「そうですか。じゃ、身辺雑記のような広い意味でジャーナリズムが日本で成立している人は？」

するとようやく半数以上の方が手を上げた。

「やっぱり、キュウタロウの市民インターネット新聞が影響しているのかな。ジャーナリズムっていう定義が難しいし、少し硬い苦しかったかな。...どうですか、スポンタさん」

朝永は客席の私を見つけて振ってきた。会場係が私にマイクを手渡す。私が自らを名乗ると、会場からざわめきだ起きた。

「オープンゲイトで市民記者をやっているスポンタさんです。いや、やっていた。と、過去形で言うべきですかね。スポンタさん、何かギリガンさんに聞きたいことがありますか？」

「いままでギリガンさんの話を聞いていたのですが、なんとも頂けない議論ばかりで...」

「どういうこと？」

「まず、記事の品質ってどういうことなのでしょうね。文法的に間違いがなければそれでいいんですか。確かに既存のメディアは整った文章を綴っている。でも、それが記事の本質なんでしょうか。市民記者の記事ってというのは、そんな手触りのいいものじゃなくて、ゴツゴツしているけど魅力がある。そういうものじゃないですか。ギリガンさんは裁判を恐れているようだけど、そんな気分じゃ何時まで経っても、市民記者が真実を提出するなんてことは起こらない」

「これは手厳しいね」

「だってそうでしょう。人間ってというのは本当のことを言われた時こそ本気で怒る。だから、誹謗中傷などで裁判になっているのは、ほとんどが真実を指摘されたことを捻じ曲げようとしたもの。勿論、マスコミが部数を稼ぐために過激な事実を捏造した例もないわけじゃない。だけど、名誉毀損や誹謗中傷の裁判のほとんどはそうでしょう」

「ギリガンさん。どうですか?」

「なかなか厳しいことをいうねえ。しかし、真実というのはどこかにあるものだし、それを追求しなくなったら、ジャーナリズムなんてものは成立しないよ」

「人間は全能の神ではないんだから、真実なんて分かるはずないでしょう。アメリカのマスコミは知らないけど、日本の新聞は何度も捏造記事を出して批判されている。プロのジャーナリストに真実を語る資格なんかないんですよ」

私の剣幕に朝永が割って入る。

「ギリガンさん。最近、日本ではメディアリテラシーということがよく言われるんですよ。いままで読者はメディアの情報をそのまま信じていた。でも、これからの読者はメディアが与えてくれる情報を吟味して受け取らなければならない。そういうことがよく言われるわけです」

「そうですか。私はアメリカでブログの活動もやっているけど、まさにそういうことですね。ダン・ラザーの件もありますしね」

「ダン・ラザーですか。あれは象徴的でしたね。まさにあれはブロガーが3大ネットワークのひとつに勝利した金字塔ですね」

ダン・ラザーはアメリカ3大ネットワークのひとつ CBS の報道番組のアンカーマンだった。その番組では大統領の兵役逃れを告発するための資料としてある文書を紹介した。だが、それがブロガーたちの指摘によって捏造記事であることが暴露された。

ことの次第はこうだ。大統領が兵役逃れをしたかもしれないのは三十年以上前である。そのときのタイプライターで打たれた文書が番組で紹介されたのだが、これがマイクロソフト・ワードで打った文章だというのだ。実際に使われていたのは、タイムズローマンというフォントだという。このフォントは極めて一般的なものだが、プロポーショナルフォントが使われていたという。プロポーショナルフォントでは、文字によって字幅が異なる。だから、i と w では字幅では明確に異なる。これは印刷では当然のことだが、昔のタイプライターではそのような処理はできなかった。大統領が兵役逃れをしたのかどうかはともかく、少なくとも資料は捏造であることは明らかだった。否、資料が捏造であることを根拠に、大統領が兵役逃れをした事実はないというふうにし論は流れていく。

そして、テレビジャーナリズムの一つの大看板であったダン・ラザーは看板番組を降板させられるのである。この事件が日本であまり報道されていない。それはダンラザーの捏造記事をそのままオンエアした日本の放送局があったからかもしれぬ。

「ウォーターゲートをもじって、あの事件をラザーゲートと呼ぶ人もいるが、あの事件がブロガーたちの地位を向上させたといえるでしょう」

ギリガンは誇らしげにブロガーたちの勝利を語る。だが、それが彼が育成している草根ジャーナリズムの成果なのかといえば疑わしい。それはほとんど推理小説マニアの興味の結果であり、ジャーナリズムとは関係ないブロガーたちがなしとけたものでしかない。そういえば、同じようなことが、日本でも起こった。キュウタロウが政治家に資金提供を

したとされるメールに関するものである。あのとき検証の舞台はあなざあチャンネルだった。ブログでも考察が行なわれたのだろうが、それが一つの意見にまとまっていくことはない。結局のところ、マスコミ各社はあなざあチャンネルの意見の集約をたどって最終的にメールが偽者と判断する。そして、その判断を与党も、国会も追随した。

朝永はギリガンに語りかける。

「ブログジャーナリズムの将来は明るいんでしょうか。CBS の名物キャスターに打ち勝つようなパワーを持っているんだから、言うまでもないのでしょうか...」

「さあ、それはなんとも言えません。私が感じているのは、発行部数や閲覧数でそのメディアやブログの価値が決まるのではないということ。読者が多いから繁栄しているメディア。閲覧者が少ないから寂れているブログ。新聞を広告ビジネスとしては見ればそういうことになるのかもしれないけど、これからもそういう価値観で行くのかといえはなはだ疑問。インターネットは流し見する人が多いから、どんなに閲覧者がたくさんいても、彼らが本当に読んでいるかは分からない。そして、閑散としたブログであっても、コアな人達が集まって真剣に読んでいるなら、それは社会的な影響力があるんじゃないかな。まだまだブログよりも雑誌のほうが社会的影響力がある。それが現実じゃないかな」

「それはなんとも勇気付けられますね」朝永は続けた。「私たちマスコミは、広告モデルによって成立している。だから、無報酬で書く人たちが世の中に溢れてもらっては困るわけです。そして、ブログにくっついた広告の方が新聞広告より稼ぐようなことでは、給料も支払われなくなる。でも、ギリガンさんのおっしゃることを聞いていると、なんとなく安心する。マスコミは発行部数を誇ることもけっして悪いことじゃない」

「ただね...」ギリガンは朝永の言葉を遮る。「私は私のブログの記事に賛同してくれたり、評価してくれる人たちからのコメントよりも、間違っていると批判したり、反駁するコメントを受けたときに、より多くを学んできました。そういうことをいままでのマスコミは出来たのでしょうか」

ギリガンの言葉は私の言葉に突き刺さった。この言葉は藤堂からも、朝永からも、成宮からも得られなかったもの。日本のジャーナリストたちの多くは自分たちの非を認めようとしない。そして、ダン・ラザーのように責任をとって退場することもない。

出版記念イベントは一時間ほどで終了した。ギリガンの周りを出版関係者が取り巻いている。その輪の中に朝永も成宮もいた。私は彼らと歓談する気力もなく、そそくさとその場を離れた。

\*\*\*\*\*

イツ・スモール・ワールド

\*\*\*\*\*

オープンゲイトの市民参加型ジャーナリズムに加わって、半年と立たぬ間にさまざまなことが起きた。だが、それが何が起きたのかのかといえ、何も変わっていない。私はフリーランスの映像ディレクターのままだったから、プロモーションビデオや教育ビデオの仕事をこなしている。インターネットの世界は、リアルな世界の私に何も生み出さなかったし、そのことが私を落胆させもしたが、それは安心させてもいる。

だが、ひとつだけ言えることは、世の中が少し小さく思えてきたことである。そういえば、こんなことがあった。

SNS というのは、ソーシャルネットワークサービスというもので、日本ではミキシーが知られている。同様のサービスでグーグルがつくったものに、オーカットがある。「インターネットで発信することは、世界に発信すること」。そう IBM のコマーシャルはそう言っているなら、世界とコミュニケーションをしてみようと思った。そして、オーカットに登録をした。オーカットは英語のサイトであり、そこでの共通語は英語である。

私は自分のプロフィールを乗せ、ネット上の友人をつくろうと努力した。友人が出来る、相手のプロフィールの写真が自分の友人リストに加わっていく。コミュニケーションのやり取りが多い友人はセンターに、そうでない人は周辺にという具合に提示される。出来上がったリストはまるでハーレムのように、なんともいえぬ達成感があった。

「私の彼氏がバイクに乗っているんだけど、名前をつけたいの。日本語でかっこいい名前はないかしら」

シカゴに住んでいる女子大生は、そんな質問を掲示していた。

「彼氏が乗っているバイクは何かな。カタナっていうのか。それは、英語でいうとソードという意味だね。バイクの名前だったら、侍の名前なんかがいいんじゃないかな。ムサシとか、コジロウとか、日本の侍としては有名だよ。もし、君が乗るんだったら、日本のジャンヌ・ダルクと呼ばれている巴御前というのもいいかもね」

オーカットのコミュニティーには、さまざまなものがあり、日本の文化に関するものも多い。日本の観光スポットに関するものは勿論、アニメやJポップなどの熱狂度は高い。私はそこで、オランダ人女性・チェリッサと知り合う。

「宮崎駿の最新作の評判どうなのかしら？」

ハローキティーでブログを飾っている彼女は宮崎アニメのファンでもある。

「今度のはあまり期待できそうにないな。もっとも、絵がきれいなことは確かだけど、ストーリーは疑問だな」

「私、浅野忠信の映画を見たわ。彼って素敵よね」

日本にいる私よりも、彼女の方が日本映画を見ている。オーカットで文通のようなことをして、2週間ほど経った頃だろうか、彼女が日本に旅行に来るといふ。そして、東京で会いましょうと誘ってくる。なんとも面白い展開だ。いままでまったく見ず知らずな、そ

れも地球の反対側の人間同士がネットで突然知り合う。そして、実際に逢ってしまう。私は、彼女を我家に招待する。

夕方の二子玉川の改札で私と小学校5年の娘はどきどきしながら彼女を待った。

「お父さん。何でこんなことをしなくちゃいけないの」

英語を喋ることができない娘は不安らしくふくれっ面だ。娘には父親の行動が理解できない。それももっともな話である。私は英語を流暢に話せるわけではない。オーカットで英語でコミュニケーションをしたにはしたが、会話は長島茂雄と大差ない。だが、そのような語学力でもコミュニケーションはできる。そして、何よりも「世界は小さい」。それを娘に伝えようとしていた。もっとも、母親が赤ん坊を抱いていると夜道も安心に感じられるのと同じ。犬を連れた散歩するのと同じ気持ちだったかもしれぬ。

文句を言う娘を制しながら、改札口に向かっている私に、チェリッサは満面の笑みで現れた。見知らぬ男性と会うことを危険と思ったのだろうか、彼女には旅行を共にしてきた彼氏が付き添っていた。簡単な挨拶をすませた私は、二人を車に載せて我家に向かった。

「日本では何が面白かったの？」

「関西空港についたんだけど、最初にビックリしたのは自動ドアかな。あと、自動販売機が喋ることも」

「そっか。ヨーロッパじゃ道端に自販機なんてないもんなあ…」

「タクシーのドアも自動。でも、ヨーグルトが甘い。パンが柔らかすぎる。チーズが美味しくない。焼きそばパンは最悪だったわ」

彼女とは初対面。一ヶ月前はお互い知らない同士。でも、彼女には日本の文化や生活について興味がある。拙い英語しか話せぬ私だったが、コミュニケーションに不自由はない。

駅からの道すがら、右側の方向にはゴジラを作ったスタジオがあり、黒澤明監督が暮らしていた成城という街があることを教えた。私がウルトラマンをつくっているプロダクションで仕事をしていることを伝え、彼女は驚いてみせた。

我家に招き入れると、妻がちゃんこ鍋の用意をしていた。チェリッサと妻は、カレー Spoon をふたつ、くりくりしながら鳥の肉団子をつくっている。妻は私よりも英語力があり、初対面でもすでに馴染んでいる。オランダ人にとって英語は母国語のひとつなのだろう。さらにいえば、料理を作るという作業は言葉にも増してコミュニケーションツールなのかもしれない。

私はチェリッサの彼氏に電子ギターを披露する。このギターは指盤もスイッチになっている。このギターを使えばコードを憶えなくても演奏ができる。私は、ダウン症の青年にこのギターを使ってもらおうと、手に入れたという経緯がある。男性は音楽や楽器、テクノロジーで交流し、女性は料理で友好を深める。豪華さや華麗さはないが、草の根の国際交流がそこにある。そして、できあがったちゃんこ鍋を日本とオランダの五人が囲んでの晩御飯が始まる。なんとも微笑ましい風景である。娘はまだ英語を習っていないので理解

できないが、大人たちの会話の輪の中で和んでいる。

「お嬢さんは何になりたいの？」

「幼稚園に通っている頃、娘はカメラマンになりたいと言っていた。いまはどう思っているか分からないけどね」

「カメラマン？」

チェリッサと彼氏はお互いの顔を見合わせた。英語でカメラマンというのは、映画の撮影監督のことを言う。小学生が映画のカメラマンになりたいというのは珍しい。日本で言うところのカメラマンは英語ではフォトグラファーというのだ。私は、ビットリオ・ストラローロやネストール・アルメンドロスといった世界的に有名撮影監督の名前を出して、彼女がやりたいのは撮影監督ではなく、写真家であることを説明した。

「娘には世の中にあるものをなぞる人ではなく、自分で表現する人になって欲しいんだ」

一流の写真家が芸術家であり表現者であることは自明である。だが、表現する自由を得た写真家がどれほど存在するのかといえばごくわずかだろう。写真家の多くは広告主の意のままに動かざるをえない。

「親が子どもに意見を押しつけるのは良くないわ」

折り鶴に取り組んでいる彼女は事も無げに言う。たしかに彼女の言うとおりである。親と子の関係の理想はオランダも日本も同じなのだ。娘は彼女と打ち解け、帰り際に自分が大事にしていたキティーちゃんのぬいぐるみを彼女にプレゼントした。彼女にハグされてにこにこしている娘の写真がいまも残っている。

かたことの英語だったから、コミュニケーションも万全ではなかったが、素晴らしいひとりが過ごせたのではないか。最初、不安げにしていたチェリッサの彼氏もシャイな笑顔を見せながら、楽しんでいることを表現してくれた。インターネットは世界を繋ぐ。こんな素晴らしいものはない。

ただし、チェリッサのような勇気があれば…。それがなかなか難しい。

\*\*\*\*\*

## 有名人ブログ

\*\*\*\*\*

2006年は芸能人・有名人のブログブームだったといえるだろう。だが、その中で、ファンよりも自分の友達を大切にすると書いた吉本芸人はバッシングに遭った。

こんな例もある。自分が元在籍した放送局の若手社員が痴漢行為で逮捕されるにおよび、「若い社員が盗撮した件で、やってしまった行為を擁護するわけではないのだけど、おばさんは思う。そういうパンツを見せる女子こそ、迷惑防止条例を理由に検挙してほしいもんだ」などと書いた。そのブログのコメント欄には数千件の批判コメントが書き込まれる。



そして、ブログを閉じたら閉じたで批判は燃え盛り、あなざあチャンネルでのバッシングの劫火はつきない。そして、彼女は、「もう勘弁してください」とブログに書き込んでブログを再開する。どんなことがあっても書き込んだことを削除してはいけない。それがインターネットの暗黙のルールだ。

芸能人・有名人のブログがバッシング・炎上する例は枚挙に暇がない。私は逐一あなざあチャンネルのまとめサイトでその情報を知り、火事場見学よろしく眺めに行く。

テレビ局が過度にショウアップしたと社会的批判が起きた若手ボクサーの試合を擁護した冬季オリンピックの女性選手もバッシングされたし、福祉関係の有名人が天皇制に関する不用意な発言をしてバッシングにあってもいた。そんなマイナス面はあったが、芸能人・有名人たちにとって、ブログは普段出会うことのできない読者や視聴者との交流の場だったことは確か。そんな貴重な場でのコミュニケーションをもとに短編小説を集め単行本にしようとする女流小説家が現れた。坂本千夏である。

彼女は小説を多作するとともに週刊誌のコラムニストであり、テレビでもコメンテーターを務めていた。そんな有名人の彼女にブログをやって欲しいというオファーがあるのは当然で、芸能人ブログをスタートする。彼女は創作の周辺にあることごとをブログに書くと共に、読者との交流をはじめた。

キュウタロウの社長ブログが話題になって、ブログの普及が加速したのだが、そのブログの欠点は、何千というコメントがつくことである。何千というコメントに恐れをなすのが炎上ということかもしれない。ただ、その8割方は批判や中傷のものであっても、2割、いや、すくなくとも数パーセントは真実の意見や誠実なコメントが含まれている。だがほとんどのブロガーたちは見ず知らずの人達を怖がり、ビジネスにも影響しかねないと、ブログを閉鎖する。そのようなことがいくつも続くと、有名人ブログのほとんどはコメント欄を閉鎖する。すると、トラックバックだけが、読者との交流の場となる。トラックバックとはブログの本体にはリンクがつくだけ。これなら、たとえ批判が起きたとしても影響は最小限。一言で罵倒できるコメント欄と違って、トラックバックをするためには、自分のブログがあって、一定量の記事を書かなければならない。その分、批判も理性的になることが期待できる。女流小説家は丁寧にトラックバック先を読み、記事にその感想を書いた。結果、トラックバックの集まりという形でも、彼女の周りにコミュニティーがひとつのできあがった。

コミュニティーの存在を確信した彼女は、「配達されないラブレター」という本の企画を提案する。配達されないラブレターは、愛に関する千二百字ほどの掌編小説を集めた。千夏のブログの読者たちは、彼女に読まれることを目標に掌編小説を書いた。男女の愛、親子の愛、夫婦の愛…。またたく間に二百件ほどの小説が集まる。小説家はその企画を出版社に持ち込み、単行本として発行された。朝永に「ハチ公になって欲しい」と言った私である。トラックバックという形であっても、見ず知らずの人達が集まって意見を書く。形が小説であっても、意味的には市民記者活動と根本的には同じことだ。私は彼女の活動に

注目した。だが、本のタイトルからいえば、恋愛をテーマにした文章が求められていると思い、私は応募することはためらった。

企画が締め切られ、単行本に納められる作品が決定し、編集作業がすすみ、本は出版された。そして、ゴールデンウィークも終わった日曜日。都内のあるスペースで出版記念のオフ会が開催されるという。私は、オフ会に参加する主旨のメールに次のように書いている。

「千夏さんたちのグループのお仲間かどうかは分かりませんが、楽しみにしています」と書いた。それはトラックバックという少しさめた気分のコミュニケーションだったこと。そして、出版に直接的に関わってもいない私の心情を表してもいる。

会場で私のとなりに隣に座った若い女性は茜と名乗った。彼女は出会うそうそう初対面の私に「私は今日はアウェイの気分なの」と、言っていたが、私の心のうちもそのようなものである。

「あなたの文章が採用されたんですか？」

「どうかしらね...」

彼女ははぐらかした。フラメンコのレッスンに通う彼女のブログは真っ赤な薔薇を壁紙にしている。彼女の気分とは対照的に、彼女のワンピースは薔薇の花が輝いている。後日私は「配達されないラブレター」を購入し、彼女が書いたと思われる文章を読んだ。

短い文章だったが、そこには彼女の若さゆえの傲慢さと欲望と情熱と挫折のすべてが託されていた。私があの記事を書きましたなどと真顔で言えるような作品ではない。だが、だからこそ詩篇としての価値を持っていた。

百人以上の人たちが集まっていたと思う。小上がりのような場所には、照明がガンと当たり、常設のテレビカメラがその小上がりの大テーブルに座っている人たちを映している。テーブルには、千夏を中心に文壇関係者が座っている。

千夏は「私は女村上龍って言われてデビューしたんだよ」と言いながら、有名作家たちとの交流や銀座での出来事を披露する。

私はアウェーの気持ちだから、千夏がいるステージから遠い、止まり木のような場所に陣取っていた。ステージの照明に比して会場は暗く、全国から集まってきたブロガーたちの顔は見えない。文壇交遊座談会が1時間以上つづいただろうか。ようやく今回の本が話題になった。

「みんな今日はここに来てくれてありがとね。ねえ、ここにブロガーの人達ってどれくらいいるのかな？」

暗闇の住人たちはおずおずと手を上げる。その数は来場者の半分以上。彼女のブログのファンはブロガーでもある。そして、その何割かのブロガーの文章は彼女によって活字になった。

「ねえ、誰かここに出てきて仕切ってくれないかなあ」

私はようやく、坂本千夏のブログのオフ会にふさわしい展開になるのかと期待した。

「あなたがノッポおじさんですか？」

「はい。私が薔薇の君です」

それぞれがハンドルネームを明かしながら感嘆に耽る。実名など知らないが、お互いがどういう人間かどうかが分かっている。中には、ハンドルネームと自分のアバター(似顔絵)にフリーアドレスを書いた名刺を交換する人もいる。

だが、ブロガーたちは暗闇の住人であり、ステージにいるのは有名芸能人である。彼らが気後れしてスポットライトの中の住人にならなかったのは理解できる。小説家はそれだけで話題を切り上げ、旧知の飲み仲間をステージに上げ、イベントを進行していった。

「みんな。ブログにやばい話を書くなよな」

「いやぁ、僕もはてなダイアリーであることないことを書かれちゃってね」

舞台上の同業者も、インターネットでのバッシングを危惧する発言をする。彼らの思考は、一般ブロガーたちの発想とはまったく異なっている。ここに集まった多くのブロガーはバッシングされるような注目をインターネットで浴びていない。そのことがステージにいる女流小説家と暗い客席にいる無名のブロガーたちを大きく隔てていた。

私のオフ会幻想は一瞬のうちに打ちのめされ、いつしか文壇交遊座談会に戻っていった。イベントが始まってすでに1時間は過ぎている。そして、文壇交遊座談会は続いている。

私の隣に一人の男・弘田が遅れてやってきた。彼はコンピュータグラフィックのデザイナーだった。出版記念オフ会とはあまりに異なる進行に呆れていた私は彼に話しかける。

「梅田持夫さんが書いた「ウェブ進化論」という本を読みましたか。そこでは、これからは、普通の人々が単なる情報の受け手だけでなく、情報の作り手にもなると書いてある。今回、千夏さんがつくった本は、そういう意味でとても意味があるんだけど、じゃぁ、現実はどうなのか。といえば、どうなのかな」

弘田と私は遠いステージにいる千夏を見やっている。

「いま、ステージにいる人たちはエスタブリッシュ、権威の側にいる人たちで、暗い会場でステージを見つめている私たちは非エスタブリッシュ、権力も何も無い無名人なんですよ。このイベントはそれを象徴的に現しているんじゃないかな」

私は、ブログはステージであり、コメント欄は観客の最前列だ。と、すでに書いている。千夏のブログにはコメント欄がないから、構造はすこし違っているとしても…。目のステージで陽気にはしゃぐ千夏を批判するつもりはない。だが、本に原稿を書いてここに集まっているブロガーたちの心を思うと、とても切ない思いになる。自分の書いた文章が活字になり、出版されるということが一般の生活者にとって、どんなに素晴らしい出来事なのか。文壇にデビューしてテレビにひっぱり螭の千夏にはそれが理解できぬ。彼女にも世の中に出ようともがいていた時期があったはずで、昔のことを忘れてしまったのだろうか。私はブログで起きていることを、リアルな世界にひっぱり出そうとしている。そして、ブログで起きていることを論評することで、あたらしい時代が生まれ出せるとの期待を持っている。

イベントがスタートして、2時間ほど経った頃だろうか。花束とプレゼントを持った女性がステージにいる千夏に駆け寄った。新幹線の終電の時間が近づいていて、もうこの場所を離れなければならない。そこで、本にサインを求めるとともにプレゼントをし、千夏と記念写真のフレームの中におさまった。

会場の空気の流れが少し動いた。私の隣に座っていた茜も、とうとういたたまれなくなり、出版された本を持っていて千夏にサインをして欲しいという。私は、彼女の背中を押し、カメラマンをかって出て、千夏と茜のツーショット写真を撮影する。そして、彼女をステージに置き去りにする。今日はアウェーの気分なのといった茜がステージに座り千夏と歓談している。弘田と千夏のツーショット写真も私が撮影する。その勢いを借りて彼は、「私はネット上で知り合ったブロガーたちに会いたい」と言って、暗い観客席の中を徘徊した。自らのハンドルネームを告げることによって、彼は会いたい人に出会えたようだ。

後日、私は「配達されないラブレター」に掲載された彼の文章を読んだ。弘田は三十年近く前の大学時代の恋人への思いを語っている。否、恋人と呼べるような関係でもない。それは、プラトニックラブにもならぬような、端からみればただの顔見知りというような関係だった。そんな変哲もない日常を彼だけは恋だと思いながら、妙な贖罪感をひきずりながら生きてきた彼の三十年が短い文章に描かれている。誰にも告げることのできなかった心の秘密を共有しているブロガーたちに、彼が会いたいと思ったのは自然なことだろう。

イベントの終了予定時間が九時半。すでに終了時間を三十分越えた十時。私は会場を後にした。だが、その時点でも執筆したブロガーたちが書いた文章とともに紹介されることも、ブロガー同士がお互いを知り合い交流することはなかった。

私の隣に座った茜と弘田は私が強引にステージに押し出すことにより、会いたい人と出会え、貴重な時を過ごすことができた。だが、事実上の本の執筆者たちが、出版記念パーティーに相応しいかたちで遇されるということなかった。

帰り際、私は入り口で出版社の編集者の女性と立ち話をした。

「これじゃ、いくら何でも原稿を書いたブロガーたちに失礼じゃないですか。原稿料は赤十字に寄付されるのはいいとしても...」

素直に不満を露にした私に、若い編集者は言い訳をした。

「本を出してそれでおしまい。それでもよかったです、千夏さんのご好意で急遽こういうイベントをすることにしたんです...」

彼女の言うことはもっとも。でも、こんなイベントをしなければ、ブロガーたちはかくも強烈に自分たちが所詮一般人に過ぎないことを思い知らされることはなかった。私はそのときの出来事を私の思いも含めて素直に書いたブログに書いている。そして、千夏のブログにもトラックバックをしている。

-----

会場を後にするとき、私のいた止まり木の前に座っていた学生か社会人なりたてといっ

たふたりの男性の姿が眼に入った。知り合いではなかったのだろう。同じテーブルで接していても、ふたりは4時間近く一言も語らず、スタートのワンドリンクだけで、会場の片隅で座っていた。

彼らはこの本に原稿を書いたのだろうか。ステージの盛り上がりとはまったく無縁だった彼らが心の中でどんなやりとりをしながら、4時間近くを費やしたのだろうか。そんな彼らに、私は表現の場を求めている20代の自分を思い出した。その頃の鬱屈した気持ちを思い出すと、怖くて声をかけることができなかった。それは、表現する場を得た千夏氏の至福と正反対の世界に触れることになるからだ。表現をする側にいることと鑑賞する側にいることは、必ずしも、スポットライトがあたる場所にいることと観客の群集にまぎれることを要請しない。それを実現するのがブログだと思っていた。だが、それはなかなか難しく、このようなイベントが続けられていくと、それが不可能だと世の中が信じてしまう。私は、それが間違いであることを今後も指摘つづける…。

心優しきブロガーたちは、自分たちの不満をネット上で明かすことはないだろう。自分がステージにいて、「誰もしゃべってくれないよ」と客席に向かって嘆くことだけで、ステージと観客席の間を埋める努力を終了した千夏氏の怠慢を私は悲しく思う。そんな無礼・非礼なことをされても、ブロガーたちは決して不満をもらさない。それはブロガーたちの最新のエントリーでも感じるができる。「お先に失礼します」「ちょっと雰囲気違ったんだよね」。それがあべき日本人の良識であり、日本人のやさしさである。やさしさに騙されてはいけない。批判や対立にさらされることによって、それぞれが自分自身を見つけることができるのである。

-----  
「おい、スポンタ」。千夏は自分のブログで私を名指しで批判してきた。当日参加したブロガーたちも、私に彼女に謝罪文を書けと要求する人達がいる。

ネット上で私と千夏のバトルは話題になり、私のブログの一日のアクセス数は三千件を越える。一気に三倍以上に跳ね上がったのである。そして、当然のように、あなざあチャンネルにスレッドが立つ。私は誤解を避けるために次のようなエントリーをブログに書いた。

-----  
千夏さんに名指しで怒鳴っていただいたようです。この場を借りて、ご立腹されるに至ったエントリーを書きましたことをお詫びもうしあげます。今日、「配達されないラブレター」の本を読んで、私も妻を目頭を熱くしています。その感情が一昨日にあれば、どうなっていたのでしょうか。私には検討がつきません。そして、その場合こそ、私にもっと批判が集まっていたと確信しています。

そして、千夏さんに怒鳴られてみると、その怒鳴りの源泉となった自己肯定感が、私には

気になりました。私は、ブログにおいて、自分の自己肯定感が読者の批判にもっともさらされるのだと自戒しているので、最終的にそういうものをチェックし削除します。しかし、彼女は、リアルなところの住人であるためか、そのキャラクターか、性別のためか、そういうものが許容されているようですね。得な性分ですね。

私は改めて、書きます。

ブロガーたちの文章を載せた「配達されないラブレター」は素晴らしい本。

「配達されないラブレター」のような本はかつてなかった。この企画は素晴らしい。

「配達されないラブレター」に原稿を寄せた無名のブロガーたちは心優しい日本人たちである。

-----

だが、私がそのようなブログ記事を書いても、千夏の怒りは収まらない。彼女の感情に促されて、さまざまなバッシングのコメントが私のブログのコメント欄を踊った。

「あなたは自分だけ特殊な人間だと思っているのですか。あなたは、「たくさんの人達が特殊な存在にならずに、ものを語るようになる時代が早く来ることを願っている」なんて書いてるけど、たぶん、もうそうなってるから。願わなくて大丈夫だと思う。そう思っているあなたこそ、選民意識があって傲慢だわ。「エスタブリッシュと非エスタブリッシュの間の間は深い」なんていうけど、そんなの深くない。非がつくつかつかないだけ。それだけで、あなたはエスタブリッシュになりたくて、そのための力を貸して欲しいって願っているの？」

「あなたの言っていることは意味不明。認めてほしいってことですか??？」

「貴方の言っている言葉には、申し訳ないという気持ちが感じられませんよ。相手に自分の気持ちを伝えられなかった事で誤解を生んでしまった事に対する謝罪よりも、『相手が自分の考えを理解する事が出来なかったのか。』という風な感情の方が強いんじゃないんですか？ よく居るよね。説明が下手な人。相手の立場に立って、一人でも多くの人に理解して貰うために言葉遣いだったり、表現だったり分かりやすいようにしていかないといけないのにわざと限られた人にしか伝わらない様な説明をし続ける人。それで自己満足してるんじゃないですか？ 自慰行為してるんじゃないんですか？ だからうんこもらすんだよ。うんこ漏らす奴はこれだから大好きだよ」

「え！！ あなたって有名人だったんですか?? 止まり木あたりじゃ、なんのオーラも感じませんでしたけど！！ あ。うんこしたい。」

こういう場合何が起きるかといえば、そこで何が起きたか。ではなく、私が何を書いたか。である。そして、オフ会に参加して、私と同じ心境になったはずの人でさえ、私を批判するコメントを残していく。彼女の文壇仲間のコラムニストは次のように書いてきた。

スポンタさま

会場にいた千夏の友人です。あなたのブログによれば、私はあなたの数メートル先に座っていたことになりすね。

あなたは「やさしさに騙されてはいけない。批判や対立にさらされることによって、それぞれが自分自身を見つけることができる」と書いて千夏を批判しているようです。でも、それは、客席にいるブロガーの人達に向けられてもいい言葉だったんじゃないですか。そして、あなたは暗闇の側にいてスポットライトの下にいる人間を強烈に批判する。その状態に甘んじていたのは、他にもないあなた。千夏がそんなシャイな人達を喜ばせるイベントを企画することは実は簡単なことだったのかもしれない。でも、そういう企画をすること自体、会場に集まった人達を下に見ることになるのではないですか。

淋しく孤独な思いをした人ほど、ある強度を持った優れた表現をするもの。千夏もその一人だったけど、彼女は自らの知恵と勇気で道をきりひらいてきた。彼女には、マイクを受け取ってくれと呼びかけても反応できないような、シャイすぎる皆さんの気持ちはよくわからないかもしれない。でも、あなたの理想とする世界も、そんな「優しさ」の周辺には絶対に生まれない。

あなたは、ほんとうは、そのことをご存知なのではないですか？

-----

私は繰り返し次のように書いた。「私はマスメディアでずっと裏方をやってきた人間だから、頼まれて、有名人・芸能人にサインをお願いすることはあっても、自分のためにサインをねだることはしない。それは、私の職業観だ。今回のイベントで、ブロガーの執筆者たちがそれぞれに著作にサインをする。そんな誇らしい思いを経験してもらいたかった。そんな微笑ましい光景がなかったことをとても残念に思った」だが、そのコメントが高慢ととられ、私を批判するコメントがブログに踊った。そして、それはあなざあチャンネルにもスレッドが立つほどの大騒動になった。

私は詩人に応えるエントリーをブログにあげている。

-----

おっしゃる通り、私は勝手な「アウェイ」幻想に囚われてしまって、被害妄想に陥っていたのだと思います。会場があれほど暗くなく、そして、舞台があれほど明るくなければ、私はもう少し違う行動をしていたのかもしれませんが。一年ほど前にも、千夏さんからブログ上で怒鳴られたことがあります。あれ以来、勝手に疎外感を増幅していたのかもしれませんがね。勿論、エントリーの冒頭で無名な私のことを名指して罵倒するのですから、彼女のやさしさをそのとき、とっつも感じましたよ。

あなたは、止まり木に座っている私の3メートル先にいた、私がステージを見るとき、あなたのまるまった背中が常に見えていました。たしかに私はあなたに話しかけたい衝動に

かられていた。でも、結局、それをする勇気はなかった。それは、そんなことをしたら、有名人にすり寄り目立ちたがり屋のスポンタという印象を多くの人に与えることを恐れたからなんだと思う。

否。私があなたに声をかけなかった理由はそうじゃない。あなたが千夏さんのリアルな世界での仲間だったからです。あなたはステージから客席のうす明かりの世界に戻ってきて、ネットというアンリアルな世界の同胞たちではなかった。だから、私はあなたに声をかけられなかった。

私が何故あるとき進行を変えるために労を尽くさなかったのか。その理由はただひとつ。あの会場にいた彼女のリアルな世界の友人たちを傷つketくなくかった。そして、どう考えても、あの場所はリアルな人達にとってのホームの場所。私たちブロガーにとってはどこまでもアウェーな場所だったのです。

だったら、野坂昭如が歌った「黒の舟歌」よろしく、エンヤコラ今夜も舟を漕ぐ。をすりゃよかったんですけど、あの場所の私の立場ではできなかつた。私があそこで発言をしても、舟を沈めることにしかならないと予想したんです。アイランド現象だったんです。でも、新幹線で帰らなければならないブロガーが現れたときに、その一瞬、ネット者側のアイランドができつつあった。だが、その動きをリアル者たちは無視した。そのようにして、リアル者側のアイランドと化学変化を起きなかつたし。ネット者たちはアイランドすら形成することができずに会場を後にしたのです。でも、ほんとうのことを言えば、ブロガーであることを千夏さんは心のどこかで恥じていた。だから、あのイベントのとき、彼女はリアルな存在でありつづけて、ネット者である自分を心を他者から見えないようにした。そういうことがあったのだと思う。有名な彼女は潜在意識のどこかで、ネットに関わることなんて落ちぶれた有名人のすることだと感じられていたのかもしれない。

-----

千夏という女性小説家を取りまくコミュニティーがかつてあった。それは、ブログの周辺とリアルな彼女の周辺にあわせてふたつ存在した。だが、それはそれぞれがアイランドを形成して交じり合うことがない。それがあのオフ会だった。

市民参加型ジャーナリズムを経験してきた私にとって、コミュニティーの健全さを図る目安は、新しく入る人が不愉快な気分にならないことがだと確信している。

その点、彼女のブログで成立したコミュニティーは全員が参入者であり、新人であり、とてもフラットなコミュニケーションで単行本を成立させるまでにいたった成功例である。だが、彼女のリアルなコミュニティーは、文壇の長幼の序に引き裂かれ身動きが取れない。そして、インターネットでのコミュニティーとリアルなコミュニティーは一切交じり合うことはなかつた。

弘田とはオフ会の後もメールでのやりとりをしたが、彼は、千夏が雇っている男の子に「一般人」と言われて憤慨したようだ。同じ気持ちを小説家が持っているのかどうかは分



からぬが、ブロガーたちインターネットの住人は彼女にとって客でさえなかった。だが、私は、ネット者たちが客ではなくなったことに、一縷の光明を見る…。

私は詩人に向けて次のように言い訳をしている。

-----  
詩人のあなたが、私の市民参加型ジャーナリズムとの関わりをご存知かどうかは分かりませんが、私は、この一年あまり、その実践者としてさまざまな失敗を繰り返してきました。そして、そこから得た結論は、オープンゲイトの市民インターネット新聞やジャパンインターネット市民新聞がいまだに、世論を形成する要素として社会的に認知されていない理由は、運営者たちの問題もあるけれど、そこに集っている市民たちの意識の問題が大きいということです。そして、市民参加型ジャーナリズムという健全な民主主義の世の中にとっては不可欠だとするならば、それが成立するためには、市民の側が変わらなければならない。そう痛感しています。

私は魚屋のご主人がジャーナリストになるのではなく、魚屋のご主人が魚屋のまま記事を書く。それが市民のあるべき発言の姿だと思っています。逆にいえば、魚屋のご主人は自分にスポットライトがあたってしまったとたんに、語るができなくなる。そういうことを危惧してもいます。

「配達されないラブレター」という本は、匿名と原稿料は寄付するというシステムによって、作者個人にスポットライトを当てずに、表現を可能にした。それはとても素晴らしい出来事だと捉えています。「電車男」とちがって「配達されないラブレター」は確信犯。それがすごい。

匿名者で本として成立したのは、山本七平氏が固定ハンドルネームともいえるイザヤ・ベンダサンの名前で書いた「日本人とユダヤ人」以来でしょう。インターネットの匿名性を否定する意見がさまざまなところで見られますが、それは言論・表現の場で既得権益を持っている人たちの意見に限られると思っています。わたしは、今回の「配達されないラブレター」のように、匿名性を担保に無名の人たちの表現を可能にした企画に感動を覚えません。

私や千夏さんのような、表現者を目指す人間は発言や表現に躊躇しない。だから、はしたないと他人から言われようが、発言する。でも、せっかくインターネットの世の中になったのだから、そういう変わった人たちだけではなくて、ごく普通の人も発言する、発言できる。そんな時代になって欲しいと考えているんです。

素人短歌の選者としても活動しているあなたなら、同感してもらえるのではないのでしょうか。新古今和歌集よりも、万葉集のほうが骨太の魅力がある。そんな感じなのかなあ…。

-----  
「配達されないラブレター」に集まった文章たちがジャーナリズムなのかといえばそうで

はない。では、芸術なのかといえば、それも覚束ない。なぜなら、提出された文章の署名がハンドルネームだからだ。そして、この篤志を持ったネット者たちの性向は極めて特徴的だ。それは、この本を読めば分かる。

そこには、それぞれの過去の思いが披露されているが、それが伝えたい相手に向かって発せられていない。否、相手に届けられないという安心があるからこそそのラブレター。だから、発信しているようで、発信していない。ラブレターの読み手が既に亡くなっている人だったり、音信不通になった過去の恋人の場合も多い。

無名の書き手たちは、この文章から何かが起きることを望んでいない。相手に伝わらないという可能性が高いからこそ書いた。そして、ほとんどの無名者は、書いたことが相手に伝わったとき、書いたことを否定するだろう。勿論、ほとんどの無名者は、書いたことに嘘はない。切実な気持ちを綴っている。無名の作者たちは、それがリアルな社会に流布することを知っているし、望んでいるのだが、そのことを間接的な目標とすることに自らの良識であると任じている。彼らはユニセフに寄付するために労働したのではない。売文家のようなすれっからしではない。そこが人の心を打つ。

「配達されないラブレター」に携わった出版社は、ブロガーであるライターにトレーサビリティ(個人を特定すること)を条件としていない。そして、この本では個人を特定できない無名の発信者によって書かれたことによって、読者たちは心を動かされる。

それを私は素晴らしいことだと思う。それは千夏という有名小説家の手柄だし、それを出版した出版社の手柄だ。有名小説家はトレーサビリティさえ覚束ないあいまいな個に御墨付きをあたえ、出版社が世の中に押し出す。そのようにして、多くの読者は、匿名者たちの文章を読み、感動したり、考えさせられることができた。

オフ会の惨状とは異なり、「配達されないラブレター」が成したことは斬新であり、極めて画期的だ。

次のような感想を、私はインターネットで見つける。

「もし、リアルなあなたを知っていたら、あなたに同情するかもしれません。でも、ハンドルネームだけのあなたしか知らないの、純粹に私はあなたに心を寄せることができる。あなたも私も「同情」という言葉で汚されることはありません」

私の義母は、2歳半の息子を交通事故で亡くしている。自宅前のバス停で、居眠り運転のトラックが突っ込み、逃げようがない形で、母親の目の前を引き摺られていった拳句の事故死だった。幼い義兄の遺影の裏には、今も当時の新聞記事が添えてある。

妻の話によれば、義母は、当時、周囲からさまざまな慰めや励ましの言葉をかけられたというが、それらの言葉によってひどく傷ついたという。いまのように情報が発達しているわけもなし、被害者同盟もなかっただろう。だから、義母は自らの深い悲しみを誰とも共有することはできずに、辛い日々を過ごしていたと容易に想像できる。慰める側が、他人の不幸を知り慰めることで、自らの幸福を確認するような、そんな卑劣漢ばかりではな

かっただろう。だが、本当に親身になってかけた言葉さえも、当人の心を傷つける。その人の心に届かない。そういうことって今でもある。共感と同情という二つの言葉の間には恐ろしく深い谷がある。

匿名だからといって、心が百パーセントつながるかといえばそんなことはない。しかし、匿名であることによって、ステークホルダー(利害関係者)であることから、逃れられて、ダイレクトに心と心をつなぐことができる。そういうことが期待できる。ここでいうステークホルダーとは、リアルでのコミュニケーションでは、社交辞令を言わざるを得ないということ。

肉親を失った悲しさを知らなくても、人は、「ご愁傷さま」という言葉をなげかけ、病気の辛さを知らなくても、「かんばって元気になって、御大事に」と言う。そういう何気なく発せられた言葉が、いかに本人たちを傷つけるか。そのことを知って知らずか、多くの人は、気持ちのない社交辞令を繰り返す。そうしないと、リアルな世界では非常識な人間ととられてしまう。それがこの場合のステークホルダーの意味だ。

匿名だから、ハンドルネームだから、トレーサビリティが確保されていないから、真情を発信できる。そして、リアルな関係がないから、読者も心を寄せることができる。インターネットにおける匿名性を一方的に否定することは、間違いであると思えてならない。

千夏との摩擦が一段落を追えた2週間ほどたった頃だったろうか。一通のメールが私のところにやってきた。

「私も『配達されないラブレター』に原稿を寄せた主婦です。オフ会に行こうと思っていましたが、都合がつかず諦めたのですが、いまでは行かなくて良かったんじゃないかな。と、思っています。私があの場合にいたとしても、きっと不満を感じたでしょう。でもあなたと一緒に何も言えなかったんじゃないかな。でも、あなたがオフ会で何が起きたかを書いてくれたことをありがたく思います」

千夏はインターネットで起きたことを一切リアルな場で発言することはなかった。それは、「配達されないラブレター」という本の売れ行きに少なからず影響したはずである。画期的な本が世の中の評判を生まなかったことが悔やまれてならない。

私の知り合いのプロガーは次のように書く。

「有名人でありながら、正面からスポンタさんに切れまくった千夏さんは本当に凄いと思う」

そして、千夏は次の言葉で締めくくった。

「スポンタ、一人でもイヤな思いをした人がいるのは忍びないから、せっかくあなたのやり方で、あなたにスポットライトを当ててやったのに」

私は女流小説家に感謝しなければならない。

\*\*\*\*\*

## ネチズンタイムズ日本上陸

\*\*\*\*\*

私がオープンゲイトの市民インターネット新聞を追放されて、一年が経った2006年夏、韓国で市民参加型ジャーナリズムとして成功したネチズンタイムズが日本に上陸するという。ネチズンとはインターネットのネットと市民を意味するシチズンを併せた新語である。日本でも、ネチズンタイムズは韓国大統領の選出にも影響を与えたとして知られている。私は一年前、シンポジウムの会場でユン氏に質問をしている。そして、オープンゲイトの市民インターネット新聞を放逐されたのも、ネチズンタイムズが韓国・ソウル市で行なった世界市民記者会議がキッカケだった。

私は世界で最初に成功した市民参加型ジャーナリズムとして期待していた。だが、それを朝永に言ったことがある。

「ネチズンタイムズは市民参加型ジャーナリズムなんていっているけど、市民記者が書いているのは生活に関するものばかり。大統領選挙に影響を与えた記事は、ユン氏をはじめとする専従の職業記者が書いたんだよ。だから、ユンはネチズンというネット市民を騙っているだけで、あんなものは市民参加型ジャーナリズムじゃない」

通信社の人間だけあって朝永はユンに取材したことがある。朝永のいうことが確かならば、ネチズンタイムズのユンもオープンゲイトの藤堂と大差ないのかもしれない。そういえば、この年の初め、ユンは日本のジャーナリスト関係者にコンタクトを試みていたようだ。私もあるシンポジウムの客席にいる彼を見かけたことがある。日本語の分からない彼は通訳をしたがえて、シンポジウムの客席にいた。静まり返っている客席で韓国語に通訳する声が異様な風景だったこと妙に覚えている。

その頃の私は、朝永も含め複数のルートからユンに合うことはできぬかと打診している。だが、その思いは果せないでいた。そんな頃、ネチズンタイムズ日本版誕生の公式発表があり、スタート準備ブログがスタートした。さっそく私はそのサイトに行ってみた。

ネチズンタイムズの編集長は鷲尾淳之介だった。彼のキャリアは中央紙の新聞記者に始まる。その後、新聞社が発行する週刊誌の編集長となりスクープを続発し、社会的に知られるようになる。彼はロマンスグレーといえるハンサムボーイである。そんな彼をテレビ界が放っておくはずもなく、四十代からはニュース系のワイドショーに出演するとともに、ジャーナリズム系番組のメインキャストをつとめた。彼は行動派でならし、砲弾舞い散る中東の戦場にも赴いたし、路地裏の悪事も見逃さなかった。東京のベッドタウンでおきたストーカー殺人事件に世の中の関心を集めさせ、ストーカー関連法案を成立させたのは、彼の手柄だといっている。そんな彼が、ネチズンタイムズ日本版の編集長に就任する。私

は大いに期待した。

私はインターネット上のニュースメディアで鷺尾のインタビューに接する。

インタビュアーは、「ブログやあなざあチャンネルがある日本のインターネットで、市民新聞をつくる必要があるのか?」との疑問を鷺尾につきつけている。

「責任ある発信ですよ」

鷺尾の答えは明確だった。

「みんなが市民記者っていう言葉でユンさんが僕に編集長をやってくれないかって打診してきたのが、ことしの春のことかな。僕の周りの人達はみんな大反対した。癌の手術の経過を見ている時期で健康の問題があったからね。でも、ユンさんの言葉は僕にとって衝撃的だったんだな。いままで四十年間ジャーナリストをやってきて、それなりの評価を得てきた自負はあるんだけど、それはすべて一方通行だったんですね。でも、ネチズンタイムスは違う。インターネットならではの双方向のメディアなんだな」

鷺尾は自らのジャーナリズム論を展開する。

「いま、小泉首相がやっていることを小泉劇場なんていうでしょう。それはパフォーマンス型政治っていうのを揶揄してのことだと思うんだけど、でも、一般の市民にとって政治っていうのが、額縁の向こう側の出来事になっていることの現われでもあるんじゃないかな。でも、本当は、ご町内の運動会のように、誰でも参加できる。そういうのが本来政治があるべき姿のはず。それに僕らは政治が注目されているから政治を追うんだけど、実は政治だけが世の中を動かしているのでもない」

彼は続ける。

「あなざあチャンネルが話題になっているけど、ネガティブな情報が多すぎるね。人間には喜怒哀楽があるから負の部分があるのは仕方ないことだけど、メディアがそういうマイナスの感情のはけ口になってしまうのはどうしたものかな。あなざあチャンネルがごみためと言われても仕方がないんじゃないかな。ネチズンタイムズはそういうものとは一線を隔したい」

鷺尾はこのインターネット上のサイトで、あなざあチャンネルをごみためと発言した。これがあなざあチャンネルの常連たちの反感を買い、彼をバッシングするスレッドが続出した。そして、その影響はスタート準備ブログのコメント欄にも影響した。鷺尾は発言者に責任ある発言を求めていたが、明らかに鷺尾個人の、それもゴミタメ発言に対抗するためだけのコメントがスタート準備ブログに多く現れた。

対応に窮した編集部は、コメント欄の記入資格を市民記者登録者に限って行なえるようにした。だが、その効果も決定的な解決策にはならない。何故なら、市民記者の仮登録は無資格・無制限だったからだ。

さて、韓国で成功を収めたネチズンタイムズはITベンチャー系の資本を集めて、鳴り物入りでスタートする。都心部に近いオフィスには、二十名の専従スタッフがすでに雇われていた。スタート初年度に市民記者を一万人集め、最終的にはそれを五万人まで増やす予

定だという。

スタート準備ブログには、新聞学科の学生が編集部を訪問したという記事が載った。ネット新聞でありながらも、本格的な編集部を構成するネチズンタイムズに学生たちは感激したという。彼らが希望する就職先は一流中央紙やテレビ局だろうが、滑り止めのひとつとして選択肢のひとつにはなっただろう。

ところで、韓国からやってきたユンは、「みんなが市民記者」というコンセプトを持っていた。そのコンセプトが鷲尾を動かしたし、双方向通信を実現する極めてインターネット的であるとの評価も受けた。だが、そうだろうか。みんなが市民記者になるような時代はやってくるのか。私は、学生たちの訪問を受けた記事のコメント欄に次のように書きこんだ。

-----  
ネチズンタイムズのユン氏は、ニュースゲリラというコンセプトを持っています。でも、オープンゲイトで市民記者活動をし、そして追い出されたスポンタは、その考えに疑問を持ちます。ゲリラというと、若者たちを山奥で訓練して、街に放ち、占領軍に対してレジスタンスをする。そんな感じでしょうか…。新聞学科の大学生と交流したというのは、まさにそんなイメージ。

いまだ戦時下にあるといってもいい韓国ではそういう言葉は価値を持つのでしょうか。でも、ネチズンタイムズ日本版はそれを日本の市民たちに求めるのでしょうか。ゲリラなんていうと、反戦の闘志チェ・ゲバラを連想させ、とてもカッコイイのですが、市民には訓練する暇もないし、家族や生活があるから、レジスタンスに自らの命を投げ出すこともできないんです。

私が考えるのは、そういう訓練を必要としないイメージ。たとえば、繁華街で、泥棒が出て、走って逃げていく。すると、「キャー、ドロボー」という知らせる人がいる。110番通報する人がいる。「あっち、あっち」と泥棒を指差す人がいる。トウセンボウをする人がいる。いどみかかると人がいる。倒れた泥棒の手脚を抑える人がいる。過剰な正義感から、暴力に出る人を制止する人がいる。そういう無名な人たちの協力で、世の中の悪事が排除されていく。

それが戦時下の韓国と日本の市民参加型ジャーナリズムの違いではないでしょうか。私が、ネチズンタイムズの決定的な問題と考えるのは、「みんなが市民記者」というスローガンです。

市井人の能力は限られているのだから、「みんなが市民記者」ではなく、「みんな・で・市民記者」にならなければならぬ。

でなければ、取材力・分析力・国語力において市民記者は鑑別されることにより、言論の自由は制限される。

-----

私のコメントに対して、ネチズンタイムズからの反応は一切ない。たとえ双方向の通信ツールを獲得していても、編集部員たちは組織に配慮して発信できぬ。発信において自由でない。唯一、編集部個人として対応ができたのかもしれないが、それも職場での立場を危うくしかねない。ならば、ネチズンタイムズで自由に発言できるのは、鷲尾編集長だけである。

その頃、アメリカ軍がフセイン政権を倒すためにイラクに侵攻していた。いまもってイラクが大量破壊兵器を持っていたかどうかは疑わしい。9.11の同時爆破事件を起こしたのはアルカイダであって、それとフセイン政権の連鎖性も連想ゲームとしては成立するが、それを理由にして戦争をしていいのかといえ、賛否は分かれるに違いない。鷲尾は当時日本のマスコミを賑わせていた有名美術家の盗作問題よりも、イラク戦争の方が重要であるとネチズンタイムズのスタート準備ブログで書いていた。私は、彼の記事に次のようにコメントした。

-----  
イラクで起きている戦争でたくさんの血が流されているのだから、もっと世界のニュースに注目すべきだという鷲尾さんの意見を理解します。でも、そういうことを市民記者が目指す。と鼓舞されるのだとすると、私は賛成できません。市民が他国に出向くことなど、殆ど不可能です。そして、市民が戦場に出向いたとき何が起きたか。私たちは捕虜になった市民運動家たちのことを思い出すことができます。

私はかつてオープンゲイトの市民インターネット新聞に次のような記事をあげています。お読み頂ければ幸いです。

記事タイトル：

学校に行きたくても行けない

記事本文：

先日、娘に私たちの住む区の読書感想文の小冊子が配られてきた。娘の作文は掲載されておらず、名前のみが優秀作として活字になった。私の娘は小学4年生。小学生のバンドではドラムを叩き、日曜日には柔道に通う天真爛漫な女の子だ。しかし、彼女は一昨年2月の校舎の改修工事がきっかけで、建材や接着剤等からの揮発性化合物（VOC）による室内空気汚染が原因の「シックスクール症候群」に罹患（りかん）した。

彼女は学校で起きたシックスクールを実証するため、同年9月、発症している自分の体を悪環境に置き、大学病院の検査結果で健康被害が起きたことを自分自身で証明した。北

里大学の専門医によると、彼女のような症例が一人いるということは、児童全体の 20%の児童が何らかの健康被害を受けていると公言している。シックスクールの症状は、頭痛・吐き気などありふれたもののため、保護者も本人も見過ごしてしまうのだ。

だが、彼女の努力によっても、シックスクールの発生が学校当局によって公表されることはなかった。だから、彼女のクラスメートは娘の辛さは理解することは勿論、友達へのやさしい気持ちを知らない。

区内の小学校で有償で配布された小冊子には掲載されなかった作文を彼女の生原稿から紹介したい。娘は昨年秋、学校再改修工事のため学校へ登校できなかった時期に、「一人でも多くの人に、私のような子供がいることを知って欲しい」と願って書いたことが懐かしい。

「シックスクール」の文言で、掲載されなかった娘の読書感想文。「そしてかえるはとぶ」を読んで。

主人公良は病気になりずっと病院にいました。良は言葉がうまくしゃべれず、同級生にバカにされる。

ある日、ケガをしてしまい、ずっと「そうぐ」をつけなければならなくなりました。そのことでまたいじめられる。でも良はいじめなんて気にせず、兄ちゃんや両親にはげまされながらリハビリを続けました。ようち園、小学校と、スクスクと育ちました。どこまでも明るくマイペースな良くんを、私はえらいなぁと思いました。

私は、小学校三年生の時、シックスクール症候群になりました。頭痛が起きて、保健室に行ってもどつてくると、クラスメートに「おまえって、ズルだよな。本当は痛くなんてないんだろ？ 勉強したくないからって、行くんじゃねえよッ」と言われました。私はそんなことがあったことを両親に言わず、なるべく気にしないで学校にいました。でも、意地悪や悪口を毎日されて、たまに泣きながら帰ってきたこともあります。

この本の主人公の良は、まだ四才なのに、私のようにいじめられたり、からかわれても泣かずに元気にすごしている。それに比べて私は、ちょっと弱虫だなと思いました。もし、三年生の時に、この本に出会えてたら、私ももうすこし明るく毎日を過ごせたなと思いました。

良くんから「勇気」をもらい、ちょっぴり元気になりました。(読書感想文おわり)

娘が仔細を語らず、シックスクールという言葉に何を託したのか…。そのはるかな思いは父親である私の想像を越えている。私は、市民記者の名のもとに、無名の市民の思いを広げていけばすばらしいことだと思っている。

私の妻は、「シックスクール」という文言あったために娘の作文が、掲載されなかったのは明白な事実であると断定した。彼女はいまペ・ヨンジュンにはまっているが、市民活動



を通してシックススクール問題とも戦っている。

-----

私のコメントに対して、鷺尾はすぐに記事を上げて返答をした。

「 spontaさんの仰るとおりです。このときの鷺尾は、あなざあチャンネルを始めとするネット上のバッシングと戦っていた。「私は、あなざあチャンネルの一部がゴミタメであると言ったのであって、全部がゴミタメだと言ったのでない。私にインタビューをした記者は、あなざあチャンネルでバッシングが起きるように言論を誘導したんですよ」

彼は「一部」と言ったのを、「全部」であるかのように書かれたと不満を言うが、私には、それがどれほどの違いになるのか。単なる国語上の問題に過ぎぬと感じていた。ただ、私のコメントに関して、彼はすぐに反応し、自分が使った職業ジャーナリストとしての優先順位の決定方法が戦争事大主義だったと自己批判してみせる。

この記事を引きかけに、私は鷺尾とメールのやり取りをはじめた。

「あなたの意見をもっと聞きたいなあ。よかったら、私とあなたをパネラーにして公開討論会をやってもいいですよ」

朗らかな鷺尾のメールは私を勇気づけた。鷺尾はあの時も、いまも、ひとりのジャーナリストという存在を超えてテレビスターだった。そのとき、私が彼に送ったメールを採録する。

-----

メールでの交流ができることをとても喜んでいますが。いままでの私のネット上の言論で、鷺尾さんに対して、非礼があったり、また、ご立腹されるようなことを書いているかもしれません。申し訳ありませんでした。また、そのことに目をつぶり、今回、対話の労をとろうとしていただけていることを感謝してやみません。

鷺尾さんが、私のブログをどの程度お読みであるかは分かりませんが、私は、市民参加型ジャーナリズム。つまり、「誰もが自由にものをいえる日本」を目指しています。これは、たまたま昨年の3月オープンゲイトの市民記者活動に参加し、その一ヵ月後にあなざあチャンネルにバッシングをされてから、常に心に思うとともに、具体的に行動してきたことです。

これまでの私のネットに関連する経験を時系列で追うと次のようになります。

2000.10：インプレスTVのブロードバンド番組「インターネットウォッチプラス」のディレクター

2003頃：ブロガーとなる。ブログのコメント欄で、紙おしめ論争がおきる。

この頃、個人ブログ開設。教えてgooなどに回答を書き込む。地域のこどもバンド活動(障害者含む)を展開。娘が化学物質過敏症に罹患。

2005.03月：オープンゲイト社市民記者登録。ほとんど毎日記事をアップする。  
2005.04月：あなざあチャンネルでバッシング。  
2005.7月：ブログにて、オープンゲイト市民インターネット新聞を批判する。以降、内容に関わらず私の記事が拒否される。  
シンポジウムにて、ネチズンタイムズのユン氏に質問。  
同時期、ジャパンインターネット市民新聞に参加、ネチズンタイムズインターナショナルに登録。ツカサネット誕生。  
通信社編集員・朝永氏と出会う。  
米国の草の根ジャーナリズムの実践者ダニー・ギリガン氏のイベントに参加。  
2006.1月：朝永氏から寄稿依頼。だが出版は実現せず。  
2006.3月：ジャパンインターネット市民新聞の市民記者交流会に参加。あなざあチャンネルのゆきひろ氏と立話。  
2006.5月：小説家・坂本千夏とネット上で対立。

以上が、市民参加型ジャーナリズムとつきあうに至った経緯です。重要なことは、そのことごとのほとんどすべてにおいて、常にあなざあチャンネルを意識せざるをえなかったこと。それらの経験から素直に結論を出すならば、無防備に公開討論会などをやったら、会場が混乱するだけだということ。たとえ鷲尾さんが真摯な気持ちで発言をしようとも、何ら建設的な場にはならないと考えます。そして、それは、つまりくことを楽しみにしているギャラリーたちを楽しませるだけで何ら意味はない…。

私は、実名に関する取り扱いや、責任に関して、鷲尾さんと考え方が異なっています。しかし、その相違を乗り越えて、市民参加型ジャーナリズムを成立させなければ、日本の言論の場の逼塞した状態を切り開くことはできぬと思っています。とはいえ、仮にいま公開討論会をすると告知し開催したとする。当然客席には、あなざあチャンネルの常連もいる。すると、バッシングの格好の材料がひとつ増えるだけではないかと感じているのです。

どういう公開討論会をやるべきかをネット上の友人に相談したら、あなざあチャンネルにスレッドを立ててなどというアイデアが出されました。どうせ、脅にされるのなら堂々と。ということでしょう。そのアイデアを採用するかどうかはともかく、公開で何かをすればかならずあなざあをチャンネルで言及される。そのようなことも想定しながら、堂々と対論ができればいいし、そうならねば、やる意味も価値もないと考えます。

アウトサイダーの立場で僭越なことを言わせていただくならば、今、ネチズンタイムズ日本版のオープンに向けてやるべきことは、多様な意見が大量に集められる場をつくること。そういうシステムづくりではないでしょうか。鷲尾さんの仰るように実名の部分もあっていいし、理想としては恥じることはない。ただ、それによって登録者が減るのなら、そのための措置をしておくべきだと考えるのです。いままで準備してきたことを、すべて変更すべきだと提案しているではありません。ただ、ジャパンインターネット市民新聞

やオープンゲイトのバッシングの様相を見てきた人間からいえば、鷲尾さんの知名度とそれなりの資金力でメディアをスタートさせるならば、そのバッシングの規模もそれまでのものとはまったく違うレベルになると、予想できる。ならば、さまざまな知恵を集めて、同じ轍を踏まぬやり方を模索すべきだと思うのです。そして、そのための術はたくさんある。そのための頭脳もたくさんある。それが私の考えです。

どうでしょうか…。

私は、最低限、対話の途はもちつづけたい。公開討論会もぜひとも実現したい。でも、無防備に公開討論を実施して、鷲尾さんやネチズンタイムズ日本版がダメージを受けるならば、それは無意味。何故なら、継続した対話を促さないから。小泉首相のタウンミーティングや田中長野県知事の車座集会在反対派の総決起集会になっている現状をご存知ですよ。そのようなことは絶対にさげたい。かといって、賛成派ばかりのシャンシャン総会のようなものでも意味はない。そんなイベントをやっても現場はたとえ和やかでも、ネットではいま以上のバッシングを引き起こす。そんな想定ができる今、そのような未来を排除するために、メディアの人間は、知恵を絞らなければならない。そして、そのような情報処理技術の集積が、日本型市民参加型ジャーナリズム。

そのタイトルにネチズンタイムズの冠があれば、鷲尾さんとしても嬉しいことだろうし、私もその喜びをともにするのです。

追記 01 :

私は、ネチズンタイムズのみなさんに危機意識があるのかどうか、理解に苦しんでいます。オープンゲイトもジャパンインターネット市民新聞もそうだったのですが、既存メディアでインターネットを嫌悪していた人たちが関わっている場合が多く、見当ハズレの対応が目立っているようです。結果、さまざまなところに袋小路ができて、修復不可能になっている。身動きのとれない状態に陥っています。

そのあたりもご助言もうしあげたいところですが、私はすでに虚しい発言を1年以上続けておりますので、実現性があり、私にもメリットがあることでなければ空費と考えております。そのことも、今後の対話(メールでのやりとりを含む)の中で、お話をさせていただけると幸いです。

追記 02 :

要らぬことを初めてのメールで書いているのかもしれませんが、私は、単純にスケジュールを組んでいただいて、公開討論の場に望めばいいのかもしれませんが、しかし、そのようにして一度公開討論の場が開催されたとしても、その場の混乱から同様の機会が失われるのならば、意味がない。そう考えてのメールであることをご考慮いただきたいと存じます。勿論、このメールは、無名の人間からの生意気なメールであることは承知しております。

とはいえ、そのようなものを排しても、この日本の言論世界を変えねばならぬ。そういう熱い思いを鷺尾さんと共有していることを確信して、このような内容のメールを差し上げることにしました。

内容に、失礼、ご無礼の段ありましたら、平にお詫びもうしあげます。

きついスケジュールの中で奮闘されていることをとても身近に感じております。暑さ厳しき折、御身くれぐれもご自愛の程。

-----

私の長文のメールに、鷺尾氏から返事が返ってきた。

-----

中村厚一郎さま

長文のメールありがとうございました。ちゃんと読ませて頂きました。公開討論の件は私も軽々には出来ないなあと感じていましたので、そこは中村さんの感性と同じだと思います。明日、僕がやっている番組の放送なので今ゆっくり返事を書く時間はありませんが、またちゃんとしたメールを書かせてもらいます。私もあなごあチャンネルのことをいつも考えています。あなごあチャンネルのバッシング経験者の中村さんにはお聞きしたいことは一杯あるんですね。取り敢えず感謝のメールにかえさせてもらいます。(鷺尾淳之介)

-----

テレビにスケジュールの大半を占拠されるなかで、鷺尾がネチズンタイムズにどれだけの時間を費やすことが許されていたのか極めて疑わしい。彼はネチズンタイムズの広告塔として使われているだけ。私は次第にその思いを強めていた。前年、彼は生死に関わる手術をしている。テレビに出演しつづける彼の活動を見ていれば、オーバーワークになっていることは明らか。私は鷺尾とのメールのやり取りを無理矢理続けようとはしなかった。

スタートを目前に控えた8月上旬。大久保というIT関連のジャーナリストがネチズンタイムズの編集部に加わるという発表がなされた。大久保は検索エンジンに関する新書本でベストセラーを出した有名人でもある。今回の人事はネチズンタイムズ社長ユンの懇願によるものだという。大久保は編集部に加わるについて、忙しい鷺尾に代わり実質的な現場のトップである副編集長の永田との公開討論をネット上で開始する。

「ネチズンタイムズには、あまりにも左翼言論が多すぎる。これでは言論メディアとしてのバランスを著しく欠いているのではないか。その理由は編集者に左翼的な思想を持つメディア出身者が多いからで、その影響が市民記者の記事にも影響しているのではないか」

鷺尾がスタート準備ブログを開始したとき、最初に特集が組まれたのは沖縄特集だった。米軍基地周辺に取材したり、沖縄決戦を経験した老人たちにインタビューを試みた。そこから導かれた記事は当然のように在日米軍への批判や旧日本軍の批判に結論づけられてい

く。だが、ノーベル賞作家の大江健三郎氏の「沖縄ノート」のモデルとなった人達があるような事実はなかったことを告白したり、歴史的事実に関して多様な視点が生まれている。それが終戦後半世紀の時間が流れたということであり、それらが一切市民記者の記事に反映されていないというのは奇異といえる。ネチズンタイムズは朝日新聞よりさらに右よりだという印象をもたれても仕方のない状況だった。それだけではない。旧在日米軍の再編問題、イラク戦争、靖国問題など、さまざまな争点があったが、それらがすべて左翼的市民記者によって記事にされていた。

大久保はいまの日本の政治状況を左右の言論が挟れていると形容している。鷲尾編集長以下、団塊の世代を代表するイデオロギーがネチズンタイムズを引っ張っているが、それは五十代から六十代の年齢層のものであって、ネットの中心層である二十代から三十代を中心とするネット世代の政治感覚とずれていると指摘する。いまのままではネチズンタイムズが大衆の支持を得られないと考え、編集部の中の世代的対立を明確にしたい。と提言する。

議論を社外にオープンにすることによって、ネット者からの支持を得る。大久保が永田副編集長にわざわざネット上で対論を試みたのも、そういう目論みゆえ。

大久保と永田の論争をネチズンタイムズ編集部内の不協和音などと捉える人がいたら、それは見当違いというもの。大久保は編集部のイデオロギー的な立ち位置を明確にすることによって、新しいネットメディアをつくらうとしていたのだ。

「市民記者の乏しい国語力・論理力では、坊主憎けりや袈裟まで憎いというような乱暴な論理で、権力批判が成されている。このようなレベルではネチズンタイムズは世の中に影響力を持つようなメディアには成長しない」

大久保は、市民記者の紡ぐ記事の説得力の低さを指摘し、編集部に猛省を促した。そして、カルトまがいの世界観を提出する記事も批判している。

当時、韓国の成功したメディアが日本に上陸するというので、ジャーナリストの間では少なからず話題になっていた。地上波テレビ局の美人ニュースキャスターも見学に現れたという。だが、ネチズンタイムズの話の中心はスタート準備ブログの記事の左系化した内容であり、それがジャーナリストたちのブログで痛烈に批判を浴びている。そればかりではない。あなざあチャンネルには、ネチズンタイムズを監視するスレッドが立つ。そして、そこで盛り上がったインターネットメディアでの批判はヒートアップし、スタート準備ブログのコメント欄を賑わしていく。市民記事には必ず批判コメントが載る。それが記事を書いた市民記者や編集者ばかりでなく、一般の読者・閲覧者にとって気持ちがいいはずはない。

永田はコメント欄に記入できる資格を市民記者に限った。市民記者は記事を書くことで報酬を得る。報酬は銀行振り込みであり、そのために自分の金融機関の口座名を編集部に教えなければならない。これがネチズンタイムズが市民記者の個人を特定するシステムになっていた。微々たる収入を得るためであっても、自分の銀行の口座名をインターネットに

入力することに抵抗もある。市民記者になるためのハードルはオープンゲイトよりも高い。だが、これにより批判コメントが書かれることをある程度抑止できる。だが、そのように制限が、誰でも発信できる市民記者の理想とかけ離れていく。

「永田さん。それでいいんですか?」。大久保はネット上で呼びかける。だが、インターネットに詳しくない永田は、聞く耳をもたない。

「ジャパンインターネット市民新聞、オープンゲイト、いままでにさまざまな市民メディアが日本に登場している。そして、今回ネチズンタイムズが加わった。そろそろインターネットにおける市民メディアを総括的に考える時期が来ている」。大久保は自らのブログで心情を吐露する。

「市民記者が発信してきた記事を編集部が取捨選択して採用する。そういうシステムは古い。市民メディアが読者投稿欄と同じだと言う批判を許してしまう。ネットから批判にさらされた編集部が選ぶ記事は、次第に当たり障りのないものになっていく。それは当然の成り行きだ。だが、少し考え方を変えてみたらどうだろう。いまは市民記者が記事を書いたら、それを編集部が校閲して、メディアにリリースする。そのような手続き型のやり方ではなく、市民記者のコミュニティがあって、それに連なる編集者のコミュニティがある。ふたつのコミュニティの化学変化の中から市民記事が生まれる。そして、市民記事の周りに読者たちのコミュニティがある。読者たちのコミュニティの中には、批判・反論をするコミュニティもあるかもしれない。ただ、そういういくつものコミュニティをイメージすることによって、いま、ネチズンタイムズが抱えている問題にも突破口が見つかるのではないだろうか」

大久保はさらに続ける。「記者の国語力には優劣はあるのかもしれないが、言論そのものに優劣はない。そして、それは発信者が匿名か実名かは関係もない。このあたりを上手く整理すれば新しい市民メディアが成立するはず。実名・匿名に限らず、誰でも気楽に安心して書き込めるメディアがあれば、インターネットの言論空間は画期的に変化する。なぜなら、個の言論を紡ぐブログが孤立したブログ空間を作る一方で、ミキシーなどの SNS が閉鎖的なコミュニティを形成している。そんなブログの欠点と SNS の欠点を補っていくのが新しい市民メディアであり、その可能性を私はネチズンタイムズに見た。だから編集委員に加わる決断をしたのだ」。

私は市民参加型ジャーナリズムの外にいた大久保が、市民メディアについて深い思索を展開していることに驚嘆する。彼の結論は、私の結論に極めて近い。

\*\*\*\*\*

ブロガーVS 市民メディア

\*\*\*\*\*

ネチズンタイムズがスタートして、一週間が経った頃、有名ブロガーとネチズンタイムズの幹部をパネラーにしたシンポジウムが開催された。シンポジウムのタイトルは、「市民メディアの可能性。ブロガーVS ネチズンタイムズ」。告知資料には、「韓国では既存のメディアと同等に扱われるまでの成功を収めたネチズンタイムズが日本に上陸した。韓国で成功したネチズンタイムズが果たして日本ではどうなるのか。アルファブロガーと鷲尾編集長とネチズンタイムズ編集委員たちが、徹底的に討論します」とあった。

会場となった大学のキャンパスはまだ夏休みのどんよりした空気が流れていた。私は指定された大教室に足をいそぐ。200人ほどが講義を受けられる大教室だろうか。私が到着した頃、その半分ほどは埋められていた。教室の後ろのほうで運営の担当者たちが頭を悩ませている。

「予定していたネット中継ができないみたいですよ」

すれ違った若者たちのグループが囁きあっている。

そんなことか。と私は半ば呆れた。このシンポジウムの運営者たちは既存マスコミの出身者が殆どだから、インターネットによる生中継のノウハウがないのだろう。後で、インターネットで聞いた話だが、技術担当者は現場にネットワークの端子があることを確認しただけで、当日を迎えたのだという。回線が動画配信に必要な速度を確保しているかも確認しないと、なんとも杜撰である。そして、この大学は学生運動の影響をいまだに受けていて、キャンパス内の情報制限がかなり厳しいのだという。いくつもの問題が絡まりあってシンポジウムが同時中継されることができなかった。

定刻の午後一時になると、座席はほぼ一杯になった。司会はブロガーの成宮だ。成宮は大久保とともに、このシンポジウムの企画者だった。成宮はブロガーを代表し、大久保はオーマイニュースを代表しているともいえる。否、成宮はブログの批判者の代表であり、大久保はオーマイニュースの批判者の代表というほうがふさわしいのかもしれない。

成宮は観客席に挙手を求める。

「いまブログを書いている人はどれくらいいますか？」

手を上げたのは、三十人ほどだろうか。

「では、ネチズンタイムズで市民記者をやっている人は？」

こちらはもう少し少ないようだ。壇上には、有名なブロガー、そして、ネチズンタイムズ側を代表して編集長の鷲尾と副編集長の永田、そして、大久保が並んでいた。

「まず最初に皆さんのネチズンタイムズのスタートに関する感想を伺ってみましょう」  
成宮は、情報学部の教授をやっているブロガーに尋ねた。

「ネチズンタイムズのスタートブログを見ていたんだけど、コメント欄が炎上していますよね。新しい市民メディアが成功するためには、ブロガーは勿論、あなざあチャンネルも

味方にしなけりゃいけないと思うんだけど、開始早々、敵にってしまった。これって、大きなダメージだと思っているんですね」

「炎上っていいんでしょうかね」。中央紙の現役新聞記者でもあるブロガーは言う。「私のブログでは、コメントは必ず読んで、ひとつひとつのコメントに返事を書くようにしている。これがなかなか面倒な作業なんだけれど、そういうことをネチズンタイムズはやっているのかな。コメントを読み解いて、ひとつひとつ返事をする。そういう丹念な作業をしないで、誹謗中傷と一からげにして拒絶する。それって、どうなのかな。確かに誰が考えても首を傾げたくなるひどい書き込みもある。でも、どれを掲載して、どれを削除しないかということ始めてい待ったら必ず混乱する...」

ネチズンタイムズのコメント欄はすでに市民記者でないと書き込めないようになっている。それを中央紙記者ブロガーは市民メディアの理想からかけ離れていると嘆く。

成宮はインターネット会社に勤めるブロガーを指名する。

「ネチズンタイムズは市民記者が実名で発信することに拘っているみたいですけど、実名によってさまざまな被害が起きることを考えると、ニックネームでもいいんじゃないかなあ。と思うんですね。ただ、コメント欄に罵詈雑言のような文言が踊っているのを見ると、はじめてサイトを訪れた人は怖さを感じてしまう。どうすればいいんですかね。あと、ネチズンタイムズはニュースサイトだというのに、コラムやエッセイやオピニオンのような記事が多い。これってブログと殆ど同じ。これじゃ、わざわざ見に来る人は少なくなるんじゃないかな」

「そう。そうなんだよ」。ネチズンタイムズ編集長の鷲尾は、わが意を得たりと話し始める。

「私は四十年記者をやってきたけど、現場に行って、取材して、書く。それが基本。だけど市民記者にはそれがなかなか難しいみたいなんだよね。僕のキャリアの最初は新聞でそのあとテレビになった。テレビで仕事をしていると、どうしても新聞記事を読みながら、どれが映像になるかを選択して後追い取材することになる。私はそういうのが嫌だったので、新聞に先駆けて先行取材をした。ストーカー法の成立の契機になったレポートもそれだった。今回のネチズンタイムズもそういうメディアにしたいんだよね」

「でも実際はどうなんでしょうか」。成宮は鷲尾を挑発する。「スタート準備ブログがあって、鷲尾さんがさまざまなネットメディアのインタビューを受けましたよね。だけど、それに続いたのは、釣り合戦っていうのかな。つまり、相手の発言を挑発するやりとり。ネチズンタイムズはあなざあチャンネルの常連さんたちの遊び場になってしまった。こんなメディアだったら、アルファブロガーたちの記事を読んだほうがましだって思う人も多いんじゃないですか」

「スタッフがすべて左寄り、それを是正できないんなら、そういうスタンスを明確にすべきだと僕は提案したんだけど、それは採用されなかった」。大久保も不満を隠さない。「成宮くんの言う通り、あなざあチャンネルの遊び場になってしまったが、編集部はどうやっていいのかわからない。ただ目の前の記事を編集して記事を上げているだけ。編集部のみ



んなは二百件以上の誹謗中傷のコメントがついていても、はてなもミキシーもウィキも知らない。インターネットで今何が起きているのか、さまざまなサイトを総合しなければならぬのに、存在さえ知らないじゃどうしようもない。それに、誹謗中傷のコメントばかりだっというけど、中には荒削りのコメントがあるはず。それを十羽一からげにして、拒絶・削除してはいけないんですよ」

「いやね。僕には、あなざあチャンネルに荒らされている感覚はあんまりないですよ」  
鷲尾が大久保に語りかける。「ただ、日々の作業に忙殺されていて、パッシングに対応する時間がないだけ。コメントに返答ができないだけなんだよ」

「そうなんですよ」。今度は副編集長の永田が口を開く。「今年の春から準備を始めて、やっと創刊にこぎつけたけど。何故ここでブロガーVS ネチズンタイムズってということなのかな…。って、本当のところ思っています。今1日五十本以上の記事があがっていることは、本当に嬉しい悲鳴です。もちろん、どういう人達が記事を上げてくれているかというのは、もうひとつ別の問題なのですが…」

永田が暗に指摘したのは、佐々木が指摘した左翼的な発言をする市民記者が多いということ。ネチズンタイムズは左翼系市民活動をする人達が自分の組織の言論を主張する場になっていた。

「私はインターネットリテラシーの極めて低い人間ですがね…。」。鷲尾は白状する。

「そんな人間が編集長をやっているのか…。」会場から野次が飛ばされる。

「ありがとう」、鷲尾は野次を飛ばした若者を制する。

「ぼくだって、3年以上ネットでコラムを連載していたことはある。ま、原稿を書いて載せるという作業はいままでやり方と変わらなかったけど。白状してしまえば、去年、娘がブログを始めるので、初めてブログの存在を知った。あとは、メールをやるくらい。勿論、グーグルで検索するくらいのことはするけどもね。」

野次を言った青年はうつむいたまま、鷲尾の言葉を聞いている。

「そんな私がコンさんから編集長になってくれないか。と言われてからずんぶんと勉強したよ。いろんな人の意見も聞いたし、一千万近い人達がブログを書いていることも知った。そして、あなざあチャンネルの存在もね。勿論、だからといってインターネットの全てを見たなんて思っちゃいないよ。でも、そんな僕だからこそ、新しいメディアを作りたい。誰でも参加できるメディア作りたいなあって思ったんですよ」

大久保は鷲尾の話に自分の思いを重ねあわせている。

「そして、キーワードとして思ったのが、責任ある参加。そのためには実名を出す。できれば顔も出して欲しい。その一方で、名乗りもしないで人を背後から斬りつける。匿名とか、そういうことはあってはならないと思うんですよ。あなざあチャンネルに関わらず、インターネット上のいろいろなところで、私のことを韓国人だと言っている。韓国人であることが差別に通じるとか私は思わないけれど、それは事実とは違う。もっとも私は九州の人間ですから、私の古い祖先は朝鮮半島から渡来してきたと思う。だけど、ネットで噂

されていることは事実ではないんだよね。そういえば、みんなも知っている有名キャスターは、と殺場発言をしたばかりに、ネットでは徹底的に叩かれている。それって、僕らテレビに出ている人間は仕方がないことかもしれない。でもね、こういうのってはっきり言って悲しいよ。日本人は本音と建前を使い分けるっていうけど、マスコミとネットの関係は、そうっていない。だから、本音が言える市民メディア。それができないんだろうか」

鷺尾は会場をもう一度見渡す。

「今日ここに来ていらっしゃる人達に申し上げたいんですが、ネガティブな意見でも、ポジティブな意見でもいいから、ぜひとも記事を書いて欲しいなあ...と思っています。創刊の日に千人の市民記者が集まり、一週間で千六百人の市民記者が集まった。ネチズンタイムズが始まって、日本のインターネットの常識が変わった。そういうことが今、起こりつつあるんですよ。ずっとみなさんが問題にされているようだけど、冷戦が終わってから、左翼とか右翼とかは意味がないんです。ただ、このメディアはまだ始まったばかりの幼稚園児なんです。なのにネットでの言論を見ていると、やれ左翼報道だとか、韓国の謀略。私なんか、韓国の回し者と言われている。でも、事実とは違うんです。色眼鏡でみないで欲しい」

「生まれたばかりの幼稚園児が、小泉批判をしますかね...」。大久保は不満を隠さない。「ネット上の過激な言論をネトウヨ。つまり、ネット右翼と批判する人がいるけど、それは正しくない。それは、既存のマスコミが左よりの偏向報道をしているからであって、批判しているあなざあチャンネルの常連たちは実は右翼思想を持った人達じゃない。ほんとうの意味で自由。リベラルな人たちなんです。あなざあチャンネルは別に右翼の巣窟ではないし、それに対抗することで、ネチズンタイムズが左翼言論を担う必要はないんです」

「あなざあチャンネルをゴミタメと形容することで、バッシングされることは予想されていましたか」。成宮は鷺尾に問う。

「インタビューでは確か、『一部のあなざあチャンネル』と言ったはずだったんですよ」。鷺尾は苦笑する。「僕はあなざあチャンネルの全体を言ったつもりはないんですよ。勿論、あなざあチャンネルの全体を見ていないし...。それに、人間というのは、匿名で書けるとなったときに、ネガティブな部分の情熱というのが広がっていく。私は、仕事で一緒になっている女子アナサイトを見たんですが、レイプすれすれのことが書いている。ま、劣情というのかな、勿論、ゴミは誰も出すものだし、僕も持っていると思うんだけど、それをネットが吹き集めてしまう。やはり、匿名というのはダメなんです。実名でブログをかいている人には、そういうネガティブな意見を垂れ流しにする人は少ないんじゃないかな」

成宮は鷺尾の意見を受けて、会場に意見を求める。すぐに手が上がり、二十代後半とおぼしき若者がマイクを握った。

「僕はブログっていうのは書くのにとってもハードルが高いと思うんです。何日も継続して

書き続けることができる人って、なかなかいないと思うんですよ。その点、ネチズンタイムズのような市民メディアは、書きたいときに、ちょっとちょこっと書くことができる。そういう誰でも書けるってことが、市民メディアの魅力なんじゃないかな。あと、思うんですけど、ここにいる人達はアルファブロガーだと思うんですけど、だからといってブロガーを代表する権利なんかないでしょう。さっきから聞いていると、『ブロガーとは』とか、『これがインターネット』なんていう議論が感じられて、とっても不愉快なんですけど。ま、これは本当に余談ですが...」

怒りの表明に、成宮がとりなした。「で、あなたはブログを書いたり、市民記者をやっているんですか」

「いえ。やってないです」

「そうですか...」。成宮は困り果てた。すると大学教授ブロガーが発言する。

「ぼくはアルファブロガーでも、エリートでもないと思うけど、じゃあ、どうやって発言すればいいのんですか。出来れば教えて欲しいよね。ただひとついえることは、読み手はいい記事を読みたいと思っているだけで、誰が書いたなんてことは気にしていないよ。アルファブロガーの成宮さんはどうなのかな」

「いやあ...」成宮は苦笑する。「確かに僕はアルファブロガーには選出されましたけど、それってあんまり関係ない感じがしているかな。勿論、選出されたときは正直うれしかったけど、それをエリートって思っちゃうなら、ちょっとね...」

「所詮、ブログもネチズンタイムズのような市民メディアもプラットフォームに過ぎないんだよ」。大久保は続ける。「アルファブロガーって持てはやされた連中のほとんどは炎上を経験する。中には、コメント欄を閉じたり、トラックバックを許可制にする。そういうことを経験することで、実はフラットな言論空間が出来上がっている。それがインターネットなんですよ」

「いやあ、面白いなあ。ブログにもいろんな意見があるんだなあ」。鷲尾は無邪気に驚いてみせる。「僕はブログの全てを見ているわけじゃないけど、たとえば眞鍋かおりさんのようなとりとめのない日常を綴ったブログもあるし、その一方で、政治や経済の詳しい論評や、マスコミを批判するブログもある。そういうバラエティーに富んだ世界なのがブログなんだなあ...」

「僕は思うんだよね」鷲尾は続ける。「マスコミって、新聞もテレビもマスコミコミュニケーションなんて言ってきたけど、コミュニケーションなんかなく、ただただ一方的に情報を流してきただけなんだよね。つまり、新聞には読者投稿欄があるけど、そんなものがコミュニケーションじゃないことはみんな知っている。だけど、ネチズンタイムズなら、双方向のコミュニケーションができる。私は、このメディアに期待するんだよね。インターネットっていう新しいメディア。こんなに面白いものはない。今回、僕はマスゴミって言ったことで叩かれた。そして、今日は『インターネットに関してど素人の編集長は引退しろって』叩かれてる。だけど、僕はもう六十六歳。僕が批判されることなんてもうどうでもいいし、

僕を批判する記事を書くために市民記者が増えれば、それでいいと思っている。そりゃ、僕は真実を求めて取材をしてきた。だけど、ほんとのことを白状すれば、聞いたことを書いていただけさ。そこに真実があるなんて感じたことは一度だってない。そんな僕が真実を騙るメディアにいるんだから、叩かれるのはあたりまえさ。そもそも取材することで真実にたどり着くなんてことが、そもそも幻想なんだ。だから、そんな私もマスコミも叩かれていい。それが僕が求めている双方向メディアの実際なのかもしれないよね」

観客席にいた私に、鷺尾の切実な告白が胸に迫ってくる。私は市民記者でしかないが、職業記者である彼の思いと深くつながっているのを感じた。

「今日は僕に『編集長をやめろ』と言った人も野次を言うだけじゃなくって、市民記者登録をしてぜひとも記事を書いて欲しいんだ。市民記事に批判のコメントを載せるだけじゃなくって、自分の言葉で記事を書いて欲しい。私は喜怒哀楽で記事を書いて欲しいって言うけど、私への怒りがキッカケで記事を書いてくれてまったく構わないんです。そして、そういう市民記者たちの思いが綴られた記事がいつしか何万、何十万になったとき、量から質への転換が起こって、この世の中が変わるかもしれない。私はそう思っている。是非とも、批判したり、眺めているだけでなく、ネチズンタイムスの市民記者に登録をして、ぜひとも市民記事を書いてください」

鷺尾は、成宮に目配せをすると、意を決したように一人で立ち上がると、満座の大教室の中を退出して行った。

「鷺尾編集長は、テレビの収録の時間が迫っていますので、中途退席されます」

私は鷺尾の後ろ姿に拍手をした。だが、成宮のアナウンスにかき消されてしまった…。

翌日のネチズンタイムズには、シンポジウムをレポートする市民記事があがった。タイトルは、「鷺尾編集長、引退の危機!？」。その後、一年を待たずして、鷺尾はネチズンタイムズを去ることになった。

(完。原稿用紙423枚)